

## プロペラオペラーボツ

### 【解説】

- ★プロペラオペラー1巻のボツ原稿。文庫一冊分ほどの分量があります。
- ★序章はほぼ本編と同じですが、カイルと出会って以後の展開が全く異なります。金融シーンが長すぎて、戦記物として読めなくなってしまうため、本編では四分の一くらいに縮めました。
- ★この原稿時には「サツキ」という妹がいましたが「あまり存在意義がない」「イザヤが目立たなくなる」などの理由で存在ごと抹消されました。かわいそう。
- ★途中、「セーターに描かれた豚」の挿絵が入りますが、イラストレーターにイメージを説明するためにわたしがエクセルで描画したものです。せつかく描いたので誰かに見せたくて挿入しました。

### 序

「イザヤ、お前、おれと結婚しろ」

いきなり少年は足を止め、傍らの少女にそう告げた。

「……………」

少女も足を止め、怪訝そうな表情で少年を見上げる。

緑の堤防と青々とした川の流れ、西の空を夕映えが包んでいた。

御学問所の学課を終え、迎えにきていた侍従を奇策で出し抜き、ふたり連れだつて道草に成  
功した帰り道、突然すぎる求婚に少女は戸惑った。

「いますぐか」

「焦るな、八年後の話だ。我が国の法律では、十八才から婚姻契約を締結できる」  
「なるほど」

少女はうつむいて少し考え、きりりと唇を引き締めて、真剣な表情を持ち上げた。

「クロトは、わたしが好きなのか」

白いシャツにサスペンダーで吊った半ズボン、背中に黒いランドセル。北川御学問所の制服

を着た黒之宮クロトは、ランドセルの肩紐に両手をあてがったまま、叱りつける。

「思い上がるな。恋愛感情は微塵もない」

「ふむ」

短く応答すると、十才になったばかりにしてはおとなびた仕草で、白之宮イザヤ第三王女は顎を親指と人差し指で支え、再び黙考する。こちらは白いシャツの胸元にリボン、紺色のスカート、背中にピンクのランドセル。日之雄人には珍しい白銀の髪が、夕暮れの風に柔らかくなびく。

物心ついたときには一緒に遊んでいた。イザヤとクロトは六親等離れた遠縁の親戚であり、王族であり、貴種特有の「異能」を持つ似たもの同士だった。

隔絶した知能を持つクロトは十才なのに三十五才みたいなしやべり方をするし、視点を自在に切り離すイザヤは妙に達観した態度でものごとを眺める。同い年の友達は出来にくく、自然ふたりで一緒に遊ぶ時間が長かった。

とはいえ、いきなりプロポーズされるほど親しかったわけではない。

「好きではないのに、なぜわたしと結婚したい」

「先ほどから質問ばかりだな。なにが気に入らない」

「わたしの一生に関わる問題だからな」

クロトは面倒くさそうに後頭部を搔いて、肩をすくめる。

「おれは将来、この国の皇王にならねばならん」

「……………」

「だが黒之宮家は傍系だ。現状のままでは、皇位はお前の弟カズマに継がれるだろう」

「……………」

「だがお前と結婚し、カズマをなんらかの手段で排斥したのちお前の家の婿養子となれば、おれが皇王になれる」

「……………」

「お前が必要なのではない。お前の血筋が必要なのだ。おれが皇王になるために、おれと結婚しろ、イザヤ」

「クロト」

「うむ」

ばちーん、と高い音が堤防に響いた。

クロトの首がねじきれるほど右側へ回り、もう一度ばちーんと響いて、今度は左側へねじきれるほど回り込んだ。

お手本のような往復ビンタを放ったのち、イザヤは右足の膝を自分の胸元にまで引き付け、靴底をクロトの胴体へむける。

「返事だ」

どがっど鈍い音が響き、クロトは一瞬宙に浮き、堤防の傾斜に背中を打ち付けた。

イザヤは凍り付いた表情で、堤防を転げ落ちていくクロトを見やった。クロトはランドセルを背負ったまま左、右、と不規則にバウンドしたのち、堤防の裾で仰向けに横たわり眼球をぐるぐる回転させた。

「金輪際わたしに近づくな、下郎」

背筋をぴしりと伸ばして、イザヤは一喝する。

「もうお前を友達とは思わない、親戚でもない、近寄らば斬る！」

日之雄帝国第三王女の威厳を表情にみながらせ、宮家の嫡男クロトを下郎と呼び、ランドセルを両手で担ぎ直し、怒りを両足に込めて走り出す。

「バカ野郎」 バカ野郎」 バカ野郎」

走りながら、イザヤは夕映えを見上げて罵声をあげた。

「最低だ！ 最悪だ！ 日之雄で最も下劣な男だ」

涙がぼろぼろ、イザヤの両目からこぼれてくる。

悔しくて、イザヤは腕で目元をぬぐいながら、声を枯らして罵声を放ち、涙が止まるまで走りつづけた。

「クロトのバカ野郎」 死んでしまえ、バカ野郎」

夕焼けへ叫びながら、この涙が早く止まることを祈った。

「ぐぬ……………」

回転していた風景が止まり、視界いっぱいが茜色の空に埋まって、クロトはおのれが雑草にまみれ、河原に横たわって夕焼けを見上げていることに気づいた。

「ぬっ……………」

呻きながら上体を起こし、堤防の傾斜の先を見上げる。

誰もいない。ただ夕焼けがあるのみ。背中とおなかと頬の痛みをしかめながら立ち上がり、背中に変形してしまったランドセルを担ぎ直す。

「くそっ。暴力女が……………」

見事なヤクザキックをくらい、堤防から蹴落とされたことを確認しながら傾斜をよじ登って堤の上へ戻ったが、イザヤのすがたはどこにもなかった。

若草の匂いを孕んだ夏の風が、音もなく吹き抜けていた。

『金輪際わたしに近づくな、下郎』

イザヤの言葉が、耳の奥に残っていた。

かなり怒らせてしまったらしい。父母から毎日「プロポーズしろ、イザヤは絶対に受ける、そうしたら黒之宮家も直系になれる」と急かされていたため仕方なく本日決行したのだが、ま

さかこんな結末になるうとは。

「なにが気に入らないというのだ……」

断られるとは思っていなかったため、この事態にどう対処すればいいのかわからない。これまでなにごともおのれの能力で克服してきたクロトにとって、これが人生ではじめての失敗だった。

心中に悔しさを噛みしめて、制服についた草を払い、ひとりで家路を辿った。

明日、学校でイザヤに会ったとき、どうしよう。拒絶の理由を聞いたか、それとも、いきなりの暴力を咎め立てたほうがいいのか。今後の対処法を考えながらの帰路だったが、イザヤはそれから三日間学校に来なかった。

そして、イザヤに会えないまま迎えたプロポーズから三日目の夜。

突然、黒之宮家を皇王の実弟、風之宮源三郎が宮内省高官を伴って訪れ、当主、竹彦に対して「黒之宮家に王位簞奪の意志あり」と断罪した。晩餐の席で竹彦と妻・薫子が「イザヤと結婚してカズマを追い出せ」とクロトをけしかける台詞が使用人の盗聴マイクを通して録音されており、さらにクロトが実際にイザヤへプロポーズしたことも決め手となって、竹彦は抗弁を封じられた。

翌日、竹彦は黒之宮家の皇籍離脱を公式に宣言。

姓を「黒之」に改めると、家を引き払い、鎌倉の別邸へ引越すことに決めた。

新聞雑誌、ラジオには「黒之宮家の意志による臣籍降下」と発表されたが、実態は黒之宮家が引き起こした「大逆事件」——公になれば死罪が適用される国家反逆事件——であり、事実上、皇王家の勧告による「お家取り潰し」だった。

住み慣れた豪邸を追い出され、鎌倉を目指す夜道の途中、クロトは黒塗りの自動車の後部座席で窓ガラスに映るおのれの表情を黙って見つめていた。

突然の事態の進展に頭が追いつかない——ということもない。

ただつまらなそうな表情で、身分と豪邸を失った事実を淡々と受け止めている。

自分でも不思議なくらい落ち着いているのは、いつかこんなふうになる予感があったからかもしれない。なにせ十才のクロトが「使用人の前でこんなことを言ったら大丈夫か？」と心配になるほど、晩餐の席において父母は皇王家の悪口を並びたてていた。

その結果、これだ。

——この父母はアホだ。

父・竹彦と母・薫子の軽率さを、クロトはしみじみと遠くから眺める。思い返せばいきなりイザヤにプロポーズするはめになったのも、薫子が毎晩うるさいからだ。「イザヤはあなたに惚れているわ。プロポーズすれば絶対に喜びます、なにしろクロトはハンサムだし頭もいいし度

胸もあるし」。平民あがりのため他の官家にあれこれと陰口を叩かれていた薫子は、さまざま手段を講じて黒之官家の格式をあげることに余念がなかった。そんな軽拳妄動の行き着いた先が、今回の皇籍離脱というわけだ。

——この父母に頼っている、生きていけない。

——これからは親に頼らず、おれ自身の力で生きねば。

クロトがそんな決意をする傍ら、八才のサツキはいきなり家を追い出されたショックでずつと泣いている。

竹彦はサツキの背を撫でながら、

「大丈夫だ。ぼくには財産もあるし商才も人脈もある。窮屈な王族生活より、羽根を伸ばせる民間のほうがぼくの性にも合っていることだし。なにも心配はいらない。これからは楽しいことしか起こらないよ」

きっぱりそう言い切るが、根拠はなにもない。生まれて以来三十六年、竹彦は王家から歳費と特別賜金を賜って贅沢な生活をしてきた。生きていだけでカネが入るため、自分で稼いだことなど一度もない。

サツキは不安そうに父親の顔を見上げ、それから泣きつ面をクロトにむけて、小さな両手をひろげてすがりついてきた。

「お兄様。怖い」

辛い未来を予感したのか、ひくひくとしやくりあげる。つややかな長い黒髪を撫で、かわいらしいブラウスの背に残った手を置き、クロトは悠然と言い切る。

「恐れるものなどない」

「……………でも……………」

濡れそぼったサツキの蒼氷色の瞳が持ち上がる。クロトにとって、家や身分を失うことはなんでもなかった。自力でカネを稼ぎ、あとで買い戻せばいいだけの話だ。しかしサツキだけは失うわけにいかない。サツキさえ隣にいてくれれば、あとはなにを失おうと平気だ。

「兄の偉大さを信じる」

サツキと一緒にのおれ自身も言葉で励まし、クロトはいつものように、十才児離れた不敵な笑みをたたえてみせた。

一ヶ月後——

一流新聞社が発行する大衆雑誌に『黒之家の犯した恐るべき大逆罪』『イザヤ王女を狙った浅ましい日之雄転覆計画』の見出しが躍った。

黒之家が皇籍離脱したのは自らの意志ではなく、王家直系に自らを組み込み王位を篡奪する計画が露呈したため——とするその記事は瞬く間に日之雄中に広まった。

情報元は、黒之家を裏切って晩餐の会話を録音し王家へ売った裏切者の使用人だった。竹彦

や妻の薫子から冷淡に扱われていた彼は、長期間に渡って黒之家で交わされる会話を小型マイクを通じて皇王家の諜報機関へ横流ししており、満を持してその内容を新聞社に売ったらしい。「皇王陛下へ身の毛もよだつ罵詈雑言」「王太子を排斥し、嫡男クロトを戴冠させる計画」「王位目当てに皇女イザヤ殿下へプロポーズ」等々……。センサーシヨナルな内容は瞬く間に巷に浸透して後追い記事が続出、発売から一週間も経つと「黒之家の大逆罪」を知らぬ八千万の日の雄国民は存在しないほどの歴史的大醜聞となった。

連日連夜、大勢の記者が鎌倉の別邸に押しかけてきた。クロトとサツキは学校に通うことも出来ず、別邸を取り囲んだ数千の野次馬が昼夜を問わず浴びせかける「国賊」「非国民」「売国奴」などの罵声に耐えた。

記事が出てから二週間後、薫子は憔悴しきった表情で離婚届を懷中に忍ばせ、夜中こっそり家を出た。薫子はまだ三十一才、夫と子どもを捨てて有力者と再婚すれば人生をやり直すことができる年齢だった。去っていく母親の背を、クロトは「そういう人間だ」と遠くから眺めるだけだった。

母親が出て行つてからも毎日、野次馬はひどい言葉を邸内へ投げ込み、マスコミは飽きるごとなく黒之家にまつわるあることないことを紙面やラジオにぶちまけた。地獄のような日々を送るうち、サツキは暗くふさがちになり、灯りを消した部屋でじつとうなだれて言葉を話さなくなった。

竹彦も進退窮まっていた。頼みにしていた友人たちも罪人一家と関わるのを避け、黒之家を訪れるのはマスコミと野次馬だけだった。

「ぼくら三人、一緒に死のうか」

無精髭をたくわえ、げっそりとこけた頬を力なく動かし、そんな相談を持ちかける父親へ、クロトは野心あふれる表情で答えた。

「この国を捨て、ガメリア合衆国へ渡りましょう」

これだけひどい状況にありながら、いまだ自信満々な十才の息子を見やり、竹彦は不審そうに首をひねる。クロトは口の端を斜めへ吊り上げ、

「あちらは自由と平等の国だと聞きます。実力さえあれば庶民でも大統領になれるとか。王族しか王になれないこの国よりも、よほど先進的でありましょう。我らが胸を張って生きるにふさわしい土地であるかと」

クロトの言葉をぼかんと口をあけて聞いてから、竹彦は「ガメリア……」と一言呟き、しばらく黙考した。

大公洋を挟んだ大国、ガメリア合衆国。

自由と平等を信奉する議会制民主主義国家。いかなる人種にも門戸をひらく移民大国。強烈な領土拡張意欲を持ち、着々と大公洋に自らの足場を築きつつある世界一の軍事大国。

遠からず日之雄と戦火を交えることが予想される未来の敵性国家に、いまからわざわざ移住

しようというのか。

「ガメリアの対日感情は相当ひどいと聞ければ……」

「差別は受けるでしょう。しかし父上にはカネがあります。彼の国はカネさえあれば地位も身分も買えるとか。金持ちには優しい国ですよ」

とつとつと諭すクロトの言葉が重なるほど、竹彦の目に新しい光が宿りはじめた。はじめは途方もないと思っていた渡洋計画も、一家心中に比べたならまともなものに思えてくる。

「……そうだね。評判は失墜したけどカネだけはある。むこうへ渡って、投資でもやって暮らそうか」

竹彦は久方ぶりに言葉に明るいものを含ませた。クロトも相変わらず、十才児離れた不敵な笑みを口の端にたたえ、

「ぐずぐずしていれば両国関係が悪化し、自由渡航が禁じられるやも。行くならいまのうちです。我らを誰も知らぬ国へ行けば、ただの金持ちになれましょう」

はつきりとそう言い切り、クロトは視線を窓のむこうに据え置いた。父親をけしかけながら、熱い奔流が胸の底から湧いてくる。

——這い上がってやる。

あろうことか、クロトはわくわくしていた。日之雄八千万市民を敵に回しながら、その状況を屁とも思わない。

——むしろ、おれの能力を試すいい機会ではないか。

おのれに桁外れの記憶力・演繹力があることは自覚している。北川御学問所での成績は突出しており、王族・華族・高額納税者の子息から特別優秀なものだけが選ばれる特修生に史上最年少で選抜され、宇田川海空軍士官学校教員による個別指導を受けてきた。現在、士官学校で履修する普通学・軍学の全単位を取得、十六才になったら自動的に少尉候補生として任官が決まっている。あまりに隔絶した知能を持つがゆえ、新聞雑誌にはこれまで何度も「日之雄王家の最高傑作」「未来の連合艦隊司令長官」と書き立てられてきた。

日之雄皇王家は二千六百年に渡って傍系へ積極的に「突然変異」の血を取り込んできた。特に中世期には「特異能力」を持つ女性を皇宮に多く侍らせ、結果、常人離れた能力が発現しやすい家系となった。異能ともいえる力を持つクロトが自分を試すには、旧弊な宮家に閉じ込められているよりも、自由気ままに振る舞える民間のほうが都合が良い。

クロトは胸の高鳴りを抑えられない。

——おれの冒険がはじまる。

そんな予感が爆ぜて、全身が奮い立つ。窓のむこうから聞こえてくる野次馬の罵声さえ、なにやらこれからの自分へのエールのような。

「行くぞ、サツキ、ガメリアへ。おれの力を思い上がった白人どもに知らしめてやるのだ」

クロトによく似た蒼氷色の瞳に涙をいっぱいたたえて、サツキは兄の顔を見上げた。怖くて

たまらない様子だが、小さな手を兄の背中に回し、けなげにすがりついてくる。

「お兄様と一緒になら」

震える声を絞り出すサツキを、クロトはにやりと笑って抱き留めた。この先になにがあるうとも、サツキと一緒に乗り越えていけると思った。

一

「おい、ヤツプが紛れ込んでるぞ！ 黒板が黄ばむ、さっさと追い出せ！」

スーツすがたの紳士淑女でごった返す店内に、そんな罵声が響いた。標的は、男たちに背をむけて一心不乱に黒板にチョークで数字を書きつける少年だった。

「この店はヤツプを雇うのか？ 縁起でもねえ、おれの株まで黄ばむじゃねえか！」

田舎紳士とおぼしいあばた面の太った中年男が、酒臭い息を吐き散らしながら証券取引出張所「マックス・ハーバーの店」マネージャーに文句をつける。

金髪を後ろになでつけ、スーツをラフに着崩したマネージャーは、客たちの歓声やコールや悲鳴で沸き返る店内でもひとときわ響く大声の持ち主にむかって肩をすくめ、

「あれでなかなか使えるんで。黄色いのは伝染（うつ）らねえから我慢してくれ」

「なんだそりゃ？ この店は白人専用だろうが、色つきがいたらこっちの気分が悪くならあ！」  
あばた面は店内の大きな黒板を葉巻の先で示し、さらなる怒声を張り上げる。横幅六メートル、縦二メートルほどもある黒板には「チョークボーイ」と呼ばれる少年が六人ついて、足場を上り下りしながらコーラーが読み上げる担当銘柄の株価を黒板に書き記している。そのひとりが黒髪に黄色い肌、目尻の吊り上がった日之雄人であることが気に入らないらしい。

「肌色は残念だが、頭がたいそう良くてね。手放せないんでき」

「ああ、頭なんか関係ねえ、叩き出せつてんだよ、黄色い猿を！」

ふたりの言い争いなど構うことなく、店内に詰めかけた五十数名の客たちは、チョコレートボーイが書き付ける株価にじいっと目を凝らし、時期を悟るや大声を張り上げる。

「デンバー・ダイナミクス、二百株買いだ！」「アーサー・アンド・カンパニー、百株売り！」  
「ちくしょう、おれも男だ、トマス・エナジー、二千株買いい！」

客の面前に並んだブローカーたちは客の売り買いをひとつひとつ聞き分けて、受話器のむこうの中央証券取引所へ伝えていく。自らの財産を賭け、熱気渦巻く狭い店内は煙草と葉巻の煙で白くかすみ、体臭とアルコールの匂いでむせかえるほど。そのなかをチョコレートが黒板に削れる音と、「ティッカー」と呼ばれる通信装置が現在の株価をパンチングしたテープを吐き出す音、客たちの悲鳴や歓声、それからあばら面の罵声が響き渡る。

「おい、聞こえてんだろヤツプ！ お前に言っただよ、黒髪で目の吊り上がったガキ！」

無駄によく通る声が、日之雄人の少年の背に突き刺さるが、少年は知らん顔でチョコレートを握り、コーラーの呼び上げる五十の担当銘柄の値動きをよどみなく黒板へ並べていく。

無視されつづけていることに腹を立て、さらなる大声を張り上げようとしたあばた面の視界に、高価そうなスーツをぴしりと着込んだ投資家が映り込んだ。

「この店をはじめてか？ 少し黙ってくれたまえ。彼はわたしの友人でね」

品の良い白髭をたくわえた五十代ほどの白人紳士を、あばた面は半口をあけて見上げる。着ているスーツも革靴も一級品、どう見ても上流階級に属するガメラア人が、まさか日之雄人の肩を持つなんて。

「あんだ、正気か？」

問い直すと、傍らにいた粗野そうな投資家たちが、あばた面を一喝する。

「さつきからうるせえんだよ！ 文句あんらお前が出ていけ！」「あのヤツプは特別枠だ、黙って見てろ！」

『マックス・ハーパーの店』の常連たちが次々に、あばた面へ罵声を返す。ひとりではなく複数のガメラア人が日之雄人（ヤツプ）に味方するなんて、ガメラア国内で見たことのない光景があばた面の眼前にひろがっている。

「気にすんな小猿野郎（リトルモンキー）、今日も頼むぜ！」

常連のひとりが励ましを送るが、少年は応援さえも背中で受け流し、まるでオーケストラの指揮者のように優雅に片手を動かして、今日の株式市場が編み上げる企業価値のタペストリを黒板へ書きつける。

あばた面にはこの出来事の意味がわからない。有色人種でも最も生意気で卑怯でずる賢い日之雄人（ヤツプ）が、上流白人（ワस्प）から応援されている。しかもたかがチョコレートボーイの分際で。

「引けたら、意味わかりますよ。生意気で無愛想なガキだが、頭の出来が普通じゃねえ」  
マナージャーがにやにや笑いながら、茫然自失のあばた面へそう言った。あばた面は間の抜けた表情で、マナージャーと日之雄人の少年の背を交互に見比べた。

午後四時、今日の証券取引が引けて、高揚したものの落胆したものの老後の貯金を失ったもの、悲喜こもごもの客たちは三々五々と帰路につく。長時間コーラーの声に神経を研ぎ澄ませていたチヨークボーイたちも疲れた表情で足場を降り、ハンチング帽をかぶって賃金十ドルをマナージャーにもらい、店を出て行く。掃除がはじまった店内だが、日之雄人の少年はただひとり木組みの足場に残ったまま、黒板に残った今日の終値を見渡している。

「……………」

身なりの良い常連たちが三名、固唾を呑んで少年の様子を見守っている。マナージャーに言われてこの場に残ったあばた面だが、この奇妙な光景の意味がわからない。

二分ほど黙って黒板を見つめていた少年は、ようやく足場を降りて自分のハンチング帽をかぶり、マナージャーへ片手を差し出す。

マナージャーは今日付の経済新聞と賃金十ドルを手渡しながら、傍らのあばた面へ意味ありげな眼差しを送り、少年に質問した。

「今日、上にブレイクした銘柄は？」

少年は「またか」と言いたげな胡乱な目つきをマナージャーへ一度投げ、答える。

「……ダズニー。五十八・二五、五十五・一九、六十三・二」

あばた面は目を見ひらく。マナージャーはにやりと笑い、テストをつづける。

「同じく、下にブレイクしたのは？」

「……C B B I。二十八・五五、三十二・五八、二十六・二」

この場に残った常連三名がうつとりとその答えを聞き、その傍ら、あばた面は黒板の終値を見やり、答えが合っていることを確認して、あんぐりと口をひらく。いま言った銘柄はふたつとも、他のチヨークボーイの担当銘柄だ。この少年は五十もの自分の担当銘柄の値動きを黒板に書き記しながら、他の二百五十銘柄の動きまで観察し正確に暗記していたというのか。

常連のひとりが感嘆の表情とともに、少年に紙袋を手渡した。

「頼まれていたものを買ってきた。確認してくれ」

紙袋に新品のノート十冊、鉛筆二十本、消しゴム三つが入っていることを確認し、少年は無言で領いた。

常連は咳払いしてから、少年の手に十ドル札を三枚握らせ、顔を近づけて小声で、  
「……きみなら、いま、どこを買う？」

あろうことか、三回りほど年下の少年に、株式指南を頼み込む。

日之雄人の少年は十ドル札三枚をポケットへねじこみ、流ちょうなガメリア語でいつものよ

うに前置きを入れる。

「……おれは神ではない。外れても文句を言うな」

「わかってる。参考にするだけだよ」

尊大な少年の口ぶりを咎めることなく、三人の常連は内緒話をするように顔を寄せてくる。

少年は黒板へ書き込まれた数字の大海へ目を戻し、これから最も大きく値動きするであろう銘柄を大海原から抽出する。

「今日、いきなりラムゼン製菓が一ドル五十セントあげた。ケルフォニアに風疹流行の兆候があり、ラムゼンは特に風疹に強い製菓会社だ。有効な新薬の開発に成功したため、この一年、まったく値動きのなかった銘柄が突然上げたと推察される」

おお……と常連たちは顔を見合わせ、少年の肩を叩く。

「いつもありがとう。本当にすごい記憶力だ。儲かったら、分け前をあげるよ」

「……繰り返す。相場に絶対はない。外れることもある」

「わかってるよ、自己責任でやるから安心してくれ。相場を完璧に予測する相場師なんて、古今東西存在しないさ」

オーダーメイドのスーツに身を包んだ金髪、碧眼の大人たちが、みすばらしい身なりをした日之雄人の少年を取り囲んで口々に褒めそやし、今後の協力を懇願する。呆気に取られて自失するあばた面の傍らで、マネージャーは皮肉めいた笑みを口の端にたたえ、

「一年くらい前、チョークボーイをやらせてくれ、ってあいつが来たんだ。もちろんヤツプだから追っ払ったよ。余計な面倒抱えたくねえし、客も嫌がるに決まってる。けどあいつは店の外に蹴り出しても戻ってきて『一ヶ月分の主要銘柄三百の値動きを暗唱できる』って言い張りやがる。あんまりしつこいで、試しにオーベル石油の一ヶ月分の値動きを尋ねたら、その場で折れ線グラフ描きやがって。そんなデータ、証券会社に問い合わせねえと出てこねえし、合ってるか確認しようもねえし、しようがねえから五十銘柄分の今日の終値を暗唱しろって言ったら、頼みもしねえのに三百銘柄言いやがって。ああ、その場で雇ったね。肌色はアレだが使えるチョークボーイは少ねえし、あとで確認したら折れ線グラフも正確だった。年齢尋ねたら十一才だっていうからもう一回たまげたね。おれが十一のころなんて頭にはうんことちんこしか入ってなかったのに、あいつは相場を丸ごと頭に収めてやがる。働きはじめて最初のころはあんたみたいな輩のブーイングもひどくって、店が終わると殴られたりしてたが、アザだらけの顔で次の日も平気で店に来るし。すげえ生意気で偉そうだが、根性も座ってるし仕事は正確だし、いまじゃこの一年分の三百銘柄の値動き全部暗唱できんだぜ。神かよ。そんな頭があるんならさっさと株やれって話だが、しばらくチョークボーイしながら相場の勉強したいらしくて。変なやつだよな。おかげで店は助かってるが、まあそのうち誰かに引き抜かれてフォール街へ行くだろうな。あんな優秀なんだから、こんなちゃんけな店にいつまでもいねえだろ」

おしゃべり好きのマネージャーが並べる言葉を、あばた面は信じられないという表情で聞く

しかない。

「なんだそりゃ。三百銘柄の一年分の値動きを暗唱？ デリー・アリババでもそんなこと出来ねえぞ」

一代で小国の国家予算に匹敵する財を築いた伝説の相場師の名前を口にしたとき、あばた面の目の前を少年が通り過ぎた。

煤けたハンチングに、だぶついたコート、ほつれだらけの木綿のシャツに安っぽい布靴。サスペンダーで吊った港湾労働者むけのズボンは、膝のところが破れている。

「お、おい、お前……」

おずおずと声をかけるが、少年はあばた面の言葉など聞こえないかのように、足も止めず出入り口のドアノブに手をかける。

あばた面は緩めたネクタイを締め直し、背筋を伸ばすと声を張り上げ、

「わ、わたしはゲリー・トラフォード！ ゲリー運輸の社長だ。良かったら、きみの名前を覚えてくれないか？」

自ら名乗り、名を尋ねる。マネージャーの言うとおりの能力を本当に持つとしたら、この黄色い少年は近い将来、世界最大の金融街、フォール街の著名人になるかも。

少年は横顔だけであばた面を振りむいた。その顔は痩せこけてアザだらけ、泥と埃で汚れているが、なぜか澄み切った気品と風格が色濃く漂う。

他人を寄せ付けない透明な皮膜じみたものをまとい、貴族的な威厳さえ醸しながら、少年は口の端に不敵な笑みをたたえた。

「下郎に名乗る名は持たん」

白人へむかい、みすばらしい身なりの有色人種はそう宣告し、傲慢な笑みを崩すことなく店を出て行く。

ちりん、とドアベルが鳴る音を聞いて、マネージャーは苦笑いを傍らへ送った。

「……な？ すんげー偉そうだろ？」

ゲリーはその場に立ち尽くしておのきながら、閉ざされた扉を見つめるしかない。  
なんなんだ、あのガキは。

ガメリア合衆国西岸の大都市、ロサンゼルス。

高層建築群の狭間から、二月の日差しが灰色の路面へ斜めに注ぐ。乾ききった大気の底に、自動車の排気ガスと石炭ストーブの煤煙。なるべく肌色が見えないようハンチング帽を深くかぶり、十二才の黒之クロトは常連客から受け取った紙袋を小脇に抱え、ひとり家路を辿る。

広い街路を行き交う路面電車、通学バス、たくさんの自動車。色とりどりの看板を掲げた服飾店、アイスクリーム店、レストラン、レコード屋が居並ぶ通りから、パンの焼ける香ばしい

香りが漂ってきて、クロトの空きつ腹がぐうと鳴る。ショーウインドウに並んだパンを買い取るのは白人のみ、有色人種が店に入ったなら叩き出されるか通報される。生活必需品を買うには、有色人種専用の店へ行くか、今日受け取った文房具のように白人の知り合いに頼んで買ってもらおうしかない。公園や図書館、公衆トイレなど公共施設も人種の区分けがあり、違反したなら罰金が科される。

「自由と平等の国」「地上で最も公正な議会制民主主義国家」というガメリア合衆国のスローガンは「但し白人に限る」と但し書きがついていた。民主主義の恩恵は白人にのみ与えられ、その他の有色人種は人権のない「家畜」に等しい。白人は有色人種を蹴ろうが殴ろうがお咎めはなく、逆の場合は監獄へ送られ十年近い懲役をくらう。ガメリア合衆国の正体は、白人を頂点とする厳密な階級（カースト）制国家であることを、クロトはこの国へ辿り着いてからの一年三ヶ月で思い知った。

——実に腹立たしい。

差別的な扱いを受けるたび、外見は平気を装っていても、内面は煮えくりかえる。今日もあばた面の中年から背中にしつこく罵声を浴びせられ、飛びかかってチョークを目玉に突き刺してやろうかと何度も思った。だがそれをやれば投獄されるのはこっちだ。できることは感情を排除し、差別するものを心中で蔑むしかない。そしていつか手痛いしつぺ返しをくらわせてやろうとここに決める。いまできるのはそれだけだ。

自分をなだめながら無言で歩み、やがてクロトは造船工場の建ち並んだ港湾地区に差し掛かった。昼夜を問わず動きつづける屋根付き乾ドッグ内では、いつか日之雄連合艦隊と戦うことを目的として、新たな軍艦が建造されているはず。沖合にはガメリア大公洋艦隊に所属する軽巡二隻、駆逐艦八隻が演習海域を目指し海原を蹴立てていた。

不意に空に影が差した。

同時に轟然としたプロペラ音が、クロトの頭上から降ってくる。

見上げたなら、茜色の空を切り裂くように、全長二百七十メートルを越える巨大な飛行戦艦が二隻、周囲に駆逐艦十八隻を侍らせて、高度千二百メートルを飛行していた。

「ゴルゴロス」「ヴォイヴオッド」。

ガメリア大公洋艦隊、第一飛行戦艦戦隊所属の飛行戦艦。

巨大な浮遊体が吊り下げるのは、総重量五万トンに及ぶ水上艦艇を逆さまにしたような異形の船体だ。

両舷から突き出した半円形の砲座には四十センチ半旋回主砲が両舷四基十二門、さらに対空機銃座と垂下砲塔を船体各所に針鼠さながら配置して、船体底部にはふたつの巨大な爆弾槽が半筒型に張り出している。あの開閉口がひらいたなら、三千発を越える一トン爆弾が地上目がけて降り下りて、都市も要塞も跡形残らず焼き払う。

ちっ、とクロトは舌打ちする。

認めたくはないが、現在の世界で最も強力な「破壊兵器」が、ガメリア大公洋艦隊だ。

日之雄では打倒ガメリアを合い言葉に、国家予算の三割を軍艦建造費に充てて世界に誇る大艦隊、「日之雄連合艦隊」を拡張中だが、どんなに日之雄が頑張っても相手がガメリアでは残念ながら勝負にならない。

十五日間の航海を経てガメリアへ渡った当初、クロトは父親と妹と共に主要都市を巡り歩き、大規模な自動車工場や製鉄所、造船所、油田地帯、大地の彼方まで広がる穀倉地帯をこの目で見て、ガメリアの国力を肌で知った。いまは、認めざるを得ない。

——戦争になれば、日之雄は物量で押しつぶされる。

特に鉄鋼生産力と造船力に十倍以上のひらきがあるのが致命的だ。

日之雄連合艦隊がいくら敵艦を沈めようが、ガメリアはすぐにその傷口を修復し、新たな艦隊を編成して押し寄せてくる。艦隊決戦に勝ったとしても、敵は生産力を使って負けそのものを無効化するため、局地的な勝利をいくら重ねても意味をなさない。生産力に乏しい日之雄は戦いが長引くほど消耗を強いられ、後方から尽きることなく鋼鉄と軍艦が送り出されるガメリアによっていつか呑み込まれる。

戦えば勝てることはわかっているから、ガメリア合衆国は狡猾な手段を使って日之雄を挑発しつづけている。日之雄の対外政策に口出しし、日之雄が保有する艦船の数に制限を加え、日之雄と敵対する「鄣国」へ密かに飛行機部隊を送り込み、「打倒ガメリア合衆国」と日之雄国内の機運が高まるよう仕向けているのだ。戦争すれば国が減びることは日之雄政府もわかっているから外交での決着を求めているが、ガメリアは居丈高に一方的な要求を突きつけるだけで話し合いにならない。武力に優るものは、劣るものへいくらでも好きなだけ要求を突きつけることができる。弱者が受け入れたら次はさらなる無茶を突きつけて、断ったなら、それを理由に殴りつける。

*Might is Right.*

腕力は正義。

それがガメリアの隠れた国是だ。強ければ、何百万人の無辜の民を殺そうが、罪に問われることはない。弱ければ、何千万人を救うための戦いだったとしても、断罪される。クロトたちが生きるのは、そんな残酷で理不尽な世界である。

——だが、やられっぱなしでいいのか。

——黄色い猿と呼ばれることを受け入れるというのか。

——おれは、いやだ。

クロトの気持ちを嘲笑うように、夕焼け空を歪ませながら、飛行艦隊は西を目指して飛び去っていく。一刻も早く日之雄と開戦し、爆弾槽を大都市めがけてひらいて、黄色い猿どもを皆殺しにしたい。そんなガメリア兵士の声が聞こえてきそうな、世界最強艦隊の自信に満ちあふれた飛び方だった。

腹の底から悔しさが突き上げて、知らず、クロトは両拳を握り込む。

——日之雄人を舐めるな。

日之雄の王族だったころは、抱いたこともない思いだった。ガメリアという国へ来て、肌の色で差別を受けるようになり、クロトははじめて日之雄人としての自分を意識していた。

——どうすればガメリアに勝てる……？

身の丈を遙かに越えた煩悶に苦しみながら歩みをつづけ、クロトは移民が多く暮らす、港湾施設の外縁にへばりついた貧しい地区へと入っていった。

吹き抜ける潮風に、腐った野菜や魚、それにいがいがした石炭の匂いが濃く薫る。

廃材とベニア板、スレート屋根を組み合わせた掘っ立て小屋（バラック）が七、八十ほど建ち並ぶ黄色人種居住区では、日之雄人や鄙人、サイアン人があちこちで焚き火を起こし、虚脱した表情で炎を見つめている。一攫千金を夢見てガメリアへ渡り、夢破れて、いまは港湾施設の肉体労働で暮らす彼らの身体には、必ずといっていいほど鞭打たれた跡がある。白人の現場監督に付けられた傷だ。人間の抜け殻のような彼らを横目に見ながら、クロトは有色人種専用の商店で牛乳と残り物の丸パンをふたつ買い、少し外れた場所にある「我が家」へ辿り着く。

あり合わせの木材にベニア板、トタン、スレートを組み合わせた、ただ雨風を防ぐだけの雑な造り。布地を垂らした入り口をくぐると、なかは四畳半ほど。からっぽの麻袋を敷き詰めた床では、もらいものの毛布に身をくるんだサツキが暗がりのなかで横たわっていた。

「ただいま。戻ったぞ、サツキ」

声をかけると、サツキはぼつと毛布をはねのけ、クロトに飛びついてくる。

「お兄様。お帰りなさい。お兄様」

数年ぶりに再会したように、サツキは兄の帰宅に喜びを隠さない。小さな両手をクロトの背中に回し、笑顔を何度も兄の胸に擦りつける。朝からずっとこうして小屋から出ずに兄の帰りを待っているから、兄が仕事先から戻っただけで奇跡みたいに大喜びする。

「夕食を買ってきた。見ろ、パンと牛乳だ。ノートと鉛筆は白人に買ってこさせた」

ふんぞり返って紙袋を差し出すと、泥と埃で汚れたサツキの小さな顔が、喜びにぱあっと輝いた。

「お兄様、白人の友達がいるの？」

「ああ。おれの言うことはなんでも聞けど。今度お手とお座りをしつけてやる」

常連に聞かれたら殴られそうな言葉だが、サツキが喜ぶならいいだろう。

「やっぱりお兄様はすごい。サツキの誇りです」

十才児らしいたどたどしい言葉を並べて、汚れた身なりのサツキはうれしそうにパンを頬張り牛乳を飲む。おいしい、おいしいというその言葉が、クロトのささくれだった心を慰めてくれる。イヤなこと辛いことも、サツキの笑顔が全部ぬぐい去ってくれて、明日へ立ち向かう勇気をくれる。

「はっはっは。そうだ。おれは偉大だ。このちさらに偉大さを増していくぞ。お前もじっくり見ているがいい、いまはこんな環境だが、すぐに大金を稼ぎ白人どもを下僕にしてやる」  
ふんぞり返って、大それた言葉を轟然と紡ぐと、サツキは笑顔で拍手した。

「そうです。お兄様はすごいから、すぐお金持ちになれます！」

クロト自身、そんなことができるとは思っていないが、サツキがそれで喜んでくれるなら、うそっぱちの夢でも胸を張って語ろうと決めていた。

父、黒之竹彦が三ヶ月間のガメリア周遊を終え、満を持してフォール街の株式市場に挑み、あえなく全財産を失って、高層ビルの屋上から投身自殺を遂げてから、すでに一年以上経とうとしている。貧民むけの共同墓地に父の亡骸を収めたのち、クロトは腹巻きに隠し持っていた現金を使って大陸横断鉄道に乗り、ロサンゼルスにある日系移民の互助会を訪れ、この掘っ立て小屋をあてがってもらった。

父親に頼る気ははじめからなかった。自分で働いてカネを得るしか、ここからのしあがる方法は無いと覚悟を決めていた。父も母も失ったいま、クロトはようやく自分だけの冒険がはじまったことを自覚した。

ガメリアへ渡った当初から、株式相場で稼ぐことを決めていた。身分も家も失われ、持ち物はおのれの頭脳と度胸だけというこの現状、一攫千金を狙うなら相場しかない。

クロトは竹彦と一緒にガメリア全土を巡りながらずっと経済新聞に目を通し、主要銘柄三百の値動きをノートに書きでまとめていた。これらの値動きを正確に記憶することで、市場全体の傾向（トレンド）を体得できると思った。その努力はロサンゼルスを訪れた翌日に「マックス・ハーパーの店」で報われ、チョークボーイの職を得たクロトは以来一年、仕事をこなしながら株式相場を記憶に取り込み、その巨大な怪物の「習性」を体得しようと努めている。

現在、竹彦がひらいたロサンゼルス銀行の口座に六百ドルほど預金している。株式投資に挑むには、少なくとも十萬ドルは欲しいのだが道のりは遠い。

「カネを貯めて、いつかフォール街で大勝負に出て、父上の仇を取ってやる。楽しみにしているサツキ。ガメリア人から大金をふんだくって、日之雄に凱旋帰国してやるからな」

「はい。お兄様なら絶対できます」

クロトは妹と笑みを交わし、ちびた蝋燭に火を灯して木箱にノートを広げ、今日の主要三百銘柄の終値を鉛筆で書き付けていく。それを終えると、今度は今日付の経済新聞をひらいて各部門の動向をチェック。めぼしい動きがあったなら、これもノートに転載していく。

屋内とは言っても、外と変わらないほど寒い。コートを着たまま、時折かじかむ手に息を吹きかけ、クロトは遅くまで勉強をつづける。サツキは兄にびたりと身体を寄せて、自分の体温を暖房にする。

サツキに守られ、クロトはこれまで書き上げた三十冊近いノートの記述を見比べながら現在

の世界情勢、金融状況、各企業の実績を俯瞰して、今後の値動きを演繹しつつづける。

どうしようもなくまぶたが重くなった夜更け、サツキと同じ毛布にくるまり、お互いにはすがりあう。片方がいなくなれば、もう片方も凍死する。辛くても生きていくことが、大切なひとを守ることに繋がっていた。

夜遅く、サツキは泣きはじめた。

「お兄様。怖い」

クロトは妹の小さな手に両手を回した。けなげに振る舞っているが、サツキはただの十才児であり、つい一年半ほど前まで宮家内親王として赤坂の高級住宅に住んでいた身分である。生まれて以来ずっと召し使い付きの豪邸で連日フルコースの料理を味わいふかふかのベッドで眠っていたのが、わずかな期間に異国の地で差別待遇を受けながらドアも暖房もないあばら小屋に住むはめになり、まともな精神を保っているだけでも奇跡だ。

——サツキだけは失わぬ。なにがあっても。

そう心に決め、クロトはいつものように、不敵な笑みをたたえてこう言う。

「恐れるものなどない。兄の偉大さを信じよ」

尊大な台詞を、サツキと自分自身へむかって投げる。

「おれはここから這い上がり、フォール街を牛耳ってやる」

サツキの嗚咽は、止まらない。震える背中を撫でながら、優しい口調で告げる。

「おれの人生は必ず伝記になる。二千年後も読み継がれる貴種流離譚の完成を、一番近くから見ている」

堂々と大見得を切って、いつものように暗がりのなか、大胆不敵な笑みをたたえる。

猿と呼ばれてへこんでいるヒマなどおれにはない。へこむくらいなら、無理矢理にでも笑みをたたえ、無謀で傲慢な夢を語るほうがよほどいい。

「いなくならないで。お兄様」

サツキはひくひくと泣きながら、クロトの胸に顔を埋める。

「お兄様はここにいて」

不安そうな泣き言が、また届く。

「おれはいつもサツキと共にいる」

「……………」

「信じろ」

「……はい」

ようやくサツキの嗚咽が止まり、小さく痩せ細った妹を胸に抱いて、クロトは暗闇をにらみながら、これからの方策を考えていた。スレート屋根の隙間から、わずかな月明かりが差し込んで、すがりあう兄妹へ優しい光を投げかけていた。

翌日——

午後四時に終値が出て「マックス・ハーパーの店」の客たちもいつものように悲喜こもごも、はかない溜息や熱い鼻息を吐き散らしながらフロアを出て行く。

木組みの足場に上ったまま、仕事を終えたクロトはいつものように三百銘柄の終値を暗記して、マネージャーから経済新聞と賃金を受け取り、ハンチング帽をかぶった。

すると常連三人がクロトを取り囲み、興奮した顔を近づいてくる。

「ラムゼン、爆上げじゃないか！おかげで大もうけだよ！」「きみを信じて良かった、今日だけで一万三千ドルの儲けだ！」「まだ買いか、きみならどうする？」

勢い込んで、身がかがめ、目線をクロトに合わせてくる。クロトはいつものように無表情を保ったまま、片手を差し出す。教えてもいいが、分け前を寄越せ。

五十代くらいの男性がクロトの無言の要求を察して、百ドル札を十三枚、寛大な笑顔と一緒に握らせる。

「……明日も上がるが、今日のような爆上げではない。あさつて以降はケルフォニアの風疹次第。現状、予想ほど流行していない。風疹の情報に耳を澄まし、収束しそうなら売りだ」

予測を告げると、三人は破顔して、クロトに握手を求めてくる。素直に応じて、クロトはハンチングの鍔を片手で直し、店を出た。今日だけでいままでの貯金の約二倍が入った。クロトの評判は徐々に近隣の投資家たちに広まっている。

街路へ出て、そびえ立つ高層ビルを見上げた。

すれ違った白人の少年たちから「国へ帰れ、ヤップ！」と罵声を浴びせられたが、クロトは一瞥もくれないことなく、ただ高層ビルを見上げつつける。

順調に稼いでいるものの、胸の内は晴れない。

——大きく稼がなくては、ジリ貧だ……。

儲けの10%を口約束でもらうだけでは、資金を貯めるには心許ない。そろそろチョークボイを卒業し、貯めたカネで自分も証券を買う側に回るべきだが、同時にそれは破滅のリスクも伴う。クロトは現在の自分の弱点を自覚していた。

——おれには経験が足りていない……。

株式取引の場数を踏むことなく、自分を過信して大勝負を挑めば、父親のように高層ビルから身を投げるはめになる。サツキを養わなくてはならないクロトは、絶対に破産するわけにはいかない。

大成した相場師のほぼ全てが、若い頃に株式相場に挑んで何度も破産状態に陥り、それを糧にして自分だけの投資哲学（メソッド）を築き上げ、巨万の富を得るに至った。頭が良いだけで億万長者になれるほど甘い世界ではない。株価暴落で痛い目に遭ったどこかの国の物理学者が言ったように「星の運行は計算できるが、人の狂気は計算できない」。三百銘柄の一年分の値動きを暗唱できても、大海の潮流のごとき茫漠としたトレンドが把握できるというだけで値

動きを確実に予測できるわけでもない。だからはじめは小さな額をちまちまと投資し、失敗と成功を繰り返しながら、いつか来る大勝負の機会を待つしかない。

クロトは溜息をついた。先行きはまだ長い。できれば早いところ大きく当てて、サツキをまともな部屋に住まわせてやりたいが、それにはあと三、四年はかかりそうだ。

——あの小屋で、あと三年……。

サツキは生きられるだろうか。このところ小屋の外に出るのを嫌がり、ずっとあの不衛生な暗がりでも毛布にくるまって、朝から晩まで兄の帰りを待っている。本当は有色人種むけの学校に通わなければならぬのだが、通りを歩くたびに差別的な言動を受けるのを怖がり、この九ヶ月間ほど引きこもりっぱなしだ。一刻も早く大金を稼いで、まともな家を買って、日の光のもとで栄養のあるものをおなかいっぱい食べさせてやりたい。

「憂いた表情もできるのだね、黒之クロトくん」

高層ビルを見上げながら物思いにふけていたクロトの耳朶を、いきなりそんな言葉が打つた。

「てつきり感情を排しているのだと思っていた。もしかして妹を気遣っているのかな」

ぎん、と尖らせた視線を道の先へ送る。

ひとり——

世界から切り出されたように美しい青年が、輪郭に陽炎を立てていた。

微風になびく少し長めの金髪の下、眼鏡の奥の碧眼が、底知れない深みをたたえてクロトをじつと見据えている。

年齢は二十代前半くらいか、仕立ての良い、茶色に縦縞の入ったスーツ、顔が映りそうなほど磨かれた革靴。人間というより氷像といわれたほうがしっくりくる、生物の匂いの希薄な佇まい。ひとめでわかる、上流白人（ワस्प）だ。

不意にクロトの耳に、妙な旋律が届いた。美しいけれどあちこちに不協和音を編み込んだ破壊的調のメロディ。楽器を持つてもないのに、青年を通じてクロトの意識へ哀感を孕んだ破壊的な旋律が伝う。

——こいつ、危ない。

それを直感する。関わらないほうがいい、とクロトの内奥が警鐘を鳴らす、なぜかその場から動けない。

クロトにも劣らないほどの無表情を保ったまま、青年は言葉をつづける。

「評判を聞きつけ、三日前からきみを観察していた。ぼくはカイル・マクヴィル。相場師だ。きみと組みたい」

「……………」

「きみの家まで送ろう。用件は道すがら話す。乗りたまえ」

「……………」

カイルは路脇に駐めた赤いオープンカーへ歩み寄り、助手席のドアをひらく。

利回りや売却益を目的に株式を購入するものは投資家と呼ばれ、株価の変動によって利潤を得るものは相場師と呼ばれる。両者の間に明確な線引きはないが、より攻撃的でギャンブル的な取引を好む投資家を相場師と呼ぶことが多い。

クロトは気に入らなそうにカイルを睨んだまま、無言でゆっくり本革張りの座席へ小さな身体を滑り込ませる。一瞬、直感的にこの青年を拒絶しそうになったが、少し冷静になってみれば、これはチャンスだとわかる。

——白人の相場師が釣れた。

——僥倖だ。乗らない手はない……。

道行く人間たちが不審そうに、真新しい高級オープンカーの助手席に座る貧しい身なりの日之雄人をじろじろと見て行く。運転席に座ったカイルがエンジンをかけ、車はゆっくり、広い道路へ漕ぎだした。

低いエンジンの鼓動音が足下から伝ってくる。カイルは細かくギアを調整しながら、眼鏡の蔓を人差し指で押し上げ、語りかける。

「妹さんはこころの病気のようなだね。貧しく心細い環境にすることがストレスになっている。

きみは一刻も早くカネを稼ぎ、まともな家に住みたい。間違いはあるかな？」

「……………」

そのとおりだが、素直に頷くのも悔しいので、クロトは前だけ見据えて返事しない。

「ぼくはきみの頭脳を利用してカネ儲けがしたい。見返りとして、きみに相場師のノウハウを教えよう。きみは相場師として成功できる資質を持つが、経験が足りていない。いまのままフオール街へ身を投じたなら骨の髄まで食いものにされる」

心中密かに抱いていた不安をずばりと言い当てられ、クロトは面白くない。不満を表情に現したまま、黙り込む。

「まずは練習するといい。フオール街の前哨戦としてぴったりの場所がある。今日中に妹を連れてあの小屋を出、ぼくとラスベガスへ行こう」

「……ラスベガス？」

「頭を使えば、チョークボーイ一年分の給料が一晚で稼げる」

ハンドルを握るカイルへ一瞥を送り、クロトは内心で首をひねる。

——信用できるか？

身なりは良いし物腰も爽やかだが、正直だいぶうさんくさい。だが、贅沢もいえない。この国では白人の協力者がいなければ、満足に買い物さえできない。それに投資で稼いでいるのなら、相応の経験を積んでいはずだ。

——ひとまず手を組み、カネを稼ぎつつ、この男の経験値を吸収する……。

そう決め、カイルへ目をむけ直す。ラスベガスで手っ取り早く稼ぐとすると。

「ギャンブル？」

「いかにも。ブラックジャックは知っているかな？」

クロトは首を左右に振る。トランプ遊びなど、興味を持ったこともない。

「ルールを教える。きみの能力を最大限に活用できるゲームだよ。初歩的な株式取引の要素も含んでいる」

「……日之雄人が、カジノに入れるのか？」

カイルは親指で後部座席を差す。クロトが首を回すと、一流ブランドのロゴが入った大きな紙袋が三つあった。

「レッスン一。金持ちの格好をしていれば日之雄人でも歓迎される。ガメリア人は肌色よりも財布の中身を優先するんだ」

クロトは紙袋から子ども用のスーツとドレス、それに高価そうな外出着、普段着を数点引っぱり出しながら、カイルの言葉を片耳で聞いた。確かに、父親が存命だった三ヶ月間は、ガメリア国内を周遊しながらそれほどひどい差別は受けなかった。あれは服装で富裕層だと判断されたから、白人の経営するレストランもホテルも利用できたのだといまにして悟る。

衣類を紙袋に戻し、カイルへ尋ねる。

「……見ず知らずのおれに、なぜここまでする」

「不満かな？」

「有色人種と組めば、あんたの評判に傷がつく。デメリット覚悟でおれの機嫌を取る理由はなんだ」

詰問すると、カイルは楽しそうに笑った。

「レッスン二。相場師に評判は関係ない。あれは噂話<sup>ウソ</sup>が生き<sup>メ</sup>がいの暇人<sup>アホ</sup>が気に掛けるもので、ぼくら相場師はむしろ悪評があるくらいがちょうどいい。きみを味方につけたい理由はひとつ」カイルは一拍の間を置いてから、語調を低くした。

「倒したい敵がいる。ぼくひとりでは敵わないから、有能なパートナーが必要だ。ぼくらは最強のバディになれるよ、黒之クロトくん」

クロトは黙って考えた。カイルの話をどこまで真に受ければいいのか見当がつかない。

「なにか不満？」

妖しい微笑をたたえるカイルへ、クロトはぶっきらぼうに問いかける。

「敵とは、どんなやつだ」

「賢く、強大で、見えない。指先ひとつで大統領の首をすげ替え、マスコミを扇動して大国を戦争に巻き込み自分だけが肥え太る、フォール街の王。世界中の戦争の起源がこの『王』だ。やつを倒さねば世界中で罪のない数千万人が死傷する」

クロトは口をへの字にしてカイルの言葉を頭のなかで二度ほど転がし、

「あんた、コミックマニアか？」

「残念ながら現実でね。ぼくは現在『王』のおかげで一文無しだ」

「……………一文無し？ あんたが？」

とてもそうは見えないが。

「相場師にはよくあることだよ。ちなみにきみらの服はブレスレットを売って買った。……………話が盛り上がってきたところ悪いが、着いた。つづきはサツキ姫を乗せてからしよう」

いつのまにか車は港湾地区の黄色人居住区前に駐まっていた。貧しい身なりの日之雄人が、突然現れた高級スポーツカーを恨めしげに見やり、助手席から降りてきたクロトに気づいて目をみひらく。

クロトは我が家の布の玄関をくぐり、毛布から飛び出してきたサツキと抱き合う。

「お兄様。お帰りなさい。お兄様」

今日も一日、暗がりで見えぬ兄の帰りを待ちつづけたサツキは、泣きそうな顔で頬をすり寄せてくる。クロトは妹を抱きしめたまま、

「運がむいてきた。白人の協力者が現れた。この家を出るぞ、サツキ」

「……………？」

「うさんくさいやつだが、ここにいるよりマシだ。失うものはなにもない。……………お前以外にはなにも。……………ついてきてくれるな？」

「……………はい。サツキはお兄様を信じます」

クロトは妹の頭を撫でて、カイルにもらった普段着に着替えた。カシミアのコート、ふわふわのセーターに、子どもむけスラックス、白い靴下に真新しい革靴。いまから一年半ほど前、まだ日之雄の王族だったころは当たり前にかような服を着ていたが、いま改めて袖を通してみるとなやら気後れしてしまう。

サツキも同じコートとセーターにフリルのついたスカート、赤い革靴を着込んで、目を白黒させる。

「こないいい服……………お兄様のお友達が？」

「ああ。相場師だ。クセのある男だが、人種差別主義者ではない。これからはばらく行動を共にする。……………怖いかな？」

「…………………………」

サツキはじいっとうなだれる。皇籍離脱以来、サツキはクロト以外の誰とも交流を持っていない。他人を極度に怖がり、すぐに殻のうちに引きこもってしまう。もしかすると心の病の兆候かもしれない。

クロトはサツキの手を握り、貯金通帳と書き溜めた三十冊の株式研究ノートを紙袋に収め、一年近い時間を過ごした掘っ立て小屋を出た。

「サツキ、こちら、カイル・マクヴィル。カイル、もう知ってるみたいだけど、おれの妹のサ

ツキ」

カイルは運転席から口元に笑みをたたえ、左手をサツキへ差し出した。

「よろしくサツキ姫。服、サイズが合っていて良かったよ。気に入ってくれたかな？」

気さくに話しかけるが、サツキは手を握り返すことができず、唇を噛みしめてうつむく。

「……サツキは極度に内気だ。気を悪くしないでくれ」

「OK。乗って。これからしばらく三人でホテル暮らしだ」

サツキを後部座席に乗せて、クロトは助手席へ戻った。居住区の日之雄人たちが羨望の眼差しを送るなか、車は車線へ戻り四百キロメートル離れたラスベガスへ風を切る。

ギアをトップに入れて、長めの髪を風に任せのまま、カイルはクロトへ伝えた。

「きみの記憶力はもちろん驚異的だが、ぼくはそれよりも、きみの特質は演繹力にあると見ている。ラムゼン株の高騰を予測したのも、初歩的な演繹だろう？ 彼ら常連たちには魔法のように見えたようだが」

「……演繹という言い方はおおげさだ。新聞をよく読んで過去の値動きに照らせば、あれは誰でも予測できる」

「それができないのが普通なのだよ。ラムゼン株が一年間動きがないことを知っていて、他人より早くわずかな値動きに気づき、風疹の兆候と結びつけたのがきみの勝因だ。それだけでなく、きみは感情を制御できる。この三日間、差別的言動を十七回も受けながら、きみは完全に受け流し平静を保っていた。もしもぼくが同じ侮辱を受けたなら、あのうち五回は発言者の眉間に銃口を当てている。……感情というやつは相場師の宿敵だね。優れた頭脳と勝負勘を持つた幾多の相場師が感情の制御を誤り、舞台を去った」

「……………」

「きみの資質は相場師として最高のものだ。そして僭越ながら、ぼくにはきみの能力をさらに引き出せる知識と経験がある。数学と物理学は好きかい？」

「……以前は好きだった」

日之雄にいたところは、御学問所の勉強が退屈で、ひとりで図書館にこもって数学や物理学の専門書を読んでいた。ガメリアへ流れ着いてからは、図書館に入れないので全く勉強できていない。

「後日、お薦めの書籍をプレゼントするよ。ぼくは株式市場を物理学的アプローチでモデル化している最中でね。うまくいけば、危険が少なく収益率の高い金融商品運用法を公式化できるはずだ」

「……………」

クロトは話半分でカイルの言葉を聞いていた。株式市場に統計学・確率論の観点からアプローチする試み自体は否定しないが、果たして人間の狂気を数式で解析することができるだろう

か。普通ならば、鼻で笑って捨て置くような机上の空論だが。

「もちろん発展途上の仮説だよ。ただ、金融を数理モデル化する取り組みはすでに大勢の数学者、物理学者が挑んでいて、面白い成果もあがりつつある」

ブラウン運動、コーシー分布、パレートの法則、ランダムウォーク仮説……。カイルがよどみなく語る数学・物理学を用いた株式市場の分析は興味深く、クロトはいつのまにか、机上の空論に聞き入っていた。

「試みは失敗と修正の繰り返し。でも失敗するたびに、前へ進んでいる。完璧な理論ではないけれど、だからといって捨てたなら科学の進歩はない。いつか現代の錬金術に辿り着くまで、ぼくらは歩みを止めない」

カイルの言葉を、クロトはどこか羨ましく聞いていた。確かにガメリア人は失敗を恐れることなく、見事な着想と想像力を駆使して新しい技術、学問、文化を築き上げてきた。その無謀なくらいの開拓精神こそ、ガメリアを世界一の強国へ押し上げた原動力なのかもしれない。

ガメリアの実力を認めながら、クロトはどこか悔しかった。白人社会の優秀性を見せつけられるたびに、胸のうちに不思議な火が灯る。

——こいつらに負けたくない。

そんな思いが胸の奥深くでくすぶる。いまの日之雄では敵わないことはわかっているけど、だが優秀な白人に見下されるのはどうしたって悔しい。どうすれば勝てるのか、またそんなことを考えはじめてしまう。

道沿いのハンバーガーショップで大きなチーズバーガーを三つとソーダを買って、車内で食べた。久しぶりのハンバーガーは正直、涙が出るほどうまかった。腹の底へ落ち込んでいく肉の塊を名残惜しそうに見送って、このまま反転していまのハンバーガーショップへ戻って同じものをもう一個買いたい衝動を抑えた。サツキもおいしいおいしいと繰り返し、包みに残ったソースまで丁寧にパンズですくいとって食べきった。

「……ありがとう、カイルさん。……すごくおいしかったです」

小さな声で告げられたサツキの感謝を、カイルは微笑で受け取った。

ほどなく乾燥地帯へ入った。地平線の果てまでまっすぐ伸びる広い道を、カイルはギアをトップに入れたまま走りつづける。

どこまで行っても微動だにしない地平線とゆっくり流れる低い山並み。やがて焦げ茶色の山肌が茜色に染まり、天頂に星がまたたきはじめ、午後八時過ぎ——

きららかな星空の底が、焼けはじめた。

夜空の裾へ溜まった黄金色の光域が、横一線に燃え広がっていく。

近づくほど星の光は空から追い立てられ、代わりにどぎつい色合いをした人工の光が道の両側を飛びすぎていき、やがて虹へ飛び込んだように、光の七彩が車の周囲を埋め尽くした。

「わあ」

視界を流れていく幾千のネオンサインを眺め渡して、サツキが感嘆の声をあげる。カイルが笑って、

「ようこそ、ラスベガスへ」

気取った言葉を後席へ届ける。

クロトは黙ったまま、地上最大の歓楽街が織り上げる光のタペストリを睨み付ける。中世の城塞のようにそびえ立つホテル群。明滅する『カジノ』のサイン。正装で行き交う人々、道路を埋め尽くすタクシーとバスと自動車、嬌声をあげて道端で踊る若者たち。原色に満ちあふれた終わらないカーニバルのむこう側に、クロトの気に入らないなにかが息づいている。

「この街は欲望を吸い取って発光するんだ。悪意あるクリスマスツリーだと思えばいい。ぼくらはてっぺんの星だけ取って退散する。くれぐれも養分にならないよう」

カイルの言葉を、クロトは鼻だけ鳴らして受け流す。

「カジノで儲かるから、ホテル代が安い。さっきも言ったようにぼくは無一文、ブレスレットを売った残りのカネは五百ドル。そのへんのホテルで作戦会議しよう」

「……五百ドル？ ひどいな」

まあまあのスーツ一式が買えるくらいの金額だ。そんなものが元手だというのか。

「うん。こいつをカジノで五十万ドルに増やしてから、フォール街へ勝負を挑む」

五十万ドルとは、庭付き二軒家を買える値段。正気か。問いただしたくなる気持ちを抑えて、クロトは告げる。

「……おれはこれまでの貯金とラムゼン株の報酬、合わせて二千ドルある」

「わお。ぼくより金持ちだね。でもそのカネは取っておいて。他のことで必要になるから」

カイルはハンドルを切り、『ハミルトンランド ホテル&カジノ』と看板のあるホテルへ入った。駐車場に愛車を駐めて、少ない手荷物を携え、三人はフロントへむかう。

身なりの良い白人青年と、ぼさぼさ頭で身なりだけ良い日之雄人の子どもふたり連れを、フロントマンはうさんくさそうに眺めたが、宿泊を断られることもなく、三人は無事に中層階の広々としたスイートルームに案内された。

ボーイに気前よくチップを弾んで、カイルはネクタイを緩め、兄妹へ微笑みかける。

「まずはシャワーを浴びて」

ああ、と頷いて、クロトはサツキを促した。久しぶりに温かいシャワーを浴びることができるとあって、サツキはうれしそうに浴室へ入っていく。

ふたりきりになった室内で、カイルはクロトへ話しかける。

「さて五百ドルからの出発だ。ぼくらはこのカネでフォール街の王を倒す。覚悟はいいね？」

「……ちよっと待て。別におれはそんなものと戦う気はない」

「え、なんで？」

「それはあなたの夢だ。おれはカネを稼げればなんでもいい」

カイルはつまらなそうに肩をすくめ、

「相手は世界最高の金持ちだよ。『王』を倒せば大統領以上の権力が手に入る。相場師なら倒して奪い取るうよ」

「そういうものか？」

「相場師ってそういうものだよ」

クロトはなんとなく合点がいかないが、そういうものだと思われたいと頷くしかない。

「……わかった。協力する。フォール街での戦い方を学びたい」

「その顔、あんまり乗り気じゃないね。才能があるのに夢が小さい」

「あなたの夢が大きすぎるだけだ。なんでもいいからブラックジャックとやらを教える。本当に勝てるんだな？」

「保証する。なにしろぼくが開発したメソッドを使うから」

カイルはバッグからトランプを取り出して、シャッフルしながらルール説明をはじめた。

「カードを送る前に賭け金を決める。いくら賭ける？」

クロトは黙って、十ドル札を一枚、場に出した。

ディーラー役のカイルも十ドル札を自らの手元に出し、カード二枚をクロトへ、同じく二枚を自分の手元へそれぞれ送った。

「ブラックジャックはカードの合計値を21に近づけるゲームだ。ぴったり21点に収めるとブラック・ジャック。配当が二倍になる。絵札は10点、それ以外は書いてる数字がそのまま点数、Aだけは1か11、好きなほうを選べる。ゲームの要諦は、追加のカードをドロ（引く）かスタンド（引かない）か、その一点。簡単だよな？」

クロトは頷いて、二枚の手札を見る。「4」とキング。すなわち14点。

ディーラー役のカイルは自分の手札を一枚あける。「7」。もう一枚は自分だけが見て、クロトには見せない。

「きみの札は二枚ともディーラーに見せなきゃいけない。さあ、ドロかスタンド、どっちにする？」

クロトは黙考し、ドロを選んだ。カイルが追加の一枚をクロトへ渡す。クロトはその札を明示し、

「……クイーン。合計24点」

「21を越えたからバースト、きみの負け。ちなみにぼくの二枚目は『3』。合計10点でぼくの勝ち、きみの賭け金はいただく」

カイルはクロトの十ドル札を自らに引きよせ、

「以上。簡単でしょ？」

「……うむ。……簡単だが、奥が深い。株にも通じるものがある」

「ゲームやっただけで、クロトはブラックジャックが株取引に似ていることを看破した。追加のカードを引くか引かないか、相手の状況を見定めたくて取引の潮時を見極める「引き際」が全てを決するゲームだ。」

カイルは十ドルをクロトの手元に戻し、  
 「株式取引よりプレイヤーに有利な点がひとつ。カジノによっては一デッキ52枚を最後の一枚まで使い切る。カジノも客離れを防ぎたいから、お客に親切なルールを表向き設置するわけさ。ぼくらはこういうカジノを限定的に狙う」

ふむ、とクロトは頷いて、カイルが自分を引き抜いた理由まで一気に見抜いた。

「デッキを使い切るなら、おれの記憶力を生かせるわけか。場に出たカードを覚えていれば、デッキに残ったカードもわかる」

「そういうこと。ゲームが進むほど、きみに有利な状況が増える。さらにそこへ、ぼくのメソッドが加わる。これはブラックジャックの『状況』を簡単な計算で可視化したものだ。レッスン三。頭を使えばカネなんていくらでも稼げる」

カイルは自らの必勝法をクロトに開陳する。

曰く——カードを三種類に大別し、それぞれにポイントを割り振る。

ハイカード『A、10、絵札』マイナス1ポイント。

ローカード『2〜6』プラス1ポイント。

ミドルカード『7、8、9』0ポイント。

場にカードが配られ、ゲームが進行するのに併せ、プレイヤーはポイントを暗算する。

たとえば場に出たカードの総計が30枚として、内訳がハイカード15枚、ローカード9枚、ミドル6枚であれば、カウントは『マイナス6』となる。

「マイナスの値が大きいほどプレイヤーが不利な状況。この場合、賭け金は小さくしてやり過ぎず。プラス値が大きいならプレイヤーが有利。値が大きいほど賭け金を増やし、がっばり稼ぐチャンスを広げる」

カイルは統計学を用いてブラックジャックの『状況』を解析した図表を複数提示し、クロトへ自らのメソッドの数学的根拠を説明した。その緻密さ、膨大さにクロトは唸るしかない。なにより感嘆したのは、おおよそ日之雄人にはない独創的な着想だ。クロト自身もこの一年カネに困っていたが、こういう手段で稼ごうとする発想には至らなかった。これを最初に着想したカイルを、素直にすごいと思える。

「……なるほど。……納得した」

「きみはさらに、デッキに残ったカードの種類まで見えるわけだから、最強のブラックジャックプレイヤーになれる。……わかってくれたかな？ きみの記憶力・演繹力にぼくの着想と戦略を掛け合わせれば、最強のバディとなる。ぼくらが力を合わせれば、ラスベガスはもちろん、フォール街だって支配できるぞ」

口の端だけで笑うカイルを、クロトは横目で見やった。

この男を信用したわけではない。しかしカイルの目的は明確に「カネ儲け」であり、その目的は信用できる。

「わかった。おれはあんたの経験を吸い取る。あんたもおれをカネ儲けに利用しろ」

「取引成立だね」

カイルが差し出した手を、クロトは握り返した。シャワーから出てきたサツキが不思議そうに、いまさら握手しているふたりを見やった。

十十十

今日も羊たちが餌に釣られてやって来る。こちらの仕事は彼らを檻テーブルに誘導し、貧相な地肌

が見えるまで毛を刈り取ってやることだ。手強い羊には注意を払うし、どうしても手に負えない

いなら熟練の職人をあてがって、つるんつるんに剥いてやる。

『ハミルトングランド ホテル&カジノ』フロアマネージャー、エベン・パーマーは今夜もそんな信条を胸に抱いて、客でごったがえすカジノフロアを見回した。

金銀細工を散らした豪壮なシャンデリアの下、チップを吐き出すスロットマシン、葉巻と煙草とアルコールの匂い、あちこちで頻発する歓声と悲鳴。片手の盆にカクテルを満載したウェイターがテーブルの客へ酒を届け、客たちは酔いも手伝って無謀な勝負に挑み、ディーラーにつるつるに剥かれていく。

カードゲームの卓はなかでも人気があり、特にルールがシンプルなブラックジャックは客足が絶えない。ここハミルトングランドはエドッキを使い切るまでシャッフルしない公明正大さがウケて、今日も一攫千金を夢見る哀れな羊が自ら檻へと入っていく。

羊に勝たせないことが牧羊犬たるエベンの役目だ。昨日もいかさま野郎を現行犯で捕まえて、従業員控え室でたっぷりお仕置きしてやった。トリックの見破れない腕の良いかさま野郎が相手なら、こちらもいかさまディーラーをあてがうまで。フロアの収支がマイナスになれば、エベンがクビになってしまう。この楽しい仕事をつづけるために、今日もエベンはいかさま野郎の発見に余念がない。

ふと――

エベンの目に、見覚えのある日之雄人親子が留まった。

華奢でおどおどした四十代くらいの日之雄人の父親の傍らに、小学生くらいの男の子がくつついて、ブラックジャックのテーブルを覗き込んでいる。父親が着込んでいるスーツは高価な

一流ブランドで、子どもの身なりも至極良い。有色人種は嫌いだ、金持ちなら話は別だ。父親の間抜け面は哀れな羊そのものだが、なにかが引つかかる。

エベンの自慢は記憶力だ。頭のなかをちよっと探れば、問題のありそうな客がいつ、何度このフロアを訪れたのか、正確に思い出せる。

確か——ここ四ヶ月半ほどの間に、二度ほどこの親子連れをフロアで見かけた。

一度目は、確か二月下旬くらい。父親がびくびくしながら1ドルずつのしよばい勝負を繰り返したが、最後のゲームで奇跡的な勝利を収め、二百ドルほど稼いで帰った。二度目は、四月中旬。同じく小さな負けを繰り返した父親は、後半のゲームで逆転を収め、今度は四百ドルほど勝って帰った。

今日が三度目だ。いつものように父親は小さい賭けを繰り返し、勝ったり負けたり、収支は彼のマイナスといったところか。以前は二回とも、ここから挽回し勝って帰ったわけだが。

——怪しい。

エベンの直感がそうささやく。さりげなく日之雄人親子のテーブルへ近づいて、いかさまがないか観察する。

テーブルの客は親子連れだけ。日之雄人と同じ卓につくの拒んでいるのか、他の客は寄りつこうとしない。退屈そうなディーラーの目の前で、父親は目をしよばしよばさせながら、うーんうーんと声を出して悩んでいる。

日之雄人についてはよく知らないが、富裕層であつてもこんな自信のない感じなのだろうか。あたかもその辺りの貧乏移民に無理矢理高価なスーツを着せたみたいに、動作や表情に富裕層特有の尊大さや威厳が感じられない。頭をぼりぼり掻きながらカードを見やり、時折困ったように十二才くらいの子どもへ視線を移す。

子どものほうがよほど自信と威厳が備わっている。光沢のある子ども用スーツをぴしりと着込み、父親の手札『4』『Q』『A』、ディーラーの開示する手札『8』へ鋭い眼差しをじいっと注ぎ込んで動かない。

「ドロー……」

父親の小さなコールを受けて、ディーラーは追加のカードを卓に置く。数字は『3』。父親はスタンド。ディーラーは『J』。父親のチップはディーラーへ奪われる。

おかしいところはない。だが、子の鋭すぎる視線が気になる。オオカミにも似た、蒼氷色の眼差し……。

その双眸が突然、父親へむかつて持ち上がった。そして意味ありげに、一度自分の髪の毛を掻き上げる。

父親はビクッと一度震えてから、おずおずした様子で、自らの持つ高額チップを全部テーブルに置いた。

ディーラーが「正気かよ」と言いたげに眉をくゆらせる。父親の賭け金は二千ドル。これま

で1ドルしか賭けなかったせに、いきなりの大勝負だ。

父親へカード二枚が送られる。オープン。『10』と『9』。ディーラーは『7』。エベンは思わず舌打ちする。この日之雄人、ついてやがる。スタンドすれば二千ドルの儲けだ。

しかし。子が人差し指でテーブルを叩いた次の瞬間。

「ド、ド、ドロー……」

あろうことか父親はさらなるカードを要求する。エベンは思わずつこける。やはりただの間抜けだ。『A』か『2』が出なければバーストするのに、なぜ無謀なドローに挑む？

ディーラーは一瞬呆気に取られてから、失笑を隠さず、残ったデッキからカード一枚を父親へ届ける。

オープン。

『2』

ブラック・ジャック。

「うわあああああっ!?!」

賭けた父親がびっくりし、のけぞって椅子から転げ落ちる。その傍ら、子のほうは「さもありなん」と言いたげなつまらなそうな表情でテーブルをじっと見つめている。

ブラック・ジャックだから配当二倍、つまり日之雄人の勝ちは四千ドル。たった一度の勝負で、エベンの月給を稼ぎ出した格好だ。

「……………?!?!」

ディーラーもエベンも、あまりの事態にあいた口がふさがらない。

いかさまはなかった。それは間違いない。父親も子もカードをすり替えるような真似はしなかったし、それをやれば注視していたエベンは確実に見抜いている。

あるとすれば——場に出たカードを全て記憶していた場合だ。

だがそんなことはまず不可能。記憶力が自慢のエベンも、デッキに残ったカードの種類を看破しようとするれば脳が焼き切れる。なにか特別な計算でもこなさなければ、あんな無謀な勝負に挑んで勝つことなどできない。

「なにものだ」

思わず呟いたエベンの視線が、ふと、日之雄人の子どもの視線とぶつかった。

呆然自失のエベンを一瞬見やった黄色人種は、にやつ、と口の端を吊り上げてみせる。

本体は父親ではなくあの子どもの方だと、エベンはようやく気づく。戦慄さえ覚えながら、エベンは総額六千ドル近いチップを手に換金カウンターを指す親子の背中を黙って見送るしかない。

親子がフロアを出て行き、数分後に我に返って、エベンはおのれの職務を思い出す。

ともかく——あの日之雄人の親子連れはブラックリストに載せて、ラスベガス中のカジノと共有せねば。いかさまを使うことなく、真っ向勝負であんな大勝ちをされていたら、ラスベガ

スが減びてしまう……。

†††

「驚きすぎだ」

換金を終えてエレベーターに乗り込んだクロトは、父親役の日之雄人へ顔を上げ、さっそく答める。

「す、すみません、でも、あたしのほうがびつくりしちゃって……」

生田はいつものようにびくびくしながら、三回りほど年下のクロトに平謝りする。クロトの貯金していた二千ドルで買った高級スーツ一式に不釣り合いな、卑屈でおどおどしたその態度が、クロトはどうしても気に入らない。

「平然としている。勝負しているのはおれだ。あんたがビクつく必要はない」

「へ、へい、わかっちゃいるんですが、でも、怖くて……まだ心臓ドキドキしてます……」

生田は人の良さそうな笑みをたたえて、おのれの胸に片手を当てる。ふん、とクロトは鼻を鳴らして、エレベーターの階数表示を見上げる。

「フロアマネージャーがこちらを睨み付けていた。おそらくいまでブラックリストに載ったぞ。明日からは勝つのが難しくなる」

「へ、へい……。もうちょっとつづきたいですけどね。なにしろ割がいいんで……」

「いつまでも出来る仕事ではない。おれたちは肌色で悪目立ちもする。いかさまディーラーをあてがわれれば、剥かれるのはこっちだ。そろそろ潮時だろう」

五階で降りて、すっかり住み慣れてしまった五〇三号室へ戻る。

「お帰りなさいませ、お兄様」

出迎えたサツキがうれしそうに微笑む。ここに来てから五ヶ月が経ち、すっかり顔色も良くなって、長い黒髪も櫛できれいに整えられ、艶を取り戻した。

クロトにそっくりの吊り目がちな蒼水色の瞳がきらきら輝き、

「わたし、今日は千三百ドルも稼ぎましたの」

「ほう。すごいな」

誇らしそうに胸を張るサツキの頭を撫で、ジャケットをクローゼットに収める。

「おれの儲けは四千ドルだ。目標金額は超えたぞ」

サツキは帳簿をめくって、今日のふたりの稼ぎを書き込み、にっこり笑う。

「五十万一千二百三十五ドル。目標達成ですわ」

「うむ。意外に早かった。……お前にこれほどギャンブルの才覚があるとはな」

クロトはソファーに腰を下ろし、サツキの父親役を務める日之雄人、鈴谷へ目を移す。

生田と同じく、貧相な身体を高級スーツに包んだ鈴谷は、媚びるような笑みをクロトへ送っ

て、

「へい、それはもう、お嬢様の読みはいつもずばりで。最後のほうは本体がお嬢様だつてのがバレそうになって、慌てて逃げてきやした」

へっへっへ、と生田と鈴谷は顔を見合せて笑う。

「……今日の報酬だ。目標額は達成した。手じまいだ」

クロトから今日の報酬二百ドルをそれぞれ受け取り、ふたりは卑屈な笑みをたたえて、三回りほど年下のクロトに尋ねる。

「え、あの、明日からはもう……」

「来なくていい。世話になった。ロサンゼルスに日之雄人の互助組織がある。この街を出て、まともな職を見つけるといい」

生田と鈴谷は辛そうに顔を見合わせ、この仕事をつづけたいと申し出るが、クロトは拒否する。ふたりともこの街で一攫千金を夢見た移民で、夢破れて道端でうずくまっていたのをカイルが拾い、クロトとサツキの父親役にあてがった。この五ヶ月は遊びながらカネを稼げて楽しかった様子だが、あとは自力で生きるしかない。

何度頼んでもクロトのつれない態度は変わらず、ふたりはがっくり肩を落として、目をしばしょぼさせる。

「……名残惜しいですけど……おかげさんで、貯金も出来ましたんで……」

頭を下げる鈴谷に、サツキは微笑みかける。

「ありがとうございます。短い間ですけど、助かりましたわ。またどこかでお会いしましょうね」

「へい。お嬢様も、どうかお元気で……」

鈴谷と生田は何度も頭を下げながら、連れだつて部屋を出て行った。

ドアが閉まり、ふたりきりになって、サツキはクロトを振り返る。

「大丈夫でしょうか、あのふたり……」

「元手はできた。あとは自分の力次第だ。移民としてこの国へ来たなら、そのくらいの覚悟はあるはず」

有色人種の移民は、弱くては生きていけない。愚かなら踏まれるだけだ。誰にも踏まれないために、クロトも毎日を必死で生きている。あのふたりも辛いだろうけれど、自分の力で立たない限り、また路上にうずくまるしかない。ガメリア人は弱者へ差し伸べる手など持っていないことは、クロトも渡洋以来の一年半で骨身に沁みて理解できた。

サツキはクロトの隣に腰を下ろし、兄の肩に頭を委ねる。

「目標達成ですわね」

「そうだな。……カイルのおかげだ」

つややかな黒髪から良い香りが伝い、クロトはカイルに感謝した。引きこもりがちだったサツキがすっかり元気になり、自らメソッドを学んでカジノでカネを稼げるようになったのも、

カイルがサツキを元気づけ、外に出る勇気を与えてくれたからだ。いまではサツキは、ひとりで表通りを歩いてパンを買ってくるほどに回復している。

どこかの金持ちの御曹司だろう、と思っていたが、カイルは家庭の事情で中学校にも通えず、株は苦勞して独学で学んだそうだ。四ヶ月ほど前、この部屋でデリバリーのピザをかじりながら、カイルは自らの生い立ちを話してくれた。

『父親は誰かわからない。街娼をした母が言うには、客にひとり、すごく頭のいい青年実業家が出て、そのひとから特別に依頼されて特別な料金を特別な交流を許可したから、たぶんそのひとだろうって。ぼくが十四才のときかな。客の大学生に呼ばれて部屋に入った母さんは待ち受けていた三人から思いっきり殴られ、ひとり分の料金を無理矢理三人にサービスを提供させられた。終わってから母さんは「あなたたちはなにも悪くないわ」と三人を許し、そのままみんなで楽しくお酒を飲んで、深夜三時、眠りこけた大学生に猿ぐつわを噛ませると「こいつが悪いのよ」と諸悪の根源を三本ともハサミでチョキン！ ……運悪く、大学生のひとりが上流白人（ワスプ）の御曹司でね。裁判でぼこにやられて懲役二十年。いま牢屋に入ってる。で、ひとりぼっちで路頭に迷ったぼくは幸い頭がとても良かったんで、ブラックジャック必勝法を自分で考えてカネを稼ぎ、十六才のころには株式相場を使った闇賭博でたんまり儲けた。あまりに勝ちすぎて賭場に入れなくなり、それで仕方なく本物の株式をはじめた。フオール街でもかなり勝って、ついこの間まで羽振りが良かったんだけど、「王」に目を付けられてぼこぼこにされて無一文に逆戻り。これからはきみの力を利用して「王」に再戦を挑みたい。母さんはあと十年で出てくれるから、それまでに立派になって出迎えたいんだ』

辛い境遇をカイルは終始、にこやかに話していた。おそらく少年期は大変だったろうに、そんなそぶりをみじんも見せない。クロトもサツキも小学校を卒業しておらず、知識も独学で身につけたから、カイルの境遇は他人ごとと思えなかった。母親を喜ばせたい、というカイルの気持ちも共感できるし、そういう目的なら一緒に仕事をしてもいいと思えた。

サツキは少し心配そうに、顔を持ち上げる。

「カイルから連絡はまだ？」

「……一週間前にあつたきりだ。口にはしないが、やはり日之雄人を入居させるということを手間取っているのだろう」

カイルは一ヶ月半ほど前、ひとりで合衆国東岸の大都市、ニューヨークへ渡った。

『きみたちはここで五十万ドル稼いでくれ。ぼくはフオール街で態勢を整える。拠点の確保、器材の調達、証券会社の選定、それにスタッフ。有能な日之雄人も確保したい』

そう言って単身旅立ってから、カイルは週に一度ほど連絡を寄越してくる。クロトたちのやることはカジノで勝つことだけだった。これまでは目立たないよう小さな勝ちを積み上げてき

だが、二週間前から目標額が近づいてきたのでブラックリスト覚悟で大勝負を繰り返し、今日やつと五十万ドルに達した。

振り返ると、楽しい五ヶ月だった。ガメリアに来てから辛いことばかりだったが、ここラスベガスでようやく兄妹は有意義な時間を持つことが出来た。

朝起きるとホテルの売店でフォールストリート・ジャーナルを買って、主要銘柄の値動きと金利をチェック。それからサツキと一緒にバスに乗ってラスベガス図書館へ赴く。市民権を持つていないため貸し出しは無理だが、身なりさえちゃんとしていれば入館はできるとカイルに教えてもらい、以来毎日のように閉館まで国際情勢、政治経済、数学、物理学、ガメリアの歴史など、興味のむくまま勉強する。サツキはギャンブルの面白さを知ったのか株式市場に興味を持ち、難解な専門書を積極的に読んでいた。

図書館が閉まったあと、夜は生田・鈴谷と合流してカジノで荒稼ぎ。それが終わると部屋に戻って、図書館で抜き書きしたノートを読み直し、知識を血肉化していく。

サツキと一緒に勉強してくれることがクロトにはありがたかった。さすが同じ血をわけているだけあり、サツキの学習能力は十才児離れしていて、ふたりで相場の研究内容を話し合い問題点を分析したり出来た。

「これからはもう、イヤなことはありませんよね」

ソファーに並んで座ったまま、サツキはぼつりとそんなことを言う。

「ああ。このままずっとうまくいく」

そう返事したとき、電話が鳴った。

『フロントです。カイル・マクヴィル氏からクロト・クロノ氏へお電話が』

来た。受けることを伝えると、すぐに回線が切り替わる。

『久しぶりだ、クロト。そろそろ五十万ドル貯まるころだと思って』

ひょうひょうとしたカイルの声が、ノイズと一緒に受話器越しに伝う。

「ご明察だ。今日、目標額を越えた」

『予定より二ヶ月以上早い。サツキーのおかげだ。妹にもきみに匹敵する能力があるなんて、王家の血統は優秀なのだね』

「お世辞はいい。そっちの状況は？」

『ニューヨーク証券取引所から歩いて三十分のところ空きのアパートが見つかった。治安が悪く悪い地区のうえ、前の家主がバスルームで自殺したから家賃が安い。もうサインしたけど問題ある？』

「ない。スタッフはそろったのか？」

『優秀な日之雄人の少年が見つかった。日系二世で、合衆国市民権を持っている。きみの部下として使うといい』

アパートの住所をメモし、二、三の連絡事項を受け取って、クロトは礼を言って受話器を置

き、妹を振り向く。

「第二ラウンドだ。いよいよフオール街へ勝負を挑む」

「これからが本番ですわね」

「ああ。時期もいい。ようやく運がむいてきた」

偉大な未来がゆつくり一歩ずつ近づいてくる足音が聞こえるかのようで、クロトは我知らず昂ぶっていた。五ヶ月近くを過ごしたこの街とも、明日でお別れになるわけだが、それほど感傷も抱かなかった。とにかく眩い未来だけを思い描き、クロトはこれからはじまるフオール街での戦いへ気持ちを傾けていった。

聖曆一九三二年、七月十日——

大陸横断鉄道に乗ってニューヨークへ辿り着いたクロトとサツキは、タクシーを拾い、NY（ニューヨーク）証券取引所を目指していた。

およそ一年半前、父親と一緒にこの街を訪れているからはじめてではない。しかし何度訪れても、小さな島の上で七百万もの人々が生活する熱気、道を埋め尽くす自動車、ブロードウェイの喧騒、どこまで行っても尽きることのない摩天楼に圧倒される。叡智と技術を建材にして、傲慢さと自己顕示欲で組み上げたような威圧的な街並み。ガメリアという国が本気を出したら、青空さえこんなに小さく刻まれてしまう。

——勝てない……。

窓の外を流れゆくコンクリートの剣林を眺めるうちに、この国に来て何度も抱かされたその思いが、またクロトの胸に再来する。この巨大国家と日之雄の戦争は、ライオンに立ち向かう猫と同じ構図になる。猫は引つ掻き傷ぐらひは与えるかもしれないが、ほどなく跡形も残らず食い尽くされるだろう。

「お兄様、着きましたわ」

サツキの声で我に返った。気づけばタクシーは泊まって、黒人の運転手がこちらをじっと振り回している。代金とチップを払って車を降り、世界最大の証券取引所の威厳あふれる佇まいを見上げる。

いかめしい石造りの外壁に、六本の野太い円柱が神殿風の裝飾屋根を支えている。軒先の彫像群は、商業を司る天使たちだとか。ここが世界金融の中心地であり、戦争の震源地であり、魂をカネに売り渡した魑魅魍魎の舞踏場だ。父、竹彦は怪物たちとの戦いに敗れ、高層ビルから身を投げた。同じ轍を踏まないことを心に誓い、クロトは屋内へ足を踏み入れた。

三時間ほど広い所内の見学に費やした。熱気にむせかえるトレーディングセンターでは、中央に円筒形をした巨大な相場表示機が屹立し、株価をパネルで表示していた。その周辺に仲買

人（ブローカー）が群れ集まって、無線マイクとインカムで投資家と連絡を取りつつ、大声や手信号で取引をする。あまねく人間の欲望がこのフロアに凝縮して詰め込まれ、一千もの取引銘柄の株価として数値化され、あるものは狂喜し、あるものは絶望する。見ているだけでめまいがするような株式ゲームの世界であり、世界金融の中心地へ来たのだと実感した。

見学を終え、通りへ戻って地図を広げ、徒歩でフォール街から約二キロメートルはなれたロウアー・イーストサイドを目指す。右手に有名なブルックリン橋を眺めながら歩くこと三十分、高層ビルは消え失せて、代わりに色あせて古ぼけたレンガ造りの街並みが現れた。

近くの魚市場や港湾で働く貧しい移民が多く住む地区だ。クロトたちのような「色つき」は珍しくなく、通行人には黄色人種もちらほらいる。目つきの悪い黒人の子どもに睨まれながら治安の悪そうな細い通りを歩いて行くと、教えられた住所に着いた。

事務所の入った建物は、この地区でよく見かける、細長い建物が密に立ち並んだ「テネメント」と呼ばれる集合住宅だった。年期の入ったレンガ壁は赤黒く煤けて、しなびた老人が戸口に座り込んで安酒をあおっている。建物の前面に張り出した外付け階段を上っていくと、三階の入り口がひらいて、カイルが顔を覗かせた。

「いらっしやい。待ってたよ。サツキーもお疲れ」

金属階段を上がる足音で気づいたらしい。一ヶ月半ぶりの再会を簡単に祝って、ふたりを事務所へ迎え入れる。

「ふむ」

なかへ入り、クロトは鼻先で頷いた。外見はボロいが、なかはそこそこ、広々として部屋数も多く、小さいながらシャワーもトイレもキッチンもある。ロサンゼルス掘り立て小屋に比べたら、たいそうな豪邸だ。

「そちの部屋はきみたちで使って。あつちはぼくの部屋。で、ここがぼくらの仕事場、トレディング・ルーム」

南向きの窓に面した最も広い部屋で、カイルは両腕を広げた。机の上ではティッカー・テープマシンが据えられ、ガラス球から現在の主要銘柄の株価を小穴で表示したテープを吐き出している。幾つかの銘柄の株価が書かれた大きな黒板の前に知らない東洋人の少年がひとり、緊張した様子で直立していた。

「紹介しよう。燕子花（かきつばた）健太くん、十一才。なかなか聡明な子で、株に興味を持っている。ほら、挨拶」

いわれて、健太は律儀そうに頭を下げ、挨拶する。

「健太です。ぼく、株の勉強したくて。クロトさんの弟子にしてください、どうかよろしくお願いします」

流ちょうなガメリア語で挨拶し、内気そうな瞳をクロトへむける。

「……弟子は断る。下僕なら構わん」

ぶつきらぼうに告げると、健太の瞳がうれしそうにきらきら光る。

「はいっ！ ぼく、クロトさんの下僕になります！」

妙な性癖でもあるのではと訝しく思うが、クロトは健太の存在を受け流し、カイルへ目をむける。

「……五十万ドルの配分はどうする」

「諸経費で十五万ドルもらう。残りは、ぼくが二十五万。きみが十万。文句ある？」

「……十五万だ。お前は二十。文句あるか」

「OK。よろしく相棒」

カイルとクロトは今後このアパートで暮らす、株式取引は個別に動く。ふたりはいま買すべき銘柄を相談するし、必要とあらば協力もするが、口座は別々、自分のカネで株を買、利益も損失も自分で引き受ける。

「健太とサツキにはチョコレートボーイ、チョコレートガールをやってもらおう。株の勉強をはじめするには最高のポジションだよ」

サツキは表情を引き締めて、カイルの言葉に相づちを返す。兄のすがたをずっと近くで見えてきて、いつしか自分も投資家になると決めていた。

カイルはクロトへ目を戻し、

「さて、いよいよ株式市場へ飛び込むわけだが、買う銘柄は決まってる？」

「幾つか目星はつけている。経営状態と業務内容を調査してからふたつくらいに絞りたい。はじめは無茶をせず、資金を増やすことを念頭に置く」

「意外に堅実だね。いきなり無茶しそうな感じだったけど」

「経験が足りていない自覚はある。しばらくはまっとうな投資家として地道に勉強だ」

「きみ、態度は偉そうなくせに自身は意外と謙虚だね。さて、夕食は食べた？ むかいのホットドッグがおいしいよ、食べに行こう。サツキと健太も」

カイルの言葉に、健太が驚く。

「あ、あの、ぼくも良いのですか？」

「え、なんでダメなの？」

「あ、いえ、カイルさんがよろしいなら……」

健太はもじもじしながらそんなことを言う。クロトが自分の傍らを見ると、サツキもなんだかいつもよりもじもじしているような。人見知りする妹だから、年の近い健太の同行に戸惑っているのかも。

互いにもじもじする健太とサツキをカイルが促し、四人連れだって事務所を出、アパートのむかいのホットドッグ屋に入った。

「ジェシーの店」と看板のある小さな店で提供されたホットドッグは、黒人おかみ特製のスパイスたっぷりチリビーンズがソーセイジにかかっている、できたてにかぶりつくともじんぎり

のタマネギとピクルスと青唐辛子、表面をかりっと揚げたソーセージ、チリビーンズの濃厚な旨味と噛み応えのある焼きたてパンが混然一体溶け合って、無表情なクロトが思わずぎゅっと目を瞑るほどおいしい。

「旨いな」

素直に感心した。古き良きガメリアの味というものだろうか。どこか懐かしく、大雑把に見えるけれど実は緻密に味の組み立てが計算されている。

「ぼくの知る限り、ガメリアで一番のホットドッグだよ」

「これは……すごい。たかがホットドッグと思っていたが、侮れない」

野菜、肉、ソース、パンが奏でる極上の四重奏（カルテット）。シンプルだが西欧料理の真髄がこの小さなホットドッグひとつに詰まっているように思え、クロトは思わず二つ目を注文してしまふ。

食べながら、カイルが尋ねる。

「さてクロト。例の方程式、研究してる？」

「……ああ。眠る前の一時間を研究に充てている。だが、かなり難度が高い」

ラスベガスで一緒に生活していたころ、カイルはオプション取引に関するある研究をクロトへ依頼した。

オプション取引とは、株ではなく「選択権」を売買する取引のことだ。客は「X月X日に〇株を千ドルで買う」権利を購入し、X月X日当日に、権利を行使しても良いししなくても良い。〇株が千二百ドルに上がっていたら権利を行使すれば二百ドルの儲け、八百ドルに下がっていたら権利は行使しないほうが良い。この取引のキモはオプション価格——権利を買う料金をいくらに設定するかであり、カイルは適切なオプション価格を決定する方程式が必ずあると主張していた。

『リスクをゼロに近づけ、利益を最大化する方程式を発見したい。ぼくときみは独自にこの計算式の研究をつづけ、互いに式を発表しあう。ふたりの式が異なるものであれば原因を究明してやり直し。式が一致したなら、現代錬金術の完成だ。ぼくらはフオール街の王になる』

カイルの語る大きな夢を、クロトは苦笑いで受け止めた。カイルの着想は相変わらず面白く、それを達成するための努力もすごい。本当にそんな式があるのか半信半疑ながら、クロトはカイルの夢を叶えるために、一日一時間をオプション取引の研究に充てていた。

クロトは揚げたてのフライドポテトをつまみつつ、現状を報告する。

「ランダムウォーク仮説を参考に、オプション対象となる株の値動きをモデル化してみた。いわゆるブラックボックスモデルというやつだ。こいつでシミュレーションを繰り返し最適値を求めようと思う。だが株価の瞬間変化率とオプションの瞬間変化率を求める等式が難しくてな。応用数学の勉強をはじめたところだ」

「わお。さすが。ありがたいけど、ちゃんと寝てる？ 目にクマ出来てるけど」

「一日三時間は眠れている。問題ない」

「レッスン十一、相場師の仕事は激務だから、意識して休みを入れること。疲れた脳だと判断力も鈍るし」

「お前は母親か。そんなことまで口出しするな」

「大事なことだよ。平時ならいいけど、たとえば大勝負のとき寝不足だったら確実に負ける。ぼくが『王』との戦いに負けたのも、五ヶ月つづいた戦いの間、心理的ストレスで眠れなかったことが一因だ。戦いを降りるべき時期を誤って、全財産を失った。頭脳は常に明晰に保つ必要がある」

その言葉に、うむ、とクロトは喉の奥で答える。

はじめて会った日、カイルが告げた見えない『王』。

思惑ひとつで大統領の首をすげかえ、マスコミを煽って大国同士を戦争へ巻き込み自らが肥え太る、フォール街の王。

そんな三文小説じみた『敵』が本当に存在するのか、クロトはいまだに半信半疑だ。

だがカイルは確信を持って言う。

「ぼくらが大きな存在になっていけば、いつか必ず現れる。すがたは見えないが、おそらくは古くからフォール街に巣くう勢力だ。複数の大投資家と裏で繋がり、おのれの目的達成のために戦争や平和を創り出す見えない『血族』……。そう呼ぶしかないのだが、フォール街に存在している」

カイルに冗談を言っている気配はない。

クロトは黙考し、問う。

「それほど巨大な敵が、なぜ正体を明かささない？」

「……わからない。お互いの繋がりを知られることが彼らには不都合なのかも。あくまでぼく予想だけど、政治家やマスコミにも横糸を張って存在を消し去っている可能性もある。ただ、多くの研究したところでは、戦争前や恐慌前、必ず妙な兆候が株式市場に現れるんだ。酔っ払いのタクトみたいな値動きがエネルギー関連や重工業部門に広がって、やがて戦争が起き、変な動き方をしていた銘柄の株価が跳ね上がる……。誰かが戦争を使ってカネ儲けしているとぼくは見ている。想像するだけで頭に来ないか？ おのれの欲望のために数百万人を死傷させて自分は正体を明かささないなんて、ぼくは腹に据えかねる。この『敵』を衆目の眼前に引きずり出し、地獄の底へ蹴り落としてやりたい。それがぼくがフォール街で戦う本当の理由だ」

カイルは言葉に怒気さえ交えるが、クロトはまだ信じられない。

株式市場の崩壊が遠因となって戦争が起きたことは確かにあるが、それは市場の自然な干渉の結果で、人為的に引き起こされたとは考えにくい。さらに、もしそれが可能だったとして、それほど巨大な敵が正体不明であることの意味がわからない。株式市場の一流プレイヤーにとって知名度は影響力であり、名乗ったほうが「〇〇が買った株ならおれも買う」と追随者を増

やさやすい。相場師が正体を隠すメリットなどどこにもないのに、なぜ見えない？

——カイルの幻想ではないのか？

抱いた疑問が顔に出て、カイルは残念そうに肩をすくめる。

「……信じてもらえないことはわかっている。ぼくもできれば信じたくない。でも、必ずフォル街にいる。いつか、ぼくらの前に現れる」

予言めいたカイルの言葉を、クロトは納得いかない表情で受け流す。

「……それらしいのが出たら、おれに教えてくれ。どういふ魂胆なのか聞いてみたい」

「ああ。実際に現れたらきつと、きみも度肝を抜かれるよ」

うさんくさそうにカイルの言葉を聞き終えて、クロトは仏頂面を深めた。オチのないジョークを聞かされたような、そんな気分。釈然としないまま二つ目のホットドッグにかぶりつく。本当に旨くて、コーラが良く合う。

「世界最高のホットドッグだ」

思わずつぶやくと、カウンターのむこうで黒人のおかみが大きな声で笑った。

ヤヤヤ

駆け出しの相場師として、忙しい毎日のはじまった。

朝八時、取引のある各証券会社から入った外電をチェック。ニューヨーク、ロンドン市場のダウ、銘柄相場、為替相場、金利をノートに写し取る。朝九時半から十六時までは、事務所にこもってティッカーマシンの吐き出す株価の値動きを睨みながら、電話でブローカーや証券会社に指示を出し、ひたすら株の売買に明け暮れる。終わるとその日の終値を主要三百銘柄分記憶して株式市場全体の動向を血肉化し、あとはカイルと机を並べて世界情勢と国際経済の分析。過去百三十年における歴史と株式市場の関係性の体系的研究にあてる。深夜十二時を過ぎたあとは、力尽きて眠るまでカイルに依頼された微分方程式の研究。一日平均睡眠時間は三時間、食事はほとんど事務所むかひのホットドッグ屋「ジェシーの店」のデリバリーだった。

「クロト、あんたもつとちゃんとしたもん食べないと！ あたしが言うのもなんだけど、あんたの身体、ホットドッグで出来てんじゃないか。キャベツとタマネギ刻んだからこれも一緒に食べなさい！」

事務所へ配達してくれる黒人おかみジェシーは、毎日毎日飽きもせずホットドッグばかり食べているクロトを笑顔で叱り、頼みもしないサラダを付けてくれる。

苦笑しながら代金とチップを手渡し、クロトはホットドッグを受け取って、

「あんたのホットドッグは世界一だ。このチリソースは高級レストランにひけをとらない。株式公開するといい、あんたの店は必ず伸びる」

「やだよこの子はなに言ってるんだい！ 子どもはこんなところで株やってないで外で遊びなさい」

い！ 顔色悪いよ、ほら、サツキも健太もちよつとはお出かけしておいで！」

まるで母親のように胸とおなかを揺らして笑い、サツキと健太の健康まで気遣う。サツキはジェシーがデリバリーにくるたび、うれしそうな笑顔で迎える。

「ジェシー、この間くれた野菜スープ、本当においしかった。あんなおいしいスープ、わたしはじめて」

ずっと人見知りで内気だったサツキが別人みたいに自分からジェシーへ話しかけるのが、クロトは意外でもあり、うれしくもあった。

「気に入ったかい？ ガンボっていうルイジアナ料理さ。あんたら全然野菜食べてないから、つい作っちゃまってねえ。そんなに言うなら商品にしようか、あんたらが好きなだけ野菜食べられるようにさ！」

「わあ、うれしい！ わたしあれなら毎日食べれる！ いつもありがとうとジェシー。大好き」

サツキは小さな両手を広げて、大きなジェシーに抱きつく。

「あーあ、全く甘えん坊だねえ」

そう言いながらジェシーは我が子にするようにサツキの頭を撫でてくれる。母に捨てられたサツキの傷をジェシーが癒やしてくれていることが、クロトにも伝わる。仕事は幸い順調で、十五万ドルの資金は業務開始一ヶ月で三十万ドルに膨れあがった。

ラスベガスの図書館で過去の著名な相場師の伝記に目を通していたクロトは、先人の知恵を拝借して最小限のリスクで丹念に利益を生んでいくやりかたに徹していた。

とにかく最優先なのは企業価値を見誤らないこと。気になる企業は証券会社を通して丹念に内部調査し、企業の内在価値を見定める。この内在価値が現在の株価より遙かに高いと判断した場合に、クロトは該当銘柄の株式を買えるだけ買った。

事務所をひらいて二ヶ月が経った九月、クロトは一株十ドルの「オーチャード電子」を四万株買うという賭けに出た。資金は四十万ドル。ブローカーは驚いて止めたが、クロトは必ず上がる、と断言する。

「オーチャード電子の内在価値は時価の五倍だ。軍用レーダーを開発していることがなにより大きい。いまは小さいが、必ず世界的大企業になる」

カイルにそう説明すると、彼はしばらくオーチャード電子の内部資料に目を通し、おもむろに席を立って受話器を取った。

「オーチャード電子、十万株買い」

ブローカーにそう告げて、カイルはクロトを振り向き、にやりと笑った。

結果はすぐには出ないが、一年か二年後、必ず自分の正しさが証明されるとクロトは確信していた。

やがてフォール街にも秋が来た。

セントラルパークの美しい紅葉を、カイルとサツキと健太と一緒に散歩しながら眺めた。剣林のごとき摩天楼の裾に広がる赤と緑と黄色の斑は、人も景色も無機質なこの街に不釣り合いなほど艶やかだった。やがて事務所の暖炉に火が入り、クリスマスのメロディが街路に響きはじめた。

年が明け、二月になった。

オーチャード電子の株価は二十五ドルに上がっていた。この時点でクロトの保有資産は百万ドルを越える計算となる。フォール街に来てたつた七ヶ月で十五万ドルの資産をここまで増やした少年の噂は徐々に市場関係者の間に広がっていった。

カイルは意図的に自分は一歩うしろに下がり、クロトの知名度を高めることに専念した。経済誌から取材依頼が来ても、自分のときは断って、クロトの場合は本人の許可も取らずに勝手に受けた。もちろんクロトは激怒する。

「……おい。おれはなにも聞いていないぞ」

「レッスン十八。奥ゆかしさとか謙遜とか、ガメリアじゃただの無能アピールだから。もつと前へ出て、有能さをアピールしないとフォール街ではやっていけない」

「ならばお前も目立て。おれだけ目立たせるのはどんな狙いだ」

クロトが目線をきつく尖らせると、カイルは底意地悪そうな笑みをたたえ、

「狙った株が必ず上がる十三才の天才少年、しかも日之雄人。こんな面白いキャラクター、みな放っておくわけないでしょ。知名度を上げるいい機会なんだから、逃がすべきではない。

レッスン十九。知名度は影響力。自分の名前は積極的に売りましょう」

「おれは珍獣ではない。そんな役目はごめんこうむる」

ちっちっち、とカイルは舌を鳴らしながら人差し指を左右に振り、

「珍獣扱いはしていない。きみは疑似餌（ルアー）だよ。きみの知名度が高まることで『王』が釣り針に引っかかる。ぼくの見立てでは『王』は絶対に白人至上の人種差別主義者だ。日之雄人がフォール街でのしあがるのが、『王』にとって面白いわけがない」

その言葉に、クロトは髪を逆立てる。

「おれは『王』などどうでもいい！ お前個人の闘争におれを巻き込むな！」

「まあまあ相棒、怒らない怒らない。少しくらいいいでしょ？ 一年前、ぼろっちい小屋に住んでた孤児が、ぼくのおかげでここまでこれたわけだしさ」

カイルはにたにた笑いながら、そんな言葉でクロトを諷め、話題を変えようと自分のノートを持ってきた。

「ところで例の方程式だけど。こんな具合でやってみた。前回より精度を高めた株式市場モデル、使えると思う？」

さらなる文句を放とうとしていたクロトは言葉を途中でへし折られ、渋々、カイルのノートに目を通す。はじめは本当に完成できるのか疑わしかった微分方程式だが、ふたりで机を並べ

て研究をつづけた結果、茫漠としていた概念に輪郭が生まれつつあった。

「……うむ。本物に比べると観念的だし単純過ぎるが、現時点ではまずまずの精度だ。方向性は間違っていない」

「一歩ずつ近づいているよ。トライ&エラーを繰り返して、いつかぼくらは同じ方程式に辿り着く。苦しくても歩みを止めないことだ。というわけでインタビューの件、よろしく」

「……今回だけは受けてやる。だが次やったらコロす」

いやいやながら、クロトはフォールストリート・ジャーナルの取材を受けることにした。たかが新聞の一記事くらい、大した影響力はあるまいとタカをくくったのが間違이었다。

『フォール街を駆け上がる十三才の天才少年』

『狙った株が必ず上がる。キャリア半年で資産百万ドル、驚嘆すべき才能』

そんな見出しが紙面に躍った翌日から、事務所にはクロトとの面談を求める投資家や会社社長、野心に溢れた青年実業家が大量に押し寄せはじめた。

こんな儲け話がある、わたしの企業の株を買ってくれ、一緒に勉強会をやらないか、こういう事業を計画している、是非あなたに参加してほしい……。様々な用件を次々に頼み込まれ、閉口したクロトは用心棒を雇って事務所前に立たせ、来客を全員追い返すことにした。

怪しい儲け話など興味もない。ただ自分の力を試したくてフォール街で戦っているだけだ。株仲間はいずれだけで間に合っているし、仲間を増やそうという意欲もない。

「それはダメ。全く、完全に、なっていない」

毎日ただひたすら訪問客を追い返すだけのクロトにカイルがダメ出した。

「おれは忙しい。人脈も必要ない。昨日までヤツプとバカにしていたくせに、記事ひとつで手のひらを返すような人間をおれは信用しない」

「レッスン二十四。あのなかには有能な人間も紛れ込んでるんだから、そういうのを選別して手駒にしないと。相応に優秀な人間なら、きみの身代わりにもなれるわけだし。アホと付き合う必要はないけど、野心的で優秀な人間は積極的に取り込もうよ。ぼくがきみを取り込んでこままで上って来たように、ね」

邪気のないカイルの笑顔を、クロトは気に入らなそうに睨み付け、

「おれはお前の手駒ではない」

「わかっているよ、相棒（バディ）。けれどこれからは部下を加える必要がある。大勝負の時期がくる前に、こっちも態勢を整えておかないと」

カイルにねちねち説教されて、クロトは渋々、受付係を採用することにした。

「スタッフが増えてきたな」

「これからますます増えるよ。そのうちここは手狭になる」

そうなりそうだと、クロトは遠い視線でもうすっかり馴染んだトレーディングルームを見回す。自分自身は変わらないのに、周りの見る目が勝手に変わって、欲に駆られた人間たちが目

をぎらぎらさせて集まってくる。うっとうしいが、今後はそういう連中とも付き合っていかなければならないらしい。雪化粧したアパート群を窓のむこうに眺めながら、クロトは乾いた胸中を持って余していた。

ニューヨークの四季は、日之雄となんら変わらない、淡やかな色彩の移ろいがあった。

白く染まっていたセントラルパークからゆっくりと茶色い地面が顔をのぞかせ、やがて若葉が芽吹きはじめる。堅かった空気が解きほぐれ、花園を蝶が舞い、驚いたことに池のほとりには桜が咲いていた。日雅友好の証として、三十年ほど前に日之雄から苗木が送られたそうだ。

摩天楼を背景に、散りゆく花卉が風のかたちを教えてくれる。青空に映える薄紅色の花卉は、クロトとサツキに切ない郷愁をかきたてた。

帰りたい。

けれど日之雄に戻ったら、大逆事件の当事者として国民から糾弾される身の上だ。マスコミと野次馬に家を取り囲まれ、連日連夜野次られる境遇に比べたら、人種差別を受けるとはいえガメリアのほうがまだマシだった。クロトはサツキの手を強く握って、見えない誰かの応援みたいな優しい風を黙って頬に受けていた。

取引は順調、カイルとクロトの躍進はつづいていた。

これから伸びそうな分野を選び、めばしい企業はとにかく丹念に企業調査を行って内在価値を見定め、水面下に眠る優良株を引き当てて、大きく育て、売り抜ける。言葉にしたなら簡単そうだが、「安く買って高く売る」のは時期の選定が非常に難しい。クロトはまるで株価の天井が読めるかのように崩壊寸前で見事に売り抜け、クロトの売った株は屋台骨を引き抜いたように値を下げていった。

うだるような夏が過ぎ、秋が来た。

クロトの評判を聞きつけ、野心的な投資家たちが次々に事務所を訪れた。クロトとカイルは特別に優秀な投資家たちと勉強会（カンファレンス）をひらくようになった。

選ばれたのは様々な個性を持つ三人の若手だった。

クロノス――。

誰が名付けたか、いつのまにかクロトとカイルを中心とする五人の投資家集団は、フォール街関係者からそう呼ばれるようになっていた。クロトの名字「黒之」は、音がグリシヤ語の「Chrono（時間）」と同じだ。適切なタイミングで取引を行うクロトがまるで時間を操っているようだということで、誰かがそう言い出した。大仰すぎる名前だとクロトは毛嫌いしているが、フォール街の相場師たちは「クロノス」の動向に着目し、彼らが手を出す銘柄を後追いで買った。

時間が立つほど、フォール街への「クロノス」の影響力が増していく。

仕事は忙しくなり、健太とサツキは黒板を卒業して、クロトから資金を分けてもらい、自ら

も株式投資に挑戦しはじめた。専門のチョークマンが事務所に入り、出入りする人間も増えてきて、事務所もいよいよ手狭になりはじめた十二月五日――。

「カイル。これを見る」

証券取引所が閉まって、残務処理も終わった午後六時。

クリスマスの準備がはじまった街並みを窓の外に見下ろして、クロトはカイルの執務机に歩み寄り、ノートの手書き込みを見せた。

「……………」

複数の計算式の連なりだった。はじめは訝しそだったカイルの視線が、徐々に鋭くなる。

「昨夜、いきなりひらめいた。……お前の意見が聞きたい」

ふたたび研究を開始してすでに一年半近く経つ、オプション取引の最適値を求める微分方程式だった。クロトは毎日、寝る前の一時間を「現代錬金術」の鍵となる微分方程式の探求に当て、昨夜とうとう、これまでで最も満足できる式に辿り着いた。

「従来の計算式にリスクフリー資産の利率、株のリスクプレミアムとオプションのリスクプレミアムを組み込み、観念的株式市場、すなわち非線形数理モデルにおいて収益率を検証した。

……結果、あくまで簡易モデル上ではあるが、この方程式を使ってオプション取引した場合、収益率は五百四十%を超える計算となった。しかも、リスクは限りなくゼロに近い」

クロトの説明を片方の耳で聞きながら、カイルはじいっと難解な数式の羅列を目で追って、黙考をつづける。

「考えること、五分。」

ふう……とカイルは長い溜息をつき、視線を持ち上げた。

「面白い。すごいよ。こんな方程式は前例がない。画期的なのは間違いないが……やはり株式市場モデルが観念的すぎるのが弱点だね。性能の良い電子演算器が現れたら精度の高い検証もできるだろうけど。本物の株式市場で自腹を切って検証するにはリスクがあまりに高すぎる……」

……。この式、きみの名前で学界に発表してみない？」

「やめろ。あくまで遊びで作った計算式だ、専門家の前に出せるものではない。それよりお前の研究はどうなった」

「……すまない。研究のための時間が全然取れない。ぼくもまさか短期間でここまで多忙になると思っていなかった」

ふたたびで計算式を独自に研究し、ふたつの式が一致したら完成だ、などと言っていたくせに、クロトだけに研究させてカイル自身は株式取引に没頭している。クロトは呆れて、嫌みたらしく溜息をつく。

「……どうする？ お前が諦めるならそれでもいいが」

「諦めてはいない。だが一時凍結ということにしよう。いまは『クロノス』の活動のほうが大事だ。また一文無しになったら一緒に研究を再開すればいい」

「……いっつもながら勝手な野郎だ」

吐き捨てるけれど、応用数学・応用物理学を用いて株式市場へアプローチする取り組み自体は勉強になったし面白かった。「クロノス」メンバーのひとり、メリッサがこの方程式に興味を持っていたから、研究を引き継ぐのもいいだろう。……などとおのれを慰め、クロトはいつものようにジェシーの店へホットドッグとチキンガンボの注文を入れた。

年が明けて、聖暦一九三四年、一月——

カイルは新しい事務所をフォール街の近くのオフィスビルに借りた。クロトとサツキがここロウアー・イーストサイドに移り住んでからちょうど一年半が経っていた。

荷物を積んだトラックが新たな事務所へ出発したのを見送ってからカイルは笑顔をたたえた。

「さて。カイル・マクヴィル追い出しパーティーしようか」

「いえーい」「わーい」

サツキと健太が拍手して、トレーディングルームにテーブルを運び込み、特別に作ってもらったジェシーの手料理を並べていく。

クロトは肩を自分で揉みながら、カイルへ仏頂面をむけ、

「今後、お前のにやけ顔を毎朝見なくて済むのは僥倖だ」

憎まれ口を叩くと、カイルはにやける。

「寂しいって正直に言いなよ、相棒」

「お前の蔵書がなくなるのは寂しい」

「素直じゃないね。で、きみはいつまでここに住む気？」

「引越しの必要性を感じない」

「感じていいと思うよ。狭いし。ここに住むメリットは？」

「ジェシーのホットドッグが旨い」

カイルは眼鏡の奥の碧眼に哀れみに近いものを溜めて、

「……日之雄人って禁欲的なのかな。稼いだカネは使わないと意味なくない？ もう五百万ド

ルは稼いでるのにこんな狭くて汚い事務所で一年半も同じホットドッグ食べてるのなんで？

ホットドッグになりたいの？」

「ガメリアに来て思い知ったが、この国のハンバーガーとホットドッグは実に旨い。なかでもジェシーの店は最高だ」

テーブルに並べられた料理からチーズバーガーを手にとってむしゃむしゃ食べながら、クロトはびくりとも表情を変えないことなくそんなことを言う。

「おいしいならもうちょいおいしそうに食べなよ。なに食べてもまずそうだと、ジェシーが泣くよ？」

いつもまずいものを食べているような表情をたたえているクロトは、好物を食べているときも同じ顔なのでわかりづらい。カイルが香辛料たっぷりのザリガニ料理をつまみながらクロトの無表情を眺めていると、「クロノス」の三人が事務所に顔を覗かせた。

「ようカイル、美人秘書雇ったらしいな、明日新事務所行くぜ、秘書に会いに」

JJが笑みをたたえ、カイルに歩み寄って握手を交わす。ポマードでびしりと固めた金髪、スポーツで鍛え上げた肉体に吸い付くような高級スーツをまとい、颯爽とした出で立ちと快活な台詞はハリウッド俳優さながら。頭のキレと行動力に優れ、少々の違法行為は厭うことなく独自のルートで秘密情報（ホットチップ）を収集してくる、野心あふれる青年相場師だ。

「それに比べてクロトは無欲だな。ずいぶん儲けてるだろ？ 派手に遊ばなきゃ損だぜ、おれと一緒にクラブ行くか？」

よく稼ぎよく遊ぶJJへ、クロトは無愛想な台詞を投げる。

「いいぞ。お前の嫁と一緒にな」

「おう、クロト、降参だ。クラブはトムスポンに連れてってもらえ」

愛妻家に話を振られたトムスポンは、表情を怒りに燃え立たせ、

「わたしはそのような不潔な場所に興味は無い。ここには遊びに来ているのではないのだ」

体型は小柄でずんぐりむっくり、顔立ちには眼鏡をかけて下ぶくれ。庶民風のスーツをきっちり着込み、栗色の髪をびしりと七・三に撫つけたトムスポンは、そんな言葉でJJを戒める。

きりつと引き締まった表情からは「生真面目」という単語が溢れ出て、他者の口腔内にも当然のように押し込まれる。

「だいたいきみが投資家をつづける理由がなっていない。がっぼり稼いでさっさと引退して豪華客船で世界旅行？ カネのために株をやるべきではない。カネが欲しいなら真面目に働くのが最善だ」

憤慨するトムスポンにJJは軽蔑の眼差しを投げ、冷やかす。

「頭は大丈夫かトムスポン。カネ儲け以外、なんのために株をやる？」

「愛のためだ！ 資金繰りの厳しい企業を応援するために、我々投資家は存在する。その愛が中小企業を育み、合衆国のさらなる発展を約束するのだ。株は手段に過ぎない、愛で世界を救うことこそガメリア人の本懐だ！」

なんの迷いもなくそんな台詞を紡ぐトムスポンを見やり、JJはクロトを振りむいて、

「救急車呼ぼうぜ」

「平常運転だ。そろそろ慣れる」

トムスポンを面接して「クロノス」に受け入れたのはクロトだ。理由は、面白いから。当たり前の表情で「株の本質は愛だ」「株という愛がやがて世界を救う」などと熱弁を振るのが面白くてメンバーに加えた。

「クロト！ わたしは間違っているか？」

「わからん。だが感心している。さすがガメリアは個人主義を尊ぶ国家だ。お前のような珍しい生物も生息するとは、正直度肝を抜かれた」

ふっ、とトムスポンは満足そうに笑い、眼鏡の蔓を指で押し上げた。褒められたと思っただけらしい。

「さすがクロトはよくわかってる。……合衆国は世界の規範たねばならない！ 良心こそがガメリアの宝だ！ フォール街の投資家は誰よりも清く正しく品格を保つ責任がある！」

押しつけがましい演説に、サツキと健太が笑顔で拍手し、その傍ら、唯一の女性メンバー、メリッサはなぜか、直径四十センチほどの小型ルーレットを持ち込んで、トレーディングルームの床に据え置いた。

「クロトさん。先日ご質問のあった、カオス理論について説明します」

自分で切ったとおぼしい、ざんばらの赤毛。ファンデーションって食べ物ですか、マスカラって何味（なにあじ）ですか、と無言の問いかげが聞こえてきそうなありのままの顔面。着ているセーターには買った側と編んだ側の正気を疑う、手足の長い瘦せた生物が不満そうにこちらを見つめる。パッチワーク。異性の目線が自ら屈折して回避しそうなオタク女性の出で立ちだが、冷たく醒めた紅の瞳だけ、触れれば切れそうな鋭さをたたえている。

「うむ。頼む」

クロトはメリッサのむかひに屈んで、カジノのものと同じ、赤と黒のポケットが三十八個ひらいた簡易ルーレットを見つめる。

「行きます」

メリッサはルーレットを回し、球を投げ込み、回収して、また投げ込むのを五回繰り返す。

球が入ったポケットはそれぞれ「15」「28」「13」「30」「4」。

メリッサは醒めきった眼差しをクロトへむけて、

「これが、カオス理論です」

「なるほど。全くわからん」

クロトの即答に、メリッサは「なぜわからない」と言いたげに悔しそうに唇を噛んでから、おもむろに黒板へ数式を羅列する。

球の初速、ルーレットの回転速度、それにより生まれる数多の軌道……。ルーレット上の球の振る舞いを予測する数式だった。

「三ヶ月かけて一万回ほどルーレットを回しデータを取ってみたいところ、ルーレット上における球のカオス的な振る舞いには決まったパターンがあることに気づきました。こちらがその研究成果です」

メリッサはしなびた革バックからノートを数冊取り出してクロトへ提出した。中を見ると、ルーレット内での球の振る舞いを分析した計算式がびっしり書き込んである。

「このパターンを仮にアトラクタと呼びましょう。わたしの研究ではアトラクタは高度に複雑

なフラクタル構造から成っており、その根拠は……」

メリッサは黒板に新たな数式を書き連ねていき、長く複雑な説明をつづける。概要はつまるところ、ルーレットや相場や気象など一見自由きままな現象には、シンプルな入れ子構造が潜在するのではないかという発展途上の理論だ。

一連の説明を終えたメリッサに、サツキと健太が拍手する。

「メリッサすごい。かっこいい」

「メリッサさんの株式市場モデルが出来上がったら、クロトさんの方程式も完成に近づきますね。だんだん現代錬金術が見えてきた感じですよ！」

健太の言葉に、メリッサはやや不満そうに目元をびくりと動かし、

「……わたしの研究目的は錬金術ではありません。わたしがクロノスに参加した目的は、物理学が抱えるジレンマを克服することです」

不思議そうに顔を見合わせるサツキと健太に、メリッサはぼそぼそと告げる。

「このまま株式市場への数理的アプローチが加速していけば、金融は最終的に一定の演算方式（アルゴリズム）に辿り着き、参加したものが必ず儲かる金融商品運用法（ポートフォリオ）を獲得するかもしれません。しかしそうだったなら、この世界の人間はみな金融をはじめしてしまうため、働くものがいなくなり、崩壊する。数理が世界を滅ぼすことがあってはならない……。わたしはクロノスの活動を通じ、応用物理学が世界を救うシステムを株式市場に構築したい。わたしがここに参加する目的はそれだけです」

木訥としたメリッサの演説に、トムスポンが反論する。

「愛だろ愛！ 世界を救うのは愛だけだ！」「いえ、応用物理学です」「愛だ愛！」「なくても物理学は機能します」「研究費用は税金だ！ 税金という国民の愛が物理学を支えている！」

「うるさい黙れどっちでもいい」

不毛な言い争いをひとりで収め、クロトはずっと気になっていたメリッサのセーターの奇怪な生物を指さし、問いかける。

「この生物は実在するのか」

「豚です」

「……………」

クロトはじつくりと、直立してこちらを見つめる手足の長いあばら骨の浮き出たピンク色の生物を鑑賞する。どう見ても宇宙怪獣だが、着ている本人が豚だというなら受け入れるしかない。

「きみの協力に感謝する。カオス理論から株式市場モデルへアプローチする試みは非常に興味深い。だがこの方程式は、カイルがやめると言い出した。研究は中止だ」

言われて、メリッサはしばらく黙ってクロトを見つめる。セーターに刺繍された奇怪な豚も一緒に、不満そうにクロトを見ている。

ややあって、乾いた唇がカイルにむかってひらいた。

「……………やめる？ これだけの研究を……………ここまで進めながら？ ……………途中で諦める？」  
カイルは申し訳なさそうに、頬を人差し指で掻き、

「あ……………。最近忙しくって。研究に時間が取れない。悪いけど一時凍結ってことで」

メリッサの口があんぐりひらき、ひとことの言葉もなく目線だけカイルに据えられる。セーターの豚もいまにも主人と一緒に口をひらきそうな不気味な雰囲気醸し出す。

「豚と一緒に見つめないで怖い。……………ぼくはしばらく協力できないけど、クロトと一緒に研究つづけられれば？ ぼくの研究ノート、良かったらあげる」

提案され、メリッサは身体ごとクロトを振りむき、豚と一緒に無言で見つめる。

「……………豚ごと振りむくな。……………おれのはカイルに言われてはじめた研究だ。なんならきみに引き継ぐ。おれの研究も持っていつてくれ」

クロトも研究をメリッサに引き継ごうかと考えていたし、ちょうど良かった。ふたりから最大限の好意を受けて、ようやくメリッサの目線から鋭さが剥げる。

「……………そう仰るなら。これだけの成果を途中で投げ出すのも憚られますし。おふたかたの努力に報いることができるよう、最善を尽くします」

カイルとクロトの研究ノートを受け取ったメリッサはソファーに腰掛け、しばらく目を通してから、改めてクロトの元へ歩み寄る。

「おふたかたは、別のルートから山を登っているわけですね。どんな経路を通っても、最終的に頂上に辿り着けば良いと」

「ああ。きみの場合はカオス理論ルートから登頂を目指すのが最善と思われる」

「……………そうですね。おふたかたの研究を参照しながら、わたしのやりかたで登頂します」

「きみにはおれに倍する熱意と執念がある。その情熱があればいつか必ず山頂に辿り着くと確信している」

他人に無愛想なクロトがぎこちなく紡いだ応援の言葉を、メリッサは神妙に受け取った。

横からサツキが、

「ねえメリッサ、そのセーターどこで売ってる？ わたしも欲しい」

「やめろ！」

メリッサの返事より先に、クロトは悪鬼の表情で妹をたしなめる。

「こんな変なセーター、着るな！」

「え？ 全然変じゃないよ、かわいい」

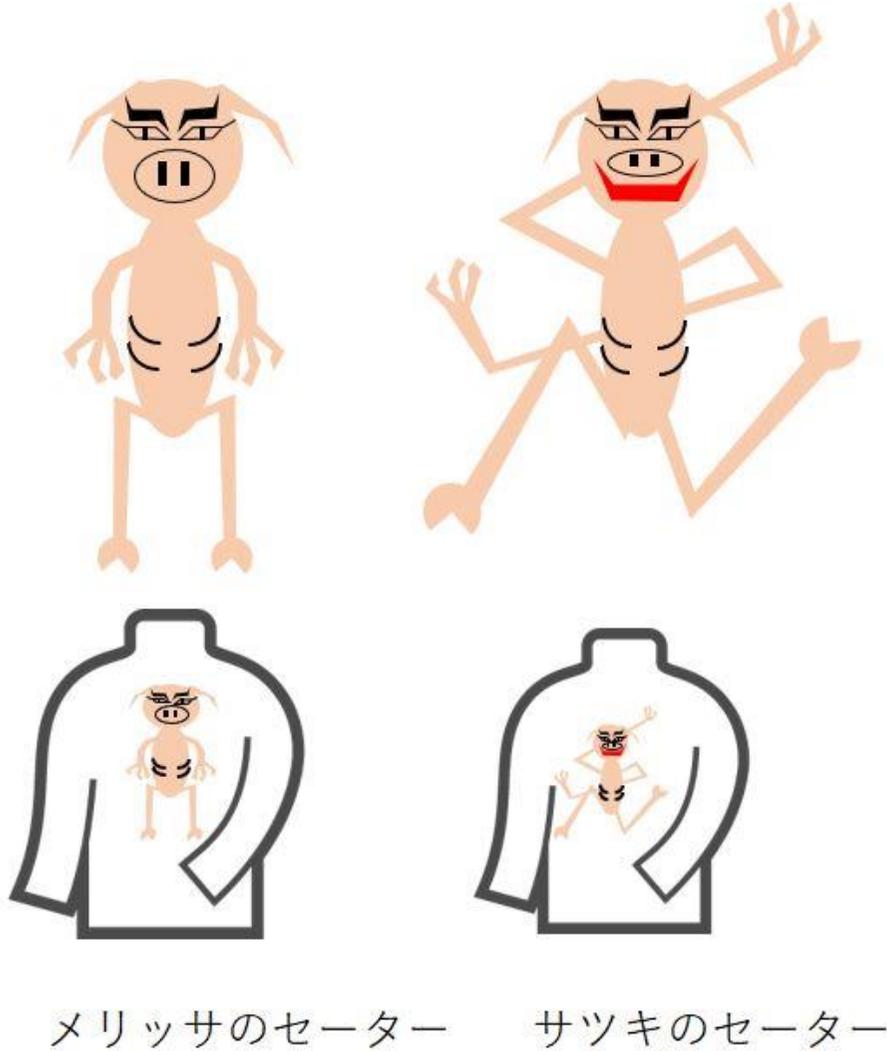
「……………祖母の手編みです。良ければ同じものを編んでもらいましょうか？」

「やったー」

「やめろ！」

クロトの怒りも虚しく、メリッサは希望のパッチワークを尋ね、サツキはその豚が長い手足

夜が更けて、客たちも帰り、サツキは自分の部屋で眠って、トレーディングルームにはカイ  
ルとクロトだけが残った。



を振り乱して激しく踊るシーンを依頼した。  
「気持ち悪い！」  
クロトはさらに怒鳴る。  
「えー、絶対かわいい」  
「祖母も喜びます。祖母のセーターを着た友人が次々に事故や病気に見舞われたため、いまだ  
はわたししか着るものがないんです」  
「祖母おかしいぞ！ サツキやめる絶対に着るな！」  
クロトは必死に止めるが、サツキは大喜びでメリッサに表情やポーズについて詳細を伝える。  
「この豚は崇る！ そういう顔つきだ！」 「こんなにかわいい豚がほ お兄様は心配しすぎで  
す！」 ……などとクロトとサツキの押し問答はいつ果てるともなくつづいた。

カイルはワインを口にしながら、相変わらずクロトに引越しを勧める。

「家は事務所と別に買ってもいいと思うよ。サッキーも喜ぶし。そのくらいのカネは稼いだでしょう?」

「……家は持たない。カネが貯まったら日之雄に戻る。いつまでもガメリアにはいない」

「えー。戻ったら罪人扱いなんですよ? こっちにいればいいのに」

「……何年先かはわからんが、ガメリアと日之雄はいずれ戦争状態に至る。そうなれば日之雄人は隔離され、銀行口座も凍結される。そうなる前に日之雄に戻りたい」

「……なるほど。……それもそうか」

株式相場の勉強をつづけるうちに、クロトは日雅決戦が不可避であることを悟っていた。主要国の財政計画と証券取引所のデータを見比べて、近年、ガメリア合衆国、ルキア連邦、リンランド帝国では不自然な予算が膨張していることに気づいたのだ。

「ルキアではなにもない凍土地帯の開発費用、ガメリアでは植民地のインフラ開発費……。それまで影もかたちもなかった項目に、いきなり日之雄の国家予算に匹敵するカネが投入されている。これだけカネをかけたなら当然なんらかの成果があがるはずだが、該当部門はなんの動きも見せない。平和的目的に計上した予算を、秘密裏に軍事費に回した可能性が高い。試しにルキア官営鉄道の経営資料を調べ上げたら、莫大な予算がシベリア鉄道の複線化に充てられていた。……ルキアが日之雄侵略を国策としていることは明白だ」

日之雄の北方に位置する大国ルキア連邦は四十年前に日之雄と「日留戦争」を戦い敗れた。敗因のひとつはシベリア鉄道が単線だったため、兵站が十分に機能しなかったことだ。もしも複線化されたなら、ルキアは強大な国力を生かして後方から続々と兵員や物資を送り込み、やがて日之雄を呑み込むだろう。

「さらに踏み込んで調べたところ、ガメリアもリンランドも、民間造船会社が軍艦を大量に受注していることがわかった。西洋列強は最後の有色人種主権国家、日之雄を占領するためすでに戦争準備に入っている。列強が戦争を望んでいる以上、外交での回避は不可能。恐らくこれから数年以内に戦争になる」

クロトの言葉を、カイルは否定しない。

日之雄は西洋列強に侵略されないために自らが列強となる道を選び、長きに渡る富国強兵の末に恩半島を併合し、その北方に傀儡国家「紺州国」を建国、アジアの大国「部」と戦争状態にある。資源を持たない日之雄が生き延びるには、列強に頼らず自給自足できる経済圏を拡大するしかない。拡大するには武力が必須。だから官民合わせて国家予算の三割を軍事費に充てる無茶苦茶を開国以来推進しつづけてきた。

結果、強くなりすぎたことが白人国家の逆鱗に触れた。

有色人種の分際で白人の真似をし、他国を侵略するとはなにごとか。それをやっていいのは白人だけだ。人間を真似た猿は厳しく躰けて、盗んだものを没収してやらねば。

ずいぶん白人に都合の良い理屈だが、ガメリアは現在、日之雄の対外政策に口出しし、経済制裁をちらつかせ、日之雄が実力で勝ち得た領土や特権を奪い去ろうとしている。なぜ当事者でもないガメリアがアジアの出来事に口を出してくるのか、日之雄は不満で仕方ない。当のガメリアはハワイもフィリピンも卑怯なやりかたで植民地化したというのに、日之雄のやることにはしたり顔で「それは犯罪だ」と言ってくる。

Might is Right.

腕力は正義。

強いものは弱いものへ要求を突きつけつづけければ良い。相手が戦わずして譲歩したなら不平等条約を締結し、徐々に特権を剥ぎ取っていく。同時に敵国の不満分子に武器を供給、内乱を発生させて親ガメリア政府を打ち立て、最後は国家主権さえ奪い取る。ガメリアはハワイもフィリピンもそうやって善人面を保ったまま乗っ取ってきた。無茶な要求にキレた相手が殴り返してきたなら「国際秩序を乱すならずもの国家」の烙印を相手に押し、原型を留めないほど殴りつけ、こちらの要求を死体の口へねじこめばいい。

大国に狙われた小国に逃げ場はない。

日之雄に残された道は、戦わずして滅びるか、戦って滅びるか、ふたつにひとつだ。

「……この国に来て、おれは日之雄人だと自覚した。しかも強烈に。……おれは、日之雄がガメリアやルキアに踏まれる未来を傍観したくない。……だから戦争になる前に日之雄へ戻っておれのできることをやると決めた」

カイルは皮肉めいた笑みを口元へたたえ、ワイングラスを傾ける。

「罪人のきみが、日之雄を救うと？」

「……救う、とは言わん。だが、できることはあるはずだ。それがなにかはわからんが」

カイルは小さく声に出して笑い、

「東京に戻っても、きみは確実に相場師として大成するよ。稼いだカネで鉄鋼業や造船業を支援するだけで国の役には立てるだろう。……ただ、焼け石に水だがね。日之雄の国力では絶対に、ガメリアに勝てない」

クロトは無言で頷く。この目でガメリアを見て回ったからわかる。カイルの言うとおり、これは絶対に勝てない戦争になる。

だが。

「勝てずとも、あがきたい。最初から最後までガメリア人の思い通りになるのは不愉快だ。せめて顔を殴りつけ、鼻血くらいは出させてやる」

「ぼくらの鼻血ときみらの命を等価交換？」

「日之雄はサムライの国でな。恐れるのは死ではなく恥だ」

ふふっ、とカイルは薄く笑い、気取った手つきでグラスを掲げる。

「日之雄人の蛮勇に」

ふん、とクロトは鼻を鳴らし、コーラの瓶を掲げ、

「ガメリア人の強欲に」

やり返す。カイルはソファーに深く腰掛け、長い足を組み替える。

「欲望はこの国の原動力だ。フォール街も摩天楼も、欲望を地盤にここまで発展してきた。果てなき膨張は資本主義国家の宿命(テーゼ)、日之雄はおとなしくガメリアの欲に呑まれたまえ」

「常々理解出来ないのだが、質問していいか」

「これは珍しい。どうぞ」

「ガメリア人の欲望にゴールはあるのか。たとえばお前は、どこまで行けば満足する」

クロトのストレートな質問に、カイルはふんぞり返って即答する。

「頂点。二番は意味がない。ぼくのゴールはフォール街の頂点、世界一の金持ち」

「夢を叶えたあとはどうする。次はナンバーワンの立ち位置を維持せねばならんぞ。二番以下はお前を羨み、そこから引きずりおろそうとする」

「当然、受けて立つさ。二度とぼくに歯向かえないよう、分子レベルに磨り潰してやる」

「辛くないか？ 終わりが無いぞ。頂点にしがみつき、陥落することを恐れ、追い上げてくる後続と死ぬまで闘争を繰り返す……。そのどこに幸福を見出す？」

クロトの質問を、カイルは笑ってはね飛ばす。

「きみの能力は十三才児を遙かに超越しているが、思想は年相応に未熟だね。……レッスン二

十五。相場師は幸せなど求めない」

「……………」

「幸せな生活を送りたいなら、この街を出て田舎に喫茶店でもひらくといい。開店から閉店まで常連客と談笑し、そこそこの妻とまあまあの子どもをもうけ、夜は家族で食卓を囲み他愛ない話で盛り上がる、申し分のない人生がそこにある。だがフォール街に住まうのはそんな持続的で緩慢な幸せなど顧みない怪物たち、人間の成れの果てであることを忘れるな」

カイルの翡翠色の瞳に妖しい光が宿り、退屈そうない声が流れ出る。

「ひとのかたちの溶け落ちたバケモノの群れだよ。膨張に取り憑かれたバケモノが、終わらないダンスを踊っている。……幸せな時間なんてあるわけがない。あるとすれば敵の持ち物を奪い取り、自らがまた肥え太ることに成功した、その刹那的達成感だけだ。……きみが幸せな生活を望むなら、いまのうちに降りることだと忠告しておこう。フォール街の生活が長くなるほど、地上の欲得に骨の髄まで絡め取られていく。このしがらみからは永久に逃れられない。舞台を降りることができるのは、高層ビルから身投げするときだけだ」

ひといきにそう言って、笑みに似たなにかを口の端にたたえる。

「カネは権力だ。握った権力を行使したなら、しがらみが生まれる。打たれたものは権力者を恨み、弱者を打って利益を得た取り巻きは次も同じことを権力者に望む。その場から引きずりおろされたいためには、権力者は周囲を打ち倒しつつつけねばならない。止まりたくても止まれ

ないのさ。止まった瞬間、恨みをもつものに組み敷かれ、自分が敗者に落とされるのがわかってから。相場師も、ガメリアという国も、ただ握ったものを失わないために戦いをつづけている。幸せになるためじゃない、惨めに踏まれたいために膨張をつづけているんだ」

カイルはいつもの皮肉めいた笑みを保ったまま、長い言葉を紡ぎ終えた。

クロトの耳に音のない旋律が届く。はじめて会ったとき伝わってきた、調律のくるったオルゴールじみた、悲しくひしやげた破調のメロディ。

クロトは窓の外へ目をむけた。夜の色は窓ガラスを鏡に変えて、そこに映るカイルの横顔はなぜか泣いているように見えた。

——ここから出して。

そんなカイルの声が、どこからか聞こえる。

——怖いよ、母さん。

壊れたメロディを伴奏にして、クロトの耳には不思議なくらい痛切に、涙に濡れたその声が響いた。

「……なるほど。……カイル。……少々、青臭いことを聞いて良いか？」

問いかけると、カイルは片目だけを怪訝そうに持ち上げる。

「……まあ、十三才だから青臭くて当然だと思うけど。興味があるね、どうぞ」

「絶対にからかうな。真面目に答えるなら質問する」

「なになにいきなりもつたいぶって。……わかった。絶対にからかわない。きみの青臭い質問に真面目に答えよう」

カイルは背もたれから上体を起こし、ぴんと背筋を張ってコメディ役者じみた生真面目すぎる表情をたたえる。

クロトは気まずそうに咳払いして、それから、決まり悪そうに表情を歪ませ、あらぬ方向をむいて質問する。

「その……あれだ。お前は……あれを信じるか」

「……………」

「その……………友人などは、信じられるか」

「……友人を？」

しばらく怪訝そうな表情でクロトの質問を受け、数秒後、カイルはぱあっと晴れやかに笑んだ。

「ああ！ 友人ってきみのこと？」

「……………」

あけつぷろげな答えに、クロトは表情をさらに歪める。

「はっはっは！ なんだクロト、きみ、ぼくに信じて欲しいのは 意外だな、きみもそんなふうに思ったりするんだ、はっはっは！」

からかわれ、クロトは顔を真っ赤にして怒鳴り返す。

「違う！ おれのことではない、一般的な概念としての友人というものを信じたことはあるのかなのか、そういうことを聞いているのだっ！」

「照れるなよー。いいじゃん別に、ぼくにどう思われているのか知りたいだけだろー」

「ち、違うわっ！ 貴様、からかわないと誓っただろうが！ 最低な野郎だ、ひとがせつかく真面目に尋ねてやったというのに、なんだその態度、最低だっ！」

真っ赤な顔で怒鳴り返すクロトをさんざんからかい、カイルは目元を指でぬぐいながらひとしきり笑ったあと、愉快そうに背もたれに上体を戻し、天井を仰いだ。

笑い声を収め、ふうっと長い息を吐き出す。

「悪い悪い、真面目に答える。あまりに意外だったから、思わず笑ってしまった、謝るよ。答えるから、ちよっと待って……」

そう告げて、長い沈黙。

天井を見上げたままなので、クロトからカイルの表情は見えない。

暖炉の薪の爆ぜる音が、やけに大きい。

ややあつて、はつきりとしたカイルの言葉が、トレーディングルームに響いた。

「レッスン二十六。フォール街では友情など信じるな」

いつもの明るいあつげらんとした口調で、そう告げる。

「感情は失敗の元だよ。相場師に必要なのは理知性と冷酷さ、それのみ。余計な情緒は早いうちに捨てること」

「……………」

「以上。なにか質問は？」

「……いや、特にない」

「言つたろう。この街で生きていたって幸せにはなれない。きみの心根はもしかすると、相場師にはむいていないかもしれないね。実はけっこう、優しいところがあったりするから。もしかすると軍人むきかもよ」

「……軍人に優しさは必要なからう」

「あるよ。国民のために自分の命を差し出して戦うなんて究極の優しさじゃないか。日之雄に戻ったら軍人になれば？ そっちのほうがきみの能力を生かせる気がする」

朗らかにそう言うカイルへ、クロトは「けっ」と舌打ちを放ち、目を逸らす。

「……お前の言うとおり、おれは子どもだ。理解できんことは多い。だが……参考にはなった。ここがお前のような怪物の巣窟であることは肝に銘じておこう」

うんうん、と二度頷いて、カイルは両手を天井へ突き上げ伸びをした。

「さて、眠くなってきた。長話は終わりだ。明日からオフィスは別だけど、クロノスの活動には参加するよ。そのうちお互い、協力したい事案も出てくるだろう。友情は信じないが、きみ

の能力は信じているし、今後も有効に利用したい。きみもぼくを存分に利用したまえ。フォー  
ル街では功利的な関係のほうが長持ちする」

カイルはつれなく告げてソファから腰を上げ、自室へ戻った。

「……………」

クロトはひとり、執務机についたまま、カイルの背中を見送った。ロサンゼルス  
の雑踏で出会ってからもうじき二年になるが、時間が経つほどカイルという人間がわからなくなる。

ただ、ひとつ言えることは。

——悲しいやつだ。

そしてカイルの抱えた悲しみに、なぜか惹かれる。そのねじくれた感情の根源を覗き込んで  
みたいという不思議な興味が湧いてくる。なぜ自分がそんなことを欲するのか、クロトにはよ  
くわからない。

「……寝るか」

なんだか自分の思考がつかめない。知らないうちに疲れが溜まっていたのかもしれない。今  
日は早く休むことにして、クロトも椅子から腰を上げた。

†††

カイルが事務所を引越してから、窓の外の街路樹で四季の移ろいを知る、忙しい日々が  
つづいた。

株式相場は上がりもせず下がりもせず、フォーラ街の投資家たちは淡々と売り買いに励んで  
いた。クロトも資金を増やすことに専念し、徐々に自分のやりかたを磨いていく。

証券会社から送られてくるデータを入念に調べ、企業の内在価値を突き止めて、これは、と  
決めた銘柄であっても、いきなり飛びつかない。

まずは予定投資額の二十%の予算で打診買いを行って様子を見、値が上がるようなら徐々に  
買い増し、下がりはじめたなら早急に手じまい。敵陣に威力偵察を送って敵情を確認してから、  
攻撃か撤退か決断をくだす方式だ。大事なのは市場の流れを読むことであり、そのために毎日  
株式市場の値動きを記憶して、わずかな変化にも即時に反応できるようにした。

ガメリアへ渡ってからずっと主要三百銘柄の値動きを暗記しつづけた成果なのか、クロトに  
は株式市場の「周期」を読む大局観が備わろうとしていた。

漠然とした感覚だが、過去の値動きも踏まえたうえで売買の最終決定を下すのは、これまで  
積み上げてきた努力の総体としての「直感」が必要となる。株の値動きは計算式では予測でき  
ない。どうしたって最後の決断はおのれの直感に頼るしかない。その直感の精度を高めるため  
に、クロトは毎日、証券取引所が閉まってからも夜遅くまで勉強をつづけていた。

カイルが事務所を出て行って一年半が経ったころには、クロトの實質保有資産は二千万ドルを越えていた。

すでに億万長者である。ロサンゼルス掘った小屋に住んでいた三年半前、たった二千ドルだった軍資金がいまや一万倍以上に膨れあがっていた。

しかし資産を現金化して人生を引退し、豪華ヨットで地中海クルーズしていれば良いはずなのに、クロトは相変わらずみずみずしい事務所に住み込んで、平均睡眠三時間、夜遅くまで勉強をつづけていた。

株式市場は奥深く面白い。学ぶほどわからなくなり、尽きない魅力が現れる。こちらの読みどおりに株価が動き儲けが発生したときの達成感はないものにも代えがたい。すでに数億ドルの資産を持つフォール街の一流相場師たちが、それでもなお破滅のリスクを抱えて株を売買していることが常々不思議だったが、いまのクロトには彼らの気持ち理解できた。

——彼らは株式ゲーム中毒者なのだ。

株をやっていないと苦しくなる。休暇先の一流ホテルでもつい経済新聞の株式欄をひらき、保有銘柄に気になる動きが出てくると慌ててフォール街へ戻って仕事を再開してしまう。豪邸にハリウッド女優を招いて派手なパーティーをひらいていても、ロンドン市場の動向が気になって仕方ない。

結局、勝とうが負けようが、フォール街の住人にとって相場をやっている時間が最もエキサイティングでハッピーなのだ。株式取引が与える興奮がメインディッシュであり、豪邸もヨットもハリウッド女優もデザート程度、本物の興奮の口直しに過ぎない。そういう特異な人間が群れ集まって、ただ他者を蹴落としおのれを膨張させる快感に酔いしれている。

——おれは、そうなりたくない。

クロトはこの深みにはまることを自ら戒める。

どれだけ大金を稼いでも、どこか醒めている自分がある。

こんなものか、と思ってしまう。これだけカネがあれば、日之雄に戻って家を買ひ、何不自由なくサツキと暮らせる。株式中毒になる前に事務所をたたんでも良いのだが。

カイルに相談すると、こんなふうに言われた。

『レススン三十一。きみはまだ大勝負を経験していない。おのれの全存在を賭けて巨大な敵とのぎを削る経験をしてから、舞台を降りるか決めるべきだ。誰にでもできる経験ではない。きみの持つ本当の能力を発揮させるためにも、フォール街を揺るがす大勝負を経験することをお薦めする』

カイルの言うとおり、クロトはまだ数百万ドル、数千万ドルが飛び交うような大きな勝負を経験していない。それを味わわずにフォール街を去るのは、練習では無敵だが実戦を経験しないまま引退するボクサーみたいで収まりが悪い。

『きみがこのまま活躍をつづけければ、必ず「王」が現れる。勝つにせよ、負けるにせよ、きみ

の力が本当にフォール街に通用するのか、試すには絶好の機会になるだろう。ぼくもその機会を利用して、王を討つべく協力する。だからそれまではフォール街にいてほしい』

カイルの要請にクロトは黙って頷いた。すでに一生遊んでも使い切れないくらいのカネを稼ぎはしたが、なんだか物足りないのも事実。

フォール街には「仕手戦」による一攫千金をもくろむ相場師が多くいて、クロトの知名度が高まるにつれ、何度かそういう輩から嫌がらせのような空売りを浴びせられることはあった。クロトはその都度、すぐに持ち株を売り払い現金化した。ここで感情的になつて勝負に出たなら、クロトは資金の限り買いつづけ、相手も損失覚悟で売りつづけねばならない。先に資金が尽きたほうが負けとなり、買ったほうには莫大な利益がもたらされ、負けた方は莫大な負債を抱えるわけだが、クロトはこれまでその手の勝負は避けてきた。破滅のリスクを抱える意味がないからだ。

だがこれからは違う。

フォール街に住まう魑魅魍魎を自分の力で倒すことができるのか、試してみたい。

——時期を待ち、それが来たら勝負に出る。

クロトはそう決断し、世界経済の動向に目を送り、大事件の予兆はないかと新聞を隅々までよく読んで、外電に目を凝らす日々がはじまった。顔の広いJJに頼んで何人かの新聞記者を紹介してもらい、彼らをカネで手なづけ、めぼしい情報があればすぐに知らせるように依頼した。

聖暦一九三五年、七月——

フォール街に来てちょうど三年が経った、ある日。

十五才になったクロトは相変わらずおんぼろ事務所のトレーディングルームでティックカーマシンの駆動音を聞きつつ、飽きる気配もなくジェシーのホットドッグにかぶりつき、クロノスメンバー、JJと話し合っていた。

「やはり間違いない。ルーマンとストレンクスが、現在マルタ島で秘密裏に会っている」

手なづけた経済新聞記者からのタレコミと、ロンドンの証券会社から送られてきた資料、それにJJが自ら違法な手段で入手した外電を照らし合わせ、クロトはそう判断をくだした。

ガメリア合衆国とリングランド帝国、世界を統べる二大国家の中央銀行総裁が世間に隠れてこっそりと地中海の小島で会談を行っている。いったいなにを話し合っているのか。

「現在、リングランドはデフレが長引き、金（ゴールド）の準備高が底を尽きつつある。なんとかしてガメリアに金（ゴールド）を吐き出させ、ポンドの安定性を取り戻したい。総裁同士が会ったのはその件だとおれは知っている」

クロトの言葉に、JJは熱のこもった視線を持ち上げる。

「ガメリアで金融緩和があり得ると？」

「ああ。他の総裁ならいざ知らず、ストレンクスならやる」

JJは緑眼をくゆらせる。

「いまの相場で金利を下げたら、インフレにならないか？」

「リングランド経済が破綻すればエルマ第三帝国はますます勢いづく。ガメリアにメリットはない。直近のストレンクス総裁のインタビューを読むと、いまの相場はさらに加速できると強弁をつづけている。少々の金融緩和ぐらいでガメリア経済は揺るがない、むしろさらに勢いづく……と投資家へ印象付けようとしているのだ。ハイパーインフレのリスクを抱えてでも、リングランドを救いたい意志がホワイトハウスにある——とおれは見ている」

「……ふむ。……なるほど。だから不動産のジャンク債ね……」

経営破綻のリスクが高い企業が発行する株式は「ジャンク債」と呼ばれ、紙くずになる恐れがあると同時に買値が安く、利回りも高い。クロトの読みどおりに金融緩和が行われたなら市場に大量のカネが回って、市民は利子の下がった住宅ローンで家を買ひ、投資家はインフレに強い不動産に投資する。だから金融緩和が発表される前に安い不動産株を買っておけば、緩和後、数十倍に跳ね上がる可能性がある。

「のし上がりたなら絶好の機会だ。買えるだけ買っておくべきだと推奨する」

クロトの話、JJは腕組みをして考える。

JJは貧しい機械工の父を持ち、奨学金で大学を出た苦勞人だ。クロノスに入ってからクロトと共に堅調な業績を得、いまは百万ドルほどの資金を持つ。

「金融緩和があればいいが。なかったら悲惨だぞ」

「同盟国リングランドの苦境、好況のつづくガメリア経済、エルマ第三帝国の台頭、ストレンクス総裁の性格、以上を鑑みて、近々必ず実行される。ちなみにおれはこれから不動産株に千八百万ドル投資して買えるだけ買う」

「千八百万？ 本当か、大勝負じゃないか！」

「ああ。時期が来た。主力株はグランダーク不動産、追従にオラムホームとアハメド住宅。千八百万ドル、この三銘柄に全部突っ込む」

「ほんとかよ……。クロトがそこまでやるなら……。わかった、おれは八十万ドル、ジャンク債に投資する！」

JJの決断に、クロトは不敵な笑みで応える。

「わかっているだろうが、自己責任だぞ。負けたあとで文句を言うなよ？」

「お前、おれをそんな小さな男だと思っているのか？ 当然、自己責任でやるさ。嫁と子どもと豪華客船のためだ、勝負に出るぞ！」

決意するJJの傍らに、トムスポンが興味深そうに寄ってきた。

「勝負と聞こえたぞ。わたしも混ぜてもらおう。このところ負けが込んでへこたれているのだ」  
トムスポンは自らの眼力で「大きな愛にあふれた社長」が経営する「社会への愛にあふれた

事業を営む会社」を見定めて積極的に投資し、勝ったり負けたりしていた。それでもクロトの買う株に乗っかってなんとか利益を得、五十万ドルほどの資金を持つ。

「よし、愛戦士トムスポン、おれと一緒にジャンク債の海に飛び込むぞ。当たれば三十倍、四十倍も夢じゃない。こうなりや健太とサツキも巻き込んで、クロノス全員でジャンク債に打つて出るか」

JJの提案に、クロトは頷く。

「悪くない。勝てば大きいし、負けても一文無しになるだけだ。だが信用取引は絶対にするな。そのルールを守るなら、サツキと健太も混ぜていい」

信用取引とは、自らの持ち株を担保にして、その十倍近い金額で行う取引のことだ。現在の株式市場は信用取引で成り立っており、これに手を出さない相場師はほほいしない。だがクロトはクロノスのメンバーに、信用取引を禁じていた。

「破滅のもとだ。負けて無一文になるのはいいが、借金を抱えればそのあとの人生を返済に費やさねばならなくなる。取引はあくまで各人の資金に拠ること。このルールが守れないのであれば、事務所への出入りはやめてもらおう」

クロトにとって株式取引はあくまで力試しだった。人生を破滅させるほどのめり込む気はない。勝てば世界一の金持ち、負ければ無一文、そのどちらでも文句はないが、借金返済に人生の貴重な時間を使うことだけは避けたかった。

クロトの直言をJJは了承し、それからクロノスは建設・不動産関連のジャンク債を買い漁りはじめた。

クロトはクロノスが不動産株を中心に勝負に出ることをカイルに電話で伝えた。

『いいね。中央銀行総裁同士が密談したのが本当なら、金融緩和は充分あり得る。乗ろう。大勝負に出るべき時期だ』

カイルも快諾し、クロトに匹敵する資金を不動産に費やした。クロノス七名の動きはまたたくまにフォール街へ伝播し、関係者はクロトの思惑について憶測を交わし合った。

投資家たちは、二大国の中央銀行総裁同士の極秘会談についてなにも知らず、当然、金融緩和の予兆にも気づいていなかった。それよりも日之雄を仮想敵国とした戦争の噂が飛び交って、鉄鋼・合金・エネルギー・造船関連の銘柄が値を上げていた。こんなときに不動産株、しかもジャンク債を買い占めるとは、クロノスはどうかしてしまったのでは。一時期は調子が良かったが、どうやら天狗になったらしい。危険な株に手を出して爆上げを待つなど、素人と同じではないか。

冷笑に構うことなく、クロトは金融緩和を信じて不動産株を買い漁りつづけた。

しかし一ヶ月経ってもガメリア政府に動きはなかった。

必ず金利は引き下げられる、と確信を抱いてはいるが、このところベッドに潜り込むたび、不安に苛まれるようになってきた。

——本当か？ たでおれの思い込みでは？

——ストレンジスがどんなにアホでも、そんな賭けに出る意味はない……。

——ついに大勝負の時期が来た、と早合点したのでは……？

一度弱気の虫が起き上がると、際限なく否定的な思考がつづいて、胃の底が軋む。

金融緩和がなく、ジャンク債がゴミくずになってしまったら、クロトひとりではなくクロノス全員が致命的な損失を被ってしまう。フォール街の相場師からは嘲笑が浴びせられ、所詮はヤップのガキだと見下されるだろう。

——おれだけならいい。だがサツキと健太までジャンク債に全資金を投じた。

——いまなら間に合う。ジャンク債を売り払って出直すことも出来る……。

確信を抱いて勝負に出たはずが、時間とともに確信が削られていき、破滅の兆候に苛まれる。

胃の粘膜を常に紙ヤスリでこすられているような、長く緩慢な苦痛だった。口の端から苦悶の声が、知らず漏れる。

「お兄様」

隣のベッドで寝ているサツキが突然、声を掛けてきた。このところクロトが眠れていないことに気づき、心配している。

ベッドから上体を起こし、サイドテーブルの電球を点けて、十三才になったサツキは長いまつげを翳らせ、クロトを見やる。

「眠れませんか？」

艶やかな長い黒髪と、やや吊り目ぎみの蒼氷色の瞳。華奢な体躯を木綿の寝間着に包んだサツキは、日之雄皇王家の血脈の証ともいえる白皙の美貌を心配そうに歪めていた。

「……いや。……考えごとをしていた。……夜になると、妙な不安に襲われることがある。……おれは未熟者だ」

正直な気持ちがおぼれ出た。サツキは自分のベッドを降りて床に膝立ちになり、両肘をクロトのベッドに乗せて、心配そうな表情を持ち上げる。

「負けてもいいです。無一文も怖くありません。だからお兄様、心配なさらないで」  
「……………」

「サツキはお兄様が一緒にいてくれるだけで良いのです。それ以上は望みません。勝っても負けても、お兄様が生きていてだけで幸せです」

そんな言葉をひといきに紡いで、サツキはまっすぐクロトを見上げる。  
妹の正直な気持ちでクロトの胸に響いて、クロトの涙腺がなぜか潤む。

それを気取られないよう、意志の力で抑え込んで、サツキの肩に手を置いた。

「……どこにも行かん。サツキと一緒にいる」

「……はい。……はい。……貧しくていいです。一緒にいてください……」  
クロトのベッドに顔を埋め、サツキはそう願った。

クロトは思う。

——おれが失敗しても、サツキだけは生きていけるようにしなければ……。

自分が一文無しになるのは構わないが、サツキが路頭に迷うのは困る。万が一、自分になにかあったときのために、後顧の憂いを絶っておかねば。

翌週、クロトは残り資金から百五十万ドルを拠出してサツキのための信託基金を設立し、毎年三万ドルの利息がサツキの口座に振り込まれるようにした。この基金があれば、クロトがどんな無茶をしてもサツキは充分生きていける。

これで怖いものはなくなった。不安を押しつけて買いをつづけ、千八百ドルを全て不動産株につき込み終え、朗報を信じて待ちつづけた。

さらに一ヶ月、抱いたはずの確信を間断なく紙ヤスリでこすられつづける苦しい時間がゆつくりと過ぎて——

聖曆一九三五年、九月十八日。

開場からほどなくして、NY証券取引所に出かけていたJJからクロトの事務所へ電話が入った。

受話器越しに、場内のやかましいくらいの喧騒が伝わった。歓声をあげるもの、神へ祈るもの、ストレンクス総裁への称賛と嘲笑。

つづけて、JJの震える歓声が受話器から届く。

『ありがとう！ お前に会えて良かった、本当にありがとう！ クロト最高だ、愛してる、最高の人生をありがとう！』

ぞくつ、とクロトの背筋が震える。が、努めて冷静な言葉を投げる。

「……落ち着け。なにがあった」

『ストレンクスが金利引き下げを決めた！ 連銀九行が利率三・五%で議決、ストレンクス万歳、最高の間抜け野郎、万歳！』

来た。

「グランダークは？」

『もう四ポイント上げた！ オラムホームとアハメド住宅も目の前でがんがん上がってる！ 投資家がみんな不動産株買いまくりでお祭り騒ぎだ！』

全身を稲妻が貫いた。肉体の内側を熱波が駆け抜け、音のない凱歌が鳴り響く。

転瞬、この二ヶ月近く耐えに耐えてきた緩慢な苦痛が全て歓喜に圧縮して変換され、クロトの口腔から咆吼となって迸った。

「お兄様！」

起きた出来事に気づき、両手を広げたサツキがクロトの胸に飛び込んでくる。

「お兄様！ お兄様！ お兄様っ！」

受話器を放り出し、クロトは珍しく歓喜を露わに表情へ映して、妹を抱き留めた。

「勝ったぞサツキ、読み通り、おれの勝ちだ……っ！」

告げる声も、知らず震える。クロトが投資した千八百万ドルはこれから金融緩和の勢いに乗り、十倍、二十倍に増えるだろう。それはつまり、新参ルーキーに過ぎなかったクロトがフォール街の一流相場師の仲間入りを果たすということだ。

「フォール街の頂点が見えてきた。おれたちは魔窟の中核に入ろうとしている……っ！」

クロトの歯の根が噛み合わない。これまでどんな災難に見舞われようが動揺の兆しさえ見せなかったクロトが、いまはじめて武者震いというものを体験していた。

「ははは、おれにもこんな感情があったのだな。見ろ、興奮して足が震えている。おれも普通の人間であつたということだ……！」

こわばつた笑顔をたたえていつになく饒舌なクロトへ、サツキは泣き濡れた可憐な顔を持ち上げる。

「お兄様は普通の人間です。賢くて優しい、普通のひとです……」

ぼろぼろ涙をこぼしながら、サツキはそう言つて微笑む。

「ありがとう、お前のおかげだ、お前が支えてくれたから、おれは、おれは……」

言葉尻が歓喜でかき消えそうになり、あろうことか目元が潤んで、クロトは意志の力を総動員してそれを抑えた。

「お兄様が偉大なのです。世界一の兄です」

妹の背をさすり、かろうじて冷静さと呼び起こして、兜の緒を締め直す。

「……上流白人（ワस्प）の頂点にヤップが入り込めば必ず反撃がくる。カイルのいう『王』が実在するなら、出てくることもあり得るだろう。勝つか負けるかわからぬが、おれは自分の限界を知りたい。充分過ぎるほど稼いだが、まだしばらくこの街で戦うことを許してくれ、サツキ」

「……はい。お兄様の思うままに。見ています。一番近くで」

ふたりはしっかりと互いの背に両手を回し、支え合つた。生まれた国を追い出され、父母がいなくなり、ドアもない掘つ立て小屋で暮らしていたはずが、カイルと出会つてたつた三年半で、この兄妹は合衆国人口の1%に満たない白人富裕層の仲間入りを果たそうとしている。数奇に過ぎる運命だが、ふたりで生きてきた絆だけは変わっていない。どんなにカネを稼いで、大勢の人間が寄つてきて称賛を浴びせようと、クロトとサツキはお互いが近くにいるだけで幸せだった。それ以外のものは、それほど必要でもなかった。

「仲いいなあ……」

少し離れた場所から抱き合う兄妹を遠目に眺め、健太は羨ましそうにぼつりと漏らした。

ストレンクス総裁いわく「株式市場にウイスキーを少々振る舞った」結果、国中を巻き込んだ狂騒がはじまった。

とにかく不動産株を買っておけば必ず儲かる。  
本物の打ち出の小槌だ。

プロの相場師が眉をひそめるのも構わず、いきなり大量の素人投資家が発生し、タカが外れたように不動産株を買い漁った。

平時であれば、そんな買い方をして儲かるわけがない。

だがストレンクスが振る舞ったウイスキーは、株式市場を千鳥足にした。企業の業務内容を調べ上げ、企業価値を見出してから投資するプロのやり口よりも、ただひたすら建設・不動産関連の株を買った素人のほうが遙かに儲かった。プロ相場師もやがて唇を噛みしめ、他業界を捨てて不動産のみへ矛先を据えた。

『誰でも金持ちになれる時代』

女性雑誌の見出しにまでそんな文字が躍り、莫大な数の女性投資家が生まれ出た。

市場の規模が拡大し、チャートは上昇をつづけ、理性のある投資家は株式バブルの危険を訴えたが、そんな悲観的な見方を嘲笑うように、不動産株価は軒並み上昇をつづけた。

証券取引所や証券会社の入り口横に設置された相場表示機には耐えず主婦や会社員、職工など一般市民が群れ集まって、パネル表示されるおのれの持ち株の値動きをうっとり見つめていた。働いて得る何倍ものカネが働かずして手に入る。職を辞め、株一本で食べようと決める市民が大勢出てきて、訳知り顔で証券会社に口座をひらいた。知識人から「この狂宴は長くはつづかない」と戒めの声上がるたび、「悲観論者はただの敗者」と株式市場が抗弁しているかのように、株価は上昇をやめない。

らんちき騒ぎのただなか、若き投資家集団「クロノス」の名前はひとときわ輝かしい光彩を放ちだしていた。

『不動産バブルの絶対王者「クロノス」とは?』

『リーダーは予知能力を持つ十五才の日之雄人』

『ロサンゼルスの子ョークボーイ、わずか四年で資産五億ドル超え』

『東洋魔術か、もしくは神か。天才相場師、黒之クロトの正体に迫る』

派手すぎる記事の見出しが新聞雑誌に躍るたび、常軌を逸した評判がガメラア中へ広がっていく。ロウアー・イーストサイドのおんぼろ事務所には取材を求める新聞・雑誌・ラジオ記者から絶えることなく問い合わせが入り、受付嬢が「黒之氏は誰の取材も受けません」と同じ答えを繰り返しても「本当に十五才?」「本当に日之雄人?」「本当に予言能力を持った神?」などどくだらない質問が終わらない。

クロトの成功に嫉妬した輩の嫌がらせもたびたびあった。投石で事務所の窓ガラスを割られ

たときは真剣に引越しを考えたが、ジェシーのホットドッグが決意を鈍らせる。仕方なく事務所の入った集合住宅（テネメント）を一棟丸ごと借りて、窓を全て防弾ガラスに張り替え、事務所の階下に受付と警備員を配置した。クロノスに入会したい希望者も再び押し寄せるようになり、面倒になったクロトはJJに面接を任せ、特別に優秀な人間だけを新たなメンバーとして迎え入れた。

バブル発生から半年が経過し、新たな春の気配がニューヨークに近づいてもまだ、相場の高騰はつづいていた。

早く飛びついたものから得をしていた。バスに乗り遅れるなどばかりに、あとからあとから素人投資家が湧いてきて、バカのひとつ覚えのように不動産株を買う。おかげでクロトの投資した千八百万ドルはいまや三十倍近くに膨れあがり、配当金だけでも莫大な所得税を支払うはめに陥ったが、それでもバブルは終わらない。

十六才になったクロトは世間の狂騒など構うことなく、不動産株で得た資金を電子工業関連株へ投資していた。

不動産バブルとは関係のない地味な産業だが、クロトは必ず成功すると見込んで地道な投資をつづけている。不動産株は素人投資家のおかげで上がりつづけているし、あとは売りどきさえ間違えなければ良い。实体经济から遙かに乖離してしまった不動産バブルはもうじき弾けると読み、新しい成長産業へ目をむけている。

セントラルパークの桜が薄桃色の花弁をひろげたころ、カイルから「また新しい事務所に引越した」と連絡が入った。相談したいこともあるとのこと、クロトはひとり、カイルの事務所へタクシーでむかった。

「……見栄っ張りが」

タクシーを降りて、カイルの新しい事務所が入っているニューヨークで最も高いエンパイアステート・ビルディングを見上げ、そうひとりごちる。高い家賃を払ってこんなところに住むのは、名刺にこの住所を書いて相手におのれの権勢を知らせるためだ。ばかばかしい、と思いつつながら屈強そうな黒人警備員が詰めた窓口で来訪を告げ、エレベーターで八十五階へ登ってプレートもなにもないエントランスへ。

ソファアは高級スーツを着た男性五名ですでに埋まり、あぶれたとおぼしい三人が退屈そうに立ちん坊になり、窓の外を眺めていた。

受付嬢エステラが、クロトを認めて若々しい微笑みをたたえる。複数存在するカイルの恋人のひとりでもあるこの金髪美女は、優先順位を心得ていた。

「お待ちしておりました。どうぞ」

あとから来たのに顔パスでオフィスへ通される日之雄人の少年を、面談待ちの八人は恨めしそうに睨みつけ、ひそひそ話のさざ波が広がる。三年ほど前に一度だけ顔写真入りでフォール

ストリート・ジャーナルに載ったことがあるため、わかる人間にはあれが噂の黒之クロトだとわかるらしい。「超能力」だの「東洋魔術」だのバカバカしい単語がさざ波の隙間からうつつら届き、クロトは辟易した気分で警備員のチェックを素通り、櫛の扉をひらく。

広々としたオフィスは地上三百メートルに位置し、南にひらいた大きな窓からマンハッタン島が一望だった。右手にハドソン川、左手にイースト川、ふたつの流れがちようど交差する辺りに、フォール街の高層ビル群が春霞に霞んでいる。

「ニューヨークを支配している気分にならないか？」

カイルがそんな言葉をかけながら、クロトを迎え入れた。

クロトは不愉快そうに顔をしかめ、

「そんな気分になりたいか？」

「常にそんな気分でいたいね。自然な感情だよ。人間は他人を支配するために生きている。さて呼びつけておいてなんだけど、ちよつと待ってて、いますごく大事なところだから」

カイルはクロトにソファアを勧め、スタッフが黒板に書きつける文字とティッカーマシンが吐き出すテープを睨み付ける。

エステラが紅茶を運んできて、上品な微笑みと共に去っていった。周囲ではひっきりなしに電話が鳴り、壁に立てかけた三枚の大きなボードにはチョークマンが三人ついて、無言で株価の変動を書き連ね、その手前では四名のブローカーたちが受話器のむこうへ気ぜわしい声をなげかける。時折通話しながら目線だけをカイルにむけて手信号を送り、カイルは「浮動株は全部買い占める。市場に出回っている分、全部だ」だの「ぼくに楯突いた罰だ、あのバカに高騰しきった一万株全部食らせてやる」だの攻撃的な指示を繰り返す。

なかなか本題に入るヒマもなさそうで、クロトは呆れた気分で相棒の仕事ぶりを眺めていた。どうやらカイルの持ち株に空売りを仕掛けた相場師へ逆襲している最中のようだ。首尾は上々らしく、ほどなく相手は一生かかっても返せないほどの負債を背負い、フォール街を去るかピストルをこめかみに当てるか、いずれかひとつを選ぶだろう。クロトと違って、カイルは敵を蹴落とし持ち物を全て奪い取るようなメソッドを好んでいた。

「相変わらず……というより以前よりひどくなっているな、お前」

ようやく指示を出し終えたカイルへ、クロトは呆れた口調で告げる。  
「そんなことはない。元々ぼくの仕事のやり方はこうだよ。これまでは資金が足りなかったから、やりたくても出来なかっただけ」

敵をひとり抹殺したばかりとは思えないほどあっけらかんとした口調で、カイルは自己弁護さえしない。他人の事情など斟酌せず、ただ奪い取ることを目的に攻撃を仕掛ける、いかにもガメリア人らしいビジネスだった。

「それで楽しい気分になれるのか？」

「なれるよ。生意気な敵を屈伏させて泣きつ面を拝むと、最高にハッピーな気持ちになる」

「全く理解できん。それで用件とは」

「うん。最近、変なのに仕掛けられているだろう？」

「……ああ。お前のところにも来ているようだ。クロノスの主力株が大量に空売りされている」

空売りとは、株価の下落を使って儲ける取引だ。投資家はブローカーから株を借りて市場で売り、あとで同じ株数を買戻してブローカーへ返せば取引終了となる。株価十ドルのときにブローカーから十株借りて、株価が五ドルになったとき十株返せば五十ドルの儲け。例外はあるが通常、買戻しには期限日が設けられ、期限日に株価が二十ドルであったなら、百ドルの損失を出しても買戻さねばならない。

空売りを仕掛ける側は、株価を値崩れさせようと大金を投資して売りまくる。仕掛けられた側は、値崩れを防ぐために買いまくる。どちらかが根を上げるか資金が尽きるまで、この勝負はつづく。

対面のソファーに座ったカイルが、口の端を吊り上げる。

「ようやくあいつが現れた。世界金融の中枢を荒らす生意気な日之雄人を倒すために」

うれしそうなカイルの笑みを、クロトは気に入らなそうに眺め、ソファーの背もたれに上体を預ける。

「フォール街の王？」

約四年前、はじめて会ったところからカイルが告げていた「見えない敵」。

思惑ひとつで大統領の首をすげ替え、マスコミを使役して国民を煽り、自らが肥え太ることを目的に大国を戦争に巻き込む、フォール街の王。

陳腐なコミックみたいなその敵が実際に現れ、クロノスに攻撃を仕掛けてきたというのか。

「調べてみたが、空売りを仕掛けているブローカーはいずれも外国人で、こいつらは『王』の代理人だ。ぼくがやられたときと同じやりくち、間違いなくぼくらは『王』の御前にいる」

ふん、とクロトは鼻を鳴らす。

「王」が実在するとはいまだに信じられないが、クロノスが大規模な攻撃に晒されているのは事実であり、背後には「クロノスを滅ぼす」という強固な意志が存在している。この何者かを便宜上、「フォール街の王」と名付けても良いだろう。

「待ち望んだ大勝負の時期が来たわけか」

「そのとおり。いまやカイル・マクヴィルと黒之クロトはフォール街最強の相棒（バディ）と目されていることだし、正々堂々、『王』との戦いに臨もうじゃないか」

カイルは両手を天井上げて掲げ、嬉々とした表情で芝居がかった台詞を紡ぐ。破滅の畏かもしれないのに、カイルの表情はかつて見たこともないほど恍惚とされていた。

イカれた野郎だ、と改めて思いながら、クロトは懸念を表明する。

「不動産バブルはもうじき弾ける。この時期に買い方に回るのは気乗りしない」

現状だと「王」が仕掛ける空売りに対し、クロノスは株を買うことで対抗することになる。だが勝負の最中にバブルが弾けたなら持ち株はただの紙切れとなり、クロノスは全財産を失う。代わりに売り方の「王」は下落分がそのまま儲けとなり、投資額の十倍、二十倍の利益を確実に得る。この状況で大勝負に出るのは分が悪いとクロトは見た。

「恐らく『王』もバブル崩壊を見越して空売りを仕掛けてきたんだろう。でも相場がいつ崩れるか、なんて神さまでもわからないわけで、買い戻しの期限まで相場が持ちこたえたらむこうの負けだ。買いは負けても無一文になれば済む。だけど売り方は負けたなら天文学的数字の負債額を背負いこむ。やつを潰すにはまさに千載一遇の好機、代理人の仮面を引っぺがして『王』の素顔を暴き立て、哀れな敗者の泣きっ面を指さして笑ってやりたくないか？」

「いや、特に」

「思おうよ。思ってくれよ日之雄人、きみ、相場師でしょ？ この世界、敵をなぎ倒してなんぼだよ？ 天井知らずの上げ相場がつづいているこの時期に大規模な空売りを仕掛けようなんて、むこうも破滅のリスクを背負ってるわけで。望みどおり破滅させてやろうじゃないか、ぼくたちクロノスの総力を結集して」

カイルはうきうきと言葉を弾ませ、クロトを戦いに巻き込もうと言を操る。

「この勝負に勝ったとき、ぼくらが新たなフォール街の王となる。ガメリア大統領さえぼくらの意向を無視できない。なんなら日之雄との戦争も、きみの力で止められるかもしれないよ？」

クロトはむつつり黙り込み、考える。

アホか、とひとことで斬り捨てても良い。だがいまこの状況において、カイルの言葉はまんざら妄言というわけでもない。いまクロトが立っている場所は、おのれの意志ひとつで世界を変えることのできる巨大な権力の一步手前だ。世界金融の支配者が握る権力は事実上、世界を統べる皇帝に匹敵するほど強く大きい。

——『王』に勝てば、世界をおれの望むかたちに変えられる。

おのれの全てを賭けて戦う動機として、それは充分なものに思える。

リスクは高い。

しかしこの機会を逃したら、もう二度と「王」と戦うことはないかもしれない。

——「王」を滅ぼし、権力を奪い取れ。

——大統領をも自在に操る権力を握れば、日之雄は救われる。

クロトの思考が痺れてくる。

ガメリアに狙われ、滅びを待つしかない哀れな日之雄を、自分の手で救うことが出来るかも知れない。そんな大きすぎる夢が、「王」を倒せば現実になり得る。

ならば——このリスクは引き受けてもいいのではないか。

もとより無一文は覚悟のうえ、おのれの力試しのためにこの街で戦っている。強大な『王』と対峙することは、勝っても負けてもこれから生きる上で貴重な経験値となるだろう。

それに、不動産バブルが弾けると確実に決まったわけではない。これまでも何度か破滅の予兆はあったが、しかしそれはさらなる跳躍への踏み台に過ぎず、株式市場は爆発的な拡大を占めている。ガメリア経済は人々の予測を遙かに越えて力強く、ガメリア人も強気一辺倒、この好景気は永遠につづくと思われて疑っていない。これだけの強気相場なら、バブルもあと数年は保つのではないか。

——戦う価値がある。

決めた。

「受けて立とう」

告げると、カイルは凄艶に笑んだ。

「頂上決戦だ」

カイルの背景に、フォール街の摩天楼が灰白色に霞んでいた。ここから遠望するその在り様は魔王の居城そのものに見えた。

翌日、取引開始と同時にクロノスの主力銘柄七つに大規模な空売りが仕掛けられた。

上げ相場だから、七銘柄とも株価はびくとも動かない。しかし構わずに『王』は午後にも果敢に空売りを仕掛ける。

カイルの主力銘柄、「リンドバーグ地所」がわずかに下げそうな気配を見せたため、クロトは三千株を買って支援する。カイルも即応して買い注文を入れ、株価を維持。すると『王』はJの主力銘柄「グレアム不動産」を三千株空売り、さらに取引終了直前にも二千株を空売り。

JJの対応が遅れたこともあり、グレアム不動産はわずかに値を下げて取引を終えた。

クロトのおんぼろ事務所では、JJが不機嫌そうに今日の終値一覧を睨み付けている。

「下げたのはグレアム不動産だけか」

健太とサツキも黒板の前に立って同じものを見つめ、

「ですねー」他のみんなは大丈夫だったみたいです」

JJの表情がますます不機嫌に歪む。それもそのはず、十五才の健太と十四才のサツキもまた『王』の攻撃から自分の主力銘柄を守り抜くことに成功していた。クロトの一番近くで働いてきたふたりは、もういっばしの相場師だった。

「JJ、王様に狙われちゃったかも」

サツキの心配を、JJは鼻息で払いのける。

「来るなら来い。こっちはクロトとカイルがついている。こんな陰湿なやつに負けてたまるか」

その傍ら、トムスポンが眼鏡の蔓を押し上げつつ、

「早急に手じまいするのもアリですよ。大量の株を売り抜けるのは大変なのだから」

「いやだね。ジャンク債から這い上がって、おれが育てたも同然の株だぞ。こんなやつに食いものにされてたまるか」

持ち株とペットの区別がつかなくなったらしく、JJは戦いをつづけることを宣言する。言葉通り、元々は株価七ドルのジャンク債だったものが、いまや七十倍以上、五百二十ドルにまで跳ね上がったJJ自慢の銘柄だった。素人投資家も「第二のグレアム債を見つけ出せ」と躍起になって、めぼしい銘柄を漁っている。

「援護頼むぜクロト。フオール街も注目してる。ここで負けるわけにいかない」  
「すがるようなJJの言葉に、クロトは首肯を返す。

「わかっている。お前が戦う限り支援する」  
「きっぱりと迷いのないクロトの言葉に、JJは安堵した様子で頷いた。

翌日も『王』はクロノスマンバーの七銘柄へ空売りを仕掛けてきた。

なかでもグレアム不動産への攻撃は苛烈だった。強気相場など知らん顔で、たった一日で併せて五千株を空売りする。

「畜生、うっとうしいぜ」

チョークマンが黒板に書きつける値動きとティッカーテープを睨みながら、JJが呻く。

「長い戦いになる、とカイルが言っていた。数ヶ月間はこれがつづくことを覚悟しろ」

「胃が痛いぜ、全く。これが噂の『ダモクレスの剣』ってやつか。うっとうしいのに逃げられない」

故事になぞらえたJJの愚痴にクロトも内心で同調する。「王」との戦いがはじまって以来、頭上に切っ先を下にした剣が吊られているような、いつ死が降り下りてくるかわからない恐怖が離れてくれない。

「長丁場では感情の制御を誤るな、とカイルが言っていた。勝負が長引くと通常の状態を保つことが難しいらしい」

「わかるぜ。はじまって数日で、頭がどうにかなっちまいそうだ」

見えない敵の圧力が、常に肺腑の底にのしかかってくる。身体の内側を見えない手でまさぐられていくような不快感が消えない。クロト自身、これがはじめて経験する大規模な仕手戦であり、その途中で自分がどんな心理状態に陥ってしまうか、正直見当がつかない。

頼みの綱は。

「サツキ、おれが普通でなくなったら、お前が教えてくれ。おれの変化は、お前が最も早く気づくことができる」

言葉をかけると、可憐な妹はきりりと表情を引き締め、頷く。

「……はい。お兄様になにかあれば、サツキがすぐにお教えします」

クロトは表情を和らげ、仕手戦を繰り広げている七銘柄の値動きが記載された黒板へと目を戻す。

もうひとり、クロトが頼ることが出来るのは、やはりカイルだった。こうした仕手戦を何度

も経験しているカイルと密に連絡を取り合い、作戦を細かく話し合わねばなるまい。

そう思った途端、カイルからの電話が鳴った。

『やあ。グレアム不動産がやられてるね。JJの様子はどう？』

「苛立っている。無理もない。おれが援護するからしばらくは保つが。マズいときは売り抜けていいか？」

『絶対ダメ。クロノスが逃げた、なんて他の相場師が知ったら「王」に狙われてる主力銘柄が全部値崩れする。クロノスは決して逃げない、と市場に印象づけるんだ。多少の損失は覚悟してでも戦闘意欲を示さないと、強い敵には勝てない』

「うむ……」

『レッスン三十八。強気を保ちつづけることだよ。隙を見せたらつけ込まれる。先は長いんだ、ゆったり構えて、多少の攻撃くらいでひるまないこと』

静かに教え諭すカイルの声が、これまでになく頼もしく響いた。やはりカイルの経験値がクロノスのよりどころだ。いくら能力が高いといっても、クロノスは実戦経験がない。大事な決断は、カイルと相談して下さなければ。

「……わかった。……おれとしたことが、いつの間にか弱気になってしまっていた」

『はは。自覚があるならいいじゃない。はじめは誰だってそうさ、そのうちだんだん、このスリルがやみつきになっていく』

クロトは礼を言つて電話を切った。おれの能力に自信はあるが、意外と繊細な面もあるらしい。自分の内面を他人のように俯瞰して、クロトはいつものように、今日の終値を三百銘柄暗記した。

†††

平静を装う必要がある。

間違つても焦りや不安、恐怖をおもてへ出さないこと。

自分が動揺を現せば、クロノス全体が揺らいでしまう。

「王」との戦いがはじまって以来、クロトはそう自分自身を戒めつづけた。

はじめは七名だったクロノスはいまや十八名の投資家集団に膨れあがり、全員が「王」との仕手戦に自らの資金を投入していた。

事務所の黒板には常に、二名のチョークマンによって「王」に狙われた主力七銘柄の値動きが記載されている。情報を迅速に入手するため、クロトは専門のチョークマンを雇い、高給と引き替えに箝口令を敷いた。不動産バブルに伴ってNY証券取引所の取引量が劇的に増え、テックカーマシンの処理速度が追いつかず現実の相場と事務所の間で十分ほどのタイムラグが発生するようになったため、クロトは証取の相場表示機前のブローカーと事務所のチョークマ

ンを無線でつないだ。チョークマンはイヤホンでブローカーの読み上げる主力銘柄の値動きを聞き取って黒板へ書き込み、クロノスマンバーはリアルタイムで「王」の攻撃に対応する。「しつこいな、こいつ。グラム債だけでも五千万ドルは空売りしているぞ。どれだけ資金があるのか見当がつかん」

すっかり憔悴しきった表情で、JJは歯がみする。「王」との戦いは四ヶ月目に入り、クロノスは全員が疲れ果てていた。

もう夏である。

おんぼろ事務所に最新式のエアコンを導入し、快適に仕事できる環境を整えているが、しかしスタッフの表情はいずれも張り詰めて、雰囲気も重苦しい。

すでにクロト個人だけで二億七千万ドル、クロノス全体では四億二千万ドルを「王」との戦いのために費やした。これだけつぎ込んでも、「王」は同額の空売りをやめることなく、株価は一進一退をつづけている。

――なにものだ。

クロトは内心、四億ドル超の買を入れてもビクともしない「王」の資金力に呆れる。これほど潤沢な資金を持っていながら、なぜ「王」の正体がわからないのか。フオール街の一流相場師の投資状況を当たってみたが、誰もクロノスに勝負を仕掛けていないのは明白だった。となればおそらく外国人投資家なのだろうが、これほど資金力を持った匿名投資家の噂など聞いたこともない。

――巨大なのに、見えない……。

不可解なその事実が、クロトを憔悴させる。だが、どんなに不気味な敵であろうと、いまだできることは戦うことだけだ。

クロトも他のクロノスマンバー同様、七銘柄の値動きと、ティッカーマシンが吐き出す他銘柄の値動きを睨みつつ、神経を研ぎ澄まして市場の「声」に耳を澄ます。

ガメリアへ渡って株式の研究をはじめてから五年半以上が経ち、クロトの「大局観」はさらに精度を上げていた。いまやティッカーマシンが吐き出す数字の羅列を、人間の欲望が織り上げたタペストリとして視認している。三百銘柄の値動きを記した黒板に、三百の色素が綾なす紋様の色調が、輝度が、移ろいゆくグラデーションが見えてくる。

――色が剥げていく。

三日ほど前から、クロトはそんなふうに感じていた。

黒板へチョークマンが数値を書きつけるたび、タペストリは微妙に彩度を落としてゆく。輝いていた紋様が色あせ、暖色のグラデーションへわずかな冷たさが差す。

この変化の意味は。

――株式バブルが頂点を過ぎようとしているのでは。

約一年前の金融緩和以来、相場はずっと上がりっぱなし、いまやフオール街は素人投資家に

乗っ取られてしまった感もある。靴磨き、使用人、事務員までが証券会社に口座をひらき、全財産を不動産株に投資して、当たり前前に大もうけできる。このままいけば二億一千万のガメリア国民が全員仕事をやめて株を買いかねない勢いだ。

実態経済と株式市場が完全に乖離している。この景気はいつまでもつづかない。いつかバブルが弾け、株はただの紙切れになる。知識人や経済学者たちはバブルがはじまった当初からそう警鐘を鳴らしつづけてきた。途中、踊り場に差し掛かったように相場がぴたりと止まることもあり、そういうときは警鐘も激しさを増すのだが、しかし結局相場は悲観的な金融関係者を嘲笑うかのように一旦停滞したのちさらに階段を上りはじめた。いまや新聞記事ですら、ガメリアの永遠の繁栄を信じて疑わない論調で上げ相場を煽っている。

ガメリア合衆国建国以来の好景気だった。

二億一千万人の乱痴気騒ぎの真つただなか、クロトはひとり、終末の気配を感じ取る。

——少し、試す。

先日、「王」に狙われている主力銘柄ではない別銘柄を、手持ちの10%だけ売りに出してみた。いったん下がった株価は、今日すでに回復していた。これで株価が落ちたまま戻らなければ危険な兆候であるのだが、いまのところ市場はまだ勢いを保っていると見て良い。

しかし——相場を記した黒板から浮かび上がるタペストリは、明らかに以前より色あせて見える。なんの根拠もない幻覚だ、と斬り捨てることはクロトにはできない。これはこの五年半積み重ねてきた努力の成果として、クロトだけに見える織物だった。その紋様は崩壊の予兆のように、輪郭がぼろぼろと崩れていくように見える。

クロトは事務所にいるJ.J.、トムスポン、健太とサツキの表情を見回してみた。

四ヶ月間も絶え間ない緊張と重圧にさらされ、いずれも憔悴の色が濃い。サツキも気丈に振る舞っているが、このところ食欲がなく、食事を届けに来るジェシーが心配している。見えないう敵に狙われる居心地の悪さが、こころをじわじわ蝕んでいるのだ。

「王」との戦いを継続すべきだろうか。

クロトはこの三日間、そのことを考えつづけていた。

——手じまいにするべきでは。

持っている株を全て売って現金化し、戦いを終える。それをやればクロノスのメンバーは、バブル前の五十倍近くも膨れあがった資金を得ることができる。もしかするともう少し耐えれば六十倍、七十倍もあり得るかもしれないが、欲はかかずにいま以上を求めない。それだけで十八名全員が富豪になれて、一生贅沢に遊んで暮らしていける。

そして、勝負は「王」の勝ちだ。クロノスが持ち株全てを売ってしまえば、株価の暴落は必然となり、莫大な空売りを仕掛けた「王」は下落幅が大きいほど多額の報酬を得る。フォーレル街はこの勝負を「王」の勝ち、クロノスの負け、と認め、少なくとも上流白人が「日之雄の猿に人間の偉大さを教えてやった」と浮かれ踊るだろう。

悔しい結果が待つことになるが、しかし、これまで勝ち得た全てを失うよりはマシではないか。クロトは無一文を恐れないが、JJやトムスポン、他のクロノスメンバーたちは違う。それぞれ家庭があり、夢や目標があり、いきなり全財産を失うわけにはいかない。ここで戦いを終えれば、「王」には負けるがそれぞれの人生の道は大きくひらける。

——ここで降りるべきだ。

クロトの直感は、そうささやいている。

確信を得るため、二度目、三度目の打診売りを他銘柄にも仕掛けてみる。

市場の反応を待つ間、カイルに電話を掛けた。

いま思っていることをそのまま言葉にすると、カイルは落ち着いた声で、

『こっちが苦しいときはむこうだって苦しい。先に根を上げた方が負けになる。きみはいま、

「王」との心理戦に負けている状態だ』

「……………」

『「王」の心理を想像してみよう。弾けるはずのバブルがいつまで経っても弾けない。時間と共に増えていく、期限が来たら返さなければならぬ借金。四億ドルを越える規模の空売りを仕掛けたからには、かなりの信用取引を行ったはず。ここでやめれば、損失は最低限に抑えられる……とむこうだって悩んでいるはず。ここできみが降りたなら、むこうは手を叩いて喜ぶよ。「臆病な猿が、自分から負けを認めやがった」ってね。そして投資額の数十倍の利益を得た「王」はフォール街に君臨しつづけ、次の間抜けな獲物を探す……。腹が立たないか?』

「……腹は立つ。だが、おれの直感が、もうじきバブルが崩壊すると告げている。このまま戦いをつづければ、クロノス十八名全員の人生に支障を来すことになる。おれだけが負けて済むなら良いが、他人を巻き込んで滅びるのは本望ではない」

告げると、受話器のむこうでカイルは薄く鼻息を抜いた。

『……ぼくが思っている以上に、きみは弱気に蝕まれているようだね。はじめての仕手戦で神經過敏になり、勝負勘がくるってきている。いいかい、フォール街の住人たちは百戦錬磨の妖怪たち、なかでも『王』は最強のプレイヤーだ。相手の心理状態を見定め、攪乱するすべに長けている。心理戦の罠に陥っている自覚はあるかい?』

なんと答えない。自覚はないが、他人からだそう見えるかも。

『ここを我慢するのが勝負師だよ。こんな中途半端なところで勝負を降りてどうする。クロノスが滅びるか、「王」が滅びるか、そういうつもりで勝負をはじめたのではなかったかい?』  
たしかにそういうつもりだった。しかし時間が経つにつれ、初心が鈍ってきている感はない。はじめての仕手戦だから、自分の判断に確信が持てない。頼りになるのはカイルのような経験者の言葉だけだ。

『大勝負を経験したい、と言ったのはきみだよ? ここまでは助走に過ぎない、これからが本当の神経戦だ。先に降りたほうが負けて全てを失う。耐えつづけたものが巨大な勝利をその手

に掴み、負けた相手を踏みつけにするんだ。勝つためには耐えるしかない』

「だが、バブルはもうじき終わる。おれたちがいくら耐えようが、株式市場そのものが壊れたら意味はない」

『きみの弱気が見せた幻覚だ。クロト、きみもそこらの無能な金融関係者と同じか？ 彼らが警鐘を鳴らすだけ鳴らすものだから、数百名の投資家が途中で降りて損をしたよね？ 勝ったのは結局、バスを降りなかった脳天気な素人投資家じゃないか。「王」だって神じゃない、バブルがいつまでつづくのか、なんて誰にもわからないんだよ。逆にいえば、ここでクロノスが降りることが、バブル崩壊を導くことにもなりかねない』

痛いところを突かれ、ぐぬ、とクロトは言葉を呑み込む。

確かにカイルの言うとおり、ここでクロノスが大量買いをやめて売りに走れば、市場関係者は「クロノスが降りた」ということは、景気は頂点を過ぎたということか」と判断し、雪崩的に売りが連鎖してバブル崩壊に繋がる危険がある。クロノスが保有する大量の株を全て売り払うには時間がかかるため、結局、暴落した株価で株を売らねばならないはめになり、かなりの損失を覚悟せねばならない。

『勝負をはじめたときの気持ちを思い出せ。勝とうが負けようが、最後まで戦い抜くと誓っただろう？ ここで耐え抜いたとき、最終的な勝利がクロノスのものになる』

クロトは受話器を握りしめたまま考える。

いつの間にか弱気に蝕まれていたのだろうか。

冷静に自分の内面を俯瞰するが、答えは否だ。

元々、一文無しになることは怖くない。クロノスのメンバーも、損害を被らせたくはないが、それぞれ自己責任で投資している。負けたとしても、彼らはまた立ち上がり、この失敗を糧に新たな戦いをはじめだろう。これまで幾多の名相場師がそうしたように。

負けることは恐れない。ただ、起きている事態に対処せずに負けることは間違いだ。

黒板を見やれば、株価のタペストリは明らかに崩壊が近いことを告げている。

もうじき全ての紋様が剥げ落ち、色あせ、この織物は虚無の色に塗り込められる。それがクロトの確信だ。

——引くべき時期だ。

株式取引はタイミングが全てを決定するゲームであり、クロトの直感はいまが最高の売りどきであると告げている。安く買った株を高く売り払う、その基本を行うに最高の瞬間がいま目の前にある。

——いま売らねば、クロノスが滅びる。

内面の警鐘がやまない。カイルに言わせればこれはクロトの弱気が生み出した幻聴なのだろうが、聞いているクロトにはそんな脆弱なものとは思えない。五年半かけて積み上げてきた努力の精華が、この声だ。

——カイルは好きにさせれば良い。「王」との戦いは、彼個人の戦いだ。  
——おれには「王」など関係ない。

そんな声が、クロトの内側から届く。

そのとおり。カイルが戦いをけしかけるのは、彼の個人的感情に拠るものだ。それに付き合  
って、クロトとクロノスの他メンバーが滅ばねばならない道理などない……。

内なる言葉を聞いていたそのとき、カイルの言葉に熱がこもった。

『クロノスのことを考えるなら、ぼくのことも考えてくれ。ぼくはすでに二億ドル以上の信用  
買いを行っている。手持ちの資金だけでは「王」の攻撃に耐えられなくてね。ここできみが降  
りたら、ぼくは破滅だ』

その言葉に、クロトは思わず唇を噛んだ。カイルは借金をして「王」と戦っている。クロト  
は持ち株を現金化して「王」との戦いに投資しているから、負けても一文無しで済む。だがカ  
イルは持ち株を担保にして戦っているため、値崩れを起こしたときに二億ドル以上の負債を抱  
え込むことになる。それはすなわち、カイル・マクヴィルの「死」に等しい。

『四年半前、ぼくは「王」を滅ぼすためにきみと組んだ。長く苦しい道のりを歩いて、ようや  
くあいつにまた出会えたんだ。あのムかつく野郎に天文学的な負債を背負わせようとしている  
いま、なぜ降りる？ あいつがいま、苦しみに悶えているのがなぜわからない？』

それはお前の個人的な恨みであって、おれには関係ない、と切って捨てても良い。だがクロ  
トはその言葉を黙って呑み込む。

『頼む。勝利はこの先にしかない。ぼくを信じてついてきてくれ』

いつもおちやらけているカイルの言葉に、珍しく真摯さがこもっていた。

『きみにしか頼めない。きみに見捨てられたら、ぼくは破滅だ』

クロトは音もなく溜息をつく。

フォール街では友情など信じるな、と言っていた本人が、友情にすがって泣きついてくる。

いつかカイルが言った言葉が、記憶の縁から舞い戻る。

『ぼくらがフォール街の王になるんだ。大統領を超える権力をこの手に握り、世界の皇帝の座  
にふたりで座ろう。日之雄だってそれで救える』

カイルは本気で「王」を倒したいのだ。その気持ちは受話器のむこうから痛いほど伝わって  
くる。「王」を倒してフォール街の頂点に立ち、世界最高の権力を手にしてみたい。それがカイ  
ルのこころの底からの切望だった。自分が「王」になったところで次の夢や目標があるわけ  
もなく、ただ玉座そのものに憧れてそこに座ることを目的にしている。

クスが見る夢だ、とクロトは思う。

そんな場所に居座ったところで敵が増えるだけ、その場所を守りつづけねばならない苦しい  
日々がつづくだけ。それがわかっていながら権力を求めるカイルの気持ちだが、クロトにはよく  
わからない。ガメリア人特有の開拓魂というやつだろうか、見たことのない地平を目指す行為

そのものに幸福を見出すような、日之雄人には理解できない性質。

そしてそんなクズを、クロトは見捨てることができない。剥き出しの欲望を抱きしめて、アホが見る夢を追いかけるこのクズは、クロトの相棒だった。

「本当に、どうしようもない野郎だ」

吐き捨てた。

同時に。

——負けても、いいか。

そうも思った。

元々、掘っ立て小屋で暮らしていた一文無しの移民だ。カイルに出会えなかったら、まだロサンゼルスでチヨークボーイをしていたかもしれない。あの掘っ立て小屋からクロトとサツキを連れ出して、カジノや株式市場での戦いかたを教えてくれた。クロトにとってカイルは師であり、相棒であり、友人だった。

ここでカイルを見放せば、少なくともクロトの手元に一億ドル近い資産は残る。大卒サラリーマンの生涯所得が二百万ドルといわれる現在、それだけあれば豪邸を買って贅沢しながらサツキと一緒に暮らしていける。さぞかし楽な人生だろうが、でも気分は悪いままだろう。友人を見捨てて得た幸せなんて、きつと虚しい。

——カネより、友達を取るべきだ。

クロトは素直にそう思った。豪邸やヨットやハリウッド女優がいくら手に入っても、友達のいない人生は寂しすぎる。

——カイルが戦いを望むなら、負けてもいい。

クロトはそう決めて、告げた。

「……わかった。……お前の言うとおり、少し弱気になっていたかもしれない」

受話器のむこうから、深い安堵の溜息が聞こえた。

『大丈夫。みんなそうなる。気持ちはわかるよ』

「……うむ。……戦いをつづけよう。この先に勝利があると信じる」

そう告げて、二、三の連絡事項を伝え、最後まで「王」と戦うことをもう一度誓いあつてから、クロトは電話を切った。

いつもより熱のこもったやりとりを傍らで聞いていたらしく、健太とサツキが不安そうにクロトを見ていた。

「……健太。サツキ。……気づかれぬよう、小口でゆつくり売りに入れ」

クロトは小声で、ふたりに頼む。

「え？ でも勝負は……」

「どうなるかわからん。だが、おれの直感はこちらが潮時だと告げている。お前たちは売り抜けるんだ、わかったか」

十五才の健太と十四才のサツキは怪訝そうに顔を見合わせ、すぐに文句をつける。

「でも師匠、他のメンバーは買いつづけてます！ ぼくらだけ抜けるのは……」

「クロノス全員におれの見解は伝える。判断は各自に任せるつもりだ。だがお前たちには命令させる、持ち株を全部売るんだ、やれ」

きつぱりと言いつけると、健太は困ったように眉をひそめるが、サツキは気丈に頷いた。

「お兄様の仰るとおりに」

「うむ。市場関係者に気づかれぬよう、くれぐれもゆつくり売るんだ、いまこの場から」

ふたりが了承したのを確認し、クロトは黒板の近くに突っ立って相場を睨み付ける。JJに歩み寄る。

「JJ、クロノス全員に伝えてほしい。おれの直感は、ここが潮時だと告げている。いまなら売り抜けできる、降りたいやつは降りろと」

いきなりそう言うと、JJが目を見ひらく。

「なんだよ大将、おれたちがいま売ったら『王』が大勝ちするぞ。ここまで戦ってきたつのにそれはないだろ」

「おれは降りない。最後まで戦う。だがおれの判断では、非常に不利な状況だ。確実に儲けを出したい人間は、いま降りろと伝えてくれ。この先は自己責任だ」

ひといきに告げると、JJの表情が複雑そうに翳る。

「な、なんだそれ、縁起悪いぜ。上げ相場はつづいてる、大丈夫だ、買うだけ儲けるって」

「うむ。そう思うなら勝負をつづけてくれ。おれも共に戦う」

「あ、ああ。それならいいさ。メンバーには伝えておく。これだけ胃の痛い戦いは、降りたい人間もいるだろうし。おれは戦うがな」

JJの顔色はすっかり青白く、頬もこけ、目の下にクマがある。クロトは少し不安になり、問いかけた。

「信用買いはしていないだろうな？」

JJはぴくりと頬を動かし、それからクロトへ真顔をむける。

「それなしで戦えないだろ。おれの場合」

「……………おい。やるな、と言ったはずだぞ」

「自己責任だ。おれの好きにさせてくれ。ここで勝てば、おれだって大富豪の仲間入りだ。こんなチャンス、逃してたまるかよ」

クロトの眼差しが、きつく尖る。カイルだけでなくJJまでも、借金をして「王」と戦っていた。負けたなら、途方もない額の負債を背負うことになるというのに。

しかしクロトは責める言葉が出てこない。カイルにもJJにも、プロ相場師の信念があつてこの戦いをつづけている。相場師の魂ともいえる信念に、他人は口出しすべきでない。

「援護する。無理はするな」

それだけ告げて、クロトは黒板に向きなあった。

浮かび上がるタペストリから、目の前で彩りが剥げ落ちていく。

——崩壊は、突然来る。

クロトの直感がまた、そんな警鐘を鳴らした。

それからクロトは主力七銘柄を買い支えつつ、市場の動向を探るために人気銘柄へ五千株の打診売りを仕掛けていった。

市場の反応は、徐々に鈍りつつあった。

数日経っても、打診売りによって下がった株価が回復せず、落ちていく。四度、五度、他銘柄へも五千株の売りを仕掛け、同じく回復しないことを確かめた。

相場は弱気へ転じている。バブルは峠を越えた、とクロトは読んだ。

事務所の黒板へ目を転じる。

浮かび上がるタペストリは、カイルと電話し継戦を決意した一ヶ月前よりさらに色あせ、黄昏の色をまもっていた。

一ヶ月前のクロトの見解を聞いて、クロロス十八名のうち健太とサツキ、トムスボンとメリッサ、その他四名ほどが買いをやめて持ち株の売りに入っていた。あとの十名は「王」との戦いの継続を望み、主力銘柄の株価維持に努めている。

——「王」は舌なめずりをしているだろう。

クロロスが戦いを継続したため、「王」がどれだけ空売りしようが株価は維持されている。もし一ヶ月前にクロロスが戦いをやめたなら、株価は下降を開始し、妥当なところで安定しただろう。戦いに勝った「王」は相応の利益を手にするが、それほど巨大な儲けではない。

——「王」にとつては、バブル崩壊までクロロスが戦いをつづけたほうがありがたい。

空売りは下げ幅が大きいほど儲かる仕組みだ。クロロスが総力を結集して維持している株価も、バブル崩壊となれば持ちこたえることができず、一気に奈落の底へ下落する。そのとき「王」がこれまで五億ドル以上もつぎこんで空売りした大量の株は十倍、二十倍に膨れあがり、小国の国家予算に匹敵する資金を「王」ひとりが得ることになる。「王」はますます権威を増し、本当に世界の皇帝となってしまうかも。それもこれも、バブル崩壊までクロロスが懸命に株価を維持してくれたおかげだ。クロロスがいなかったら株価は早々に値下がりし、空売りの旨味を減じていたはず。

——これで良かったのか……？

カイルを見捨てるわけにいかないから、クロロスを巻き込んで戦いをつづけた。その選択肢に後悔はない。だがその結果、ますます「王」が強大になってしまふことは受け入れがたい。この敵が非常に強大で賢い相場師であることはもう思い知った。こんなずる賢いやつがこれからさらに二十倍、三十倍の資金を得て権勢を高めてしまったら、世界の先行きはどうなっ

まうのか。

案じたそのとき、傍らから女性の声が届いた。

「クロトさん。お久しぶりです」

少しやつれた感じのメリッサが、いつの間にか事務所へ入り込んで来ていた。ここ二ヶ月ほど自宅にこもりきりで研究に明け暮れていたようで、会うのは久しぶりだ。

「うむ。どうした、ただならぬ気配だが」

相変わらず化粧気のない顔に、ざんばらの赤毛をなびかせて、メリッサは憔悴した目を力なくクロトへむける。

「……はい。……少しばかり気づいたことがあります。お話させていただきたく」

メリッサにソファを勧め、クロトは対面に腰掛ける。ダイニングテーブルに、メリッサはオプション取引所の取引記録が記された書類を何枚も置いて、それから自分の研究ノートをひろげた。

ノートにあるのは、いまから二年半ほど前、メリッサに研究を引き継いだ懐かしのオプション取引最適化方程式だった。クロトとカイルが途中まで研究をつづけて結局投げ出した「現代錬金術」の完成を目指し、メリッサはカオス理論という独自のルートから研究をつづけていたわけだが。

「半年ほど前、仮の微分方程式がようやく組み上がりまして。ひそかに、わたしの式を使ってオプション取引を開始してみました。参考までに同じ銘柄で、カイル氏の方程式による取引と、クロトさんの方程式による取引も開始しています。総投資額は三百万ドル、取引銘柄は五十二、期限は五ヶ月です。その結果がこちらになります」

メリッサが差し出した損益グラフと決済書に、クロトは目を走らせる。実験に三百万ドルも費やしたメリッサの情熱もすごいが、結果もまた度肝を抜くものだった。

「……ごらんとおり、五十二銘柄の最終損益と平均利益率を、各人の方程式ごとに記載しています。カイル氏の方程式の利益率は平均九十五%。わたしの式は平均九十六%。クロトさんの式は……平均一千二百八十三%。……つまりクロトさんの方程式を使って百ドルのオプション取引をしたならば、千二百八十三ドルになって返ってくる計算です」

クロトは損益グラフに目を走らせながら、思わずまぶたを何度かしばたく。

あまり動揺を表に出す性質ではないが、これはさすがにこめかみに冷たいものが走った。

対面のメリッサが、至極真面目な目線を持ち上げる。

「……あなたはなにものですか？」

短い言葉のうちに、羨望と、嫉妬と、得体の知れないなにかに対する恐れが混ざり込められていた。

「わたしが最新のカオス理論を用いて構築した株式市場モデルより、あなたが仕事の片手間に

構築したブラックボックスモデルのほうが遙かに精度が高かった。……あなたは自覚もないまま、我々応用物理学者の三十年も先を行く微分方程式を、たったひとりで完成させていた」

屈辱なのか畏敬なのか、かすかに震えるメリッサの言葉が、クロトの耳に遠く響く。

過大だ、と打ち払うことも出来たが、目の前にこの結果を見せられると言葉が出ない。

これではまるきり――

「錬金術です」

メリッサの言葉が、まるで批難しているように鋭かった。

「有史以来四千年、当代一流の賢人たちが挑んで為し得なかつた究極の魔術を、あなたはここフォール街で完成させてしまった。この方程式を利用したものは、世界を救済することも、破壊することもできるでしょう。金融工学の発展に必要な段階を二段階ほどすつ飛ばして生まれたこの方程式に対応する規制を、いまの株式市場は持つていませんから」

メリッサは早口で一気に入そう告げると、息を整え、口調を落ち着けた。

「……以上を踏まえ、気になることが」

まだなにかあるのか。メリッサはバッグから新たな書類を引っ張り出す。

内容はこの十年のNYオプション取引所の取引高の推移だった。

「……ごらんとおり。二年半前、一九三四年一月ごろから、取引高が徐々に上がっていき、翌年からかなり増加しています。少々気になったため、取引された銘柄のうち特に利益率の高かつたものをピックアップし、取引開始時の各種数値をクロトさんの方程式に当てはめてみました」

メリッサの口調にわずかな緊張が紛れている。

悪い予感がクロトの背を伝う。

「……全ての初期数値が、ぴたりと一致しました。……なにかがクロトさんの方程式を使い、この二年半の間に、オプション取引所で十億ドル以上の荒稼ぎをした模様です」

言葉が出ない。

冷たいものがもう一度、こめかみを伝う。

「あなたは疑いなく天才です。同時に、恐ろしく愚かでもある。自身が錬金術を完成させたことに気づくことなく、成果を他人に開陳し、あるうことか投げ渡してしまつた。もしも受け取つた側がこの方程式の真実の価値に気づいたなら、そのものは世界を支配するでしょう」

畏怖と憧憬を編み込んだメリッサの言葉が、クロトに真実を悟らせる。

はつきりと言葉にはしないが、メリッサの言いたいことはもう、クロトにはわかっていた。

――全て、畏か。

目に映る世界が凍り付き、ばらばらに砕けるさまを幻視した、その刹那。

「おいおい……冗談だろ、なんだこれっ!」

株価を表示した黒板を睨んでいたJJが裏返った声をあげる。

傍ら、トムスポンもあんぐりと半口をひらき、チョコレートマンが書きつける数値を凝視する。

「これは……大口の売りが連鎖しているっ!」

サツキが口元に手を当て、隣の健太も呻く。

「これ……ちよつと……なにがあったの、普通の下がり方じゃないっ!」

緊張した表情のチョコレートマンが、無線イヤホンでNY証券取引所にいるブローカーの悲鳴じみた報告を受け、劇的に下がっていく株価を荒い手つきで黒板に書きつけていく。

なにが起きたのかわからない。だがともかく群集心理に大きな異変が起きた。

昨日までバブルに浮かれていた大衆が、今日いきなり一斉に夢から覚めたような。

またたくまに売り注文が広がっていく。わずかな時間で主要指標は二十%、投機銘柄指標R

CAは三十五%、文字通りに転がり落ち、落下の勢いを加速させる。

「王」と戦いを繰り広げた主力七銘柄はもちろん、そのほかクロノスの所有銘柄、それ以外の銘柄までもが足場を失ったように、目の前でなだれ落ちていた。

絶望の色をたたえたチョコレートマンが黒板に手を走らせるたび、百万ドル単位の財産が消えていく。

「やめろ、嘘だろやめてくれ、神様なんでこんなときにつ!」

JJの悲鳴が涙声になる。チョコレートマンのイヤホンからもブローカーの絶叫が漏れ聞こえてくる。

いきなり騒然とはじめたトレーディングルームを見渡し、クロトはひとり、自失するしかない。

——最初から、全て、このときのためか。

止まってしまった思考が、明かされた真実の残酷さを反芻させる。

はじめから、ここに来るまでの道筋までも、予定されていた。

そしていま、張り巡らされた策略は当然の帰結を迎えようとしている。

——完全に騙された。

——おれの負けだ。

クロトはその事実を悟った。

「やめろお……っ!」 売りだ、売ってくれ、もうダメだ、全部売れええっ!」

左手で頭を掻きむしりながら、JJは半狂乱の体で右手に受話器を掴み、取引所にいるブロー

カーへ血のにじんだ叫びをあげる。受話器のむこうから、フロアに居合わせた投資家たちの同じ悲鳴、同じ叫び声が漏れ聞こえてくる。売れ、売らんた、売れ売れ全部売れ。突然殺到した売り注文が、フォール街をさらなる混沌へ叩き落とす。

他のスタッフも受話器を握り、売り注文を入れようとするが。

「ダメだ、電話が繋がらない!」「証券会社の電話回線がパンクしてる、売れない!」

全国の投資家が一斉に電話するため、売りたいくても売れない。その間にも、みるみるうちに相場は下がり、大切な資産が半分になり、三分の一になり、やがて限りなくゼロに近づく。相場師の叫び声がフォール街にこだまして、なにごとかと野次馬が一人人ほど通りに集まり、ついには騎馬警察官まで派遣され、NY証券取引所前に入場規制のロープが張られる。

その日、フォール街の高層ビルから身投げした投資家は十一人。

街の名前の通り、空から投資家が落ちてくる街の面目躍如だった。

午後四時、悪夢の取引を終えてから、クロトの事務所には絶望が沈黙となつてたちこめていた。

一日で九百万株が売られ、平均株価は一日の下げ幅として最大の十四%下落、ガメリア株の一兆四千億ドル分が消えてなくなった。

「合衆国が壊れる……」

呆然としたトムスポンの言葉が、いまの状況を正確に伝えていた。

クロトはソファーに腰掛けたまま、黒板に浮かび上がる虚無の色をしたタペストリを見やっていた。

不思議に悔しさはなかった。ただ、言ひしれぬほど寂しかった。真夏だというのに、手の先がかじかんで震えていることに気づいた。

冷気はクロトの全身へ伝播していった。細胞が全て凍結しそうなくらい冷たい。知らずクロトは自分自身を抱きしめて、震える歯の根を噛み合わせた。

三週間後、のちに「世界恐慌」と呼ばれるフォール街に端を発した株価大暴落事件の全容が明らかになった。

失われた株式価値は五兆ドル分、ガメリア合衆国GNPの約半分が消えた。

工業生産力は5%下落、今後も続落すると予想される。現在百五十万人の失業者は来年には倍の三百万人になることが見込まれ、需要も減少、ラジオ、冷蔵庫、自動車などの販売数は半減するだろう。

全財産を失い、多額の負債を抱えて自殺した投資家は恐慌後の三週間だけで百名を超えた。

荒廃しきったフォール街という廃墟に、ひとり、「王」が君臨していた。

悪夢そのもののバブル崩壊劇にあつて、ただひとり「王」だけがその予兆を看破し、十億ド

ル近い空売りを行って、見事に勝った。

のちに「世界恐慌」と称されるこの株価大暴落にあつて、「王」が得た資金は五百億ドルを超えていた。他の一流相場師たちがごとごとく手痛い損失を被つたいま、もはや「王」に太刀打ちできる相場師はフォール街にも、外国の金融市場にも存在しない。相場師の死骸が積み上がった焼け野原に、勝者たる「王」は泰然と君臨し、今回の災厄をおのれのカネへ変えていた。誰も「王」に逆らえない。

ガメリア大統領さえも「王」の意向を尊重せねば、来期の再選はかなわない。

「フォール街の王」であつた彼はいまや世界最高の権力を掌握し、地球に君臨していた。

その足下には幾多の相場師の亡骸がうずたかく積み上げられていて、亡骸のなかにはクロノスのメンバーも含まれていた。

九月二日。

曇り空のした、参列者は少なかつた。

マンハッタン島の対岸にある広々した墓地。

ばかりとひらけた緑の芝生に、碑銘を空へむけた石碑が整然と居並び、そのひとつの周りにわずかな親族とクロノスの五人が喪服すがたで集まつていた。

クロトは、サツキと健太、メリッサ、トムスポンと一緒に、JJの名前が刻まれた石碑にむかい頭を垂れていた。

参列者に正対してうつむいているのは、JJの愛妻ミランダだつた。その傍ら、四才になる娘が、小さな手で母親のスカートを握りしめ、不思議そうな表情で一同を見ていた。

神父が聖書の一節を読み上げて十字を切つた。参列者たちが石碑に花を手向けていく。

ミランダはうつむいたまま動かない。

JJの亡骸からは薬物が検出されていた。どうやら失意のあまりドラッグに逃げ、衝動的に高層ビルから身を投げたらしい。残つた借金五百三十万ドルはクロトが立て替えた。バブル崩壊前に打診売りをして得た現金は、これでほとんど飛んでしまった。

クロノスの五人は、言葉を無くして風に吹かれていた。

ぼつぼつ、雨が降ってきた。

葬儀が終わり、神父が去つてから、ミランダは顔を上げて、まだその場に残っていたクロトへ歩み寄つた。

「主人がいつも、あなたのことを自慢してたわ」

気丈に悲しみを呑み込んで、平静を取り繕い、ミランダは言葉をつづける。

「あなたに憧れていたみたい。わたしが嫉妬するくらいに。天才がおれを認めてくれた、おれだつてがんばればあいつみたいになれる、つて」

微笑みのむこうから、いまにも涙が溢れてきそう。ミランダは懸命に、ともすればかすれようとする言葉を紡ぐ。

「あなたのこと、おれの友達だ、って自慢してた。肌の色は違うけど、頭が良くて、ぶっきらぼうだけど本当は仲間思いのいいやつなんだ、って」

くしゃっ、とミランダの端正な顔立ちが歪み、嗚咽混じりの言葉が漏れる。

「……あのひとのこと、忘れないであげて。……時々でいいから、思い出してあげてね。あなたが覚えていてくれたら、JJもきつと喜ぶと思う」

そのあとは言葉にならなかった。うつむいて肩を震わせるミランダへ、クロトは静かな言葉を贈った。

「……JJはおれの友達だ。……忘れるわけがない」

本当の気持ちだった。出会って以来三年半、クロノスの最初のメンバーとして、JJはとても大きな働きをしてくれた。金融緩和を読めたのも、JJが持ってきた秘匿情報のおかげだ。人種差別意識を持たず、引きこもりがちなサツキを何度か遊園地や買い物に連れ出してくれた気のいい青年だった。

「……ありがとう」

ミランダはそう言って、うつむいて泣いた。

雨が強くなってきた、ミランダの足下を濡らす涙と混ざった。四才の娘がきよとんと、泣きつづける母を見上げていた。

「……JJの仇を討とうと思う」

クロトはミランダに告げた。泣き濡れたミランダの瞳が持ち上がる。

「JJを騙したヤツに、おれが罰を与えてやる」

全く表情を動かさずにそんなことを告げるクロトを、しばらくミランダは黙って見やり、それから目を閉じて首を左右に振った。

「……聞いてた通り。とても仲間思いなのね」

ミランダはクロトを抱きしめて、耳元に口を寄せた。

「……なにもしなくていい。……これ以上、不幸なひとを増やしたくない」

「……………」

「JJの借金を返してくれてありがとう。それだけで充分だから。あなたは自由に生きて」

そう言ってミランダは抱擁を解き、気丈に微笑んでみせた。

クロトは黙って雨に打たれていた。夫を失い、悲しみのどん底にいるというのに、この白人女性は復讐も望まず、クロトのこれからの気遣ってくれる。

ガメリア人にも、良い人間と悪い人間がいる。日之雄人と同じだ。肌の色や国籍でひとくくりに善悪を決めつけるべきではない。

そして——国籍を問わず、他人を騙し、踏みつけにして自分だけ栄えようとする人間は、地

獄へ落ちるべきではないか。

喉元が焼き付くようなすさまじい怒りがクロトの胸の底からこみあげてきた。血液が沸騰するような、これまで経験したことのないほどの激情だった。

——おれは、許さない。

——許してたまるか。

クロトの形相がまたたくまに、殺気を帯びる。

感情を制御できない。

ひとり、身を翻し、早足で墓地を去っていく。

サツキが追いかけてきたが、健太とトムスポンに止められた。その場にいる全員が、クロトがどこを指しているのか理解していた。

「お兄様……」

傘もささず、雨に濡れながら去っていくクロトの背中を、サツキは心配そうに見送った。

打ち付ける雨は激しさを増していった。

マンハッタンの摩天楼を歩き抜けながら、行く手に立ちこめる銀灰色のとばりに、ガメリアに来て以来、起きた出来事が映像となって映し出される。

掘った小屋で貧乏暮らしをしていたこと。背中に罵声を浴びながら、黒板へチョークを走らせていたこと。カイルとの出会い。ラスベガスでのブラックジャック。NYへ来て相場師を目指し、クロノスに出会い、金融緩和でのし上がり、「王」との大勝負を演じ……。

雨をスクリーンにした映像のうちには、ほとんどカイルが寄り添っていた。

交わした言葉や、教わった教訓、くだらないジョーク。クロトの傍らを流れすぎていく言葉のなかに、カイルが事務所を引越す日、彼が告げたひとことがあった。

『レススン二十六。フォール街では友情など信じるな』

濡れ鼠のクロトは前方だけを見据えたまま、その教えを胸のなかで繰り返す。

何度も、何度も、その言葉をおのれの中核へ刻印しようとする。

だがうまく焼き付かない。どうしてもそれを突っぱねようとするなにかが自分の内面にある。

クロトは唇を噛みしめたまま、摩天楼を歩き抜ける。

エンパイアステート・ビルに辿り着き、エントランスで来訪を告げると、黒人警備員はさぶ濡れで喪服姿のクロトをうさくさそうに一瞥したが、訪問先の許可を受けて先へ通す。

クロトはエレベーターへ乗り込み、八十五階のボタンを押した。

アポイントもなく現れたクロトを、受付嬢エステラはいつもと異なる冷たい態度で出迎えた。普段なら顔パスなのだが、今日はわざわざオフィスへ内線を入れ、対応を窺う。

「黒之氏のボディチェックを」

内線を切ったエステラは、銃を持った警備員に事務的な態度でそう言う。凶体の良い白人警備員がクロトの全身に手を這わせ、武器を携帯していないことを確認してから、顎でオフィスの扉を示した。

クロトは厳しい眼差しのまま、櫛の扉をあける。

だだっ広い室内ではいつものようにイヤホンとインカムを付けた七、八名のスタッフとチョークマンが忙しそうに立ち働いていた。大きな黒板には、今回の恐慌で暴落した主要銘柄の値動きが二百以上も書き記されている。

「大統領選の激戦地、勝敗を決する十二州の主要企業の株だ」

横合いから、聞き慣れた安穩とした声が届く。

「この二百企業の大株主になってしまえば、大統領もぼくの言うことを聞かざるを得ない。株価は底を突いたし、まさに買い時だよ。他の投資家が息も絶え絶えのいま、ぼくの独り勝ちもいいところだね」

クロトは瞳のなかへ殺気さえ込めて、相棒を振り向く。

なにこともなかったかのような穏やかな表情のカイルが、オフィスチェアの肘掛けに両手を乗せて、組んだ足を投げ出し、薄く笑っていた。

「JJは残念だった。あれで繊細なところもあったから。相場師にはむいてなかったかも」

残念さなど微塵も感じさせない軽い口調でそんなことを言うカイルを、しばらく黙ってクロトは睨み付けていた。

迸ってくる激情をなんとか抑えつけ、かろうじて抑揚のない言葉を紡ぐ。

『『フォール街の王』など存在しなかった。あれははじめから、お前の作り話だ』

クロトの指摘に、カイルは全く動じる様子もなく、ただ薄い笑みをたたえるのみ。

「全く以て恐れ入る。おれとはじめて会った日から、お前はいつかおれを罫に嵌めるために、フォール街の王という架空の敵をでっち上げ、存在を信じ込ませた。おれはまんまとお前の話を鵜呑みにし、存在しない敵を相手に五億ドルを費やした」

クロトは蒼白色の瞳をぎらりとたぎらせた。

「クロノスへ大量の空売りを仕掛けたのはお前だ。なにしろこちらの手の内は全てお前に筒抜けだからな。さぞかしやりやすかったことだろう。クロノスはお前のいう『王』の存在を信じているし、お前にそんな大量の資金があるなどと考えてもいない。だがお前には、おれたちに秘密にしていた別の資金源があった」

「……………」

「お前はおれの方程式を使い、この二年半、オプション取引所で十億近い儲けを出した。お前が事務所を引っ越すのを決めたのは、あの方程式の研究を止めると決意した直後だ。お前は密

かにあの式の価値を見抜き、ひとりで荒稼ぎするために事務所を出た」

カイルの笑みの底に、ただならぬなにかが浮かび上がろうとしていた。

おそらくは細心の注意を以て隠し続けてきた、カイル・マクヴィルという怪物の本性。

「十億ドルはクロノスへの攻撃のために投資された。クロノスが躍起になって戦うほど、いつか来るバブル崩壊の日、お前の儲けは大きくなる。だからこそお前は、戦いをやめようとしたおれを必死に引き留め、戦いを継続させた。あのときクロノスが戦いをやめていたら、お前の儲けはいまの半分にも満たないはずだ」

クロトは感情を抑制したまま、ただ事実だけを突きつける。

話すほど、当初の怒りは消えていった。

代わりに湧き上がってきたのは、カイルへの哀れみだった。

いままさにクロトの目の前で本当の表情を露わそうとしている悲しくねじ曲がった怪物を、クロトはこころの底からかわいそうに思った。

「間違いがふたつある」

肘掛けに置いた手を立てて、カイルは頬杖をつき、上流白人（ワस्प）特有の全てを見下す目つきでクロトを遠く見やった。

「きみの方程式が稼ぎ出した額は十億ドルではない。正確には十六億七千万ドル。収益率もきみは五百四十%と見積もっていたが、正しくは千二百八十三%だ。倍以上も低く見積もるなんて、普段の態度とうらはらに、きみの謙虚さは病気だね」

カイルの言葉はこれまで聞いたこともないほど冷たく乾いていた。あの軽薄なへらへら笑いもひょうひょうとした態度もかなぐり捨てた、自分以外の一切を信頼せず寄せ付けもしない、氷像のような人間。

「そして——もうひとつ。こちらの間違いのほうが大きい」

にたり、とカイルは笑うと、ゆっくりと立ち上がって南向きに大きくひらいたガラス窓へ歩み寄る。

銀灰色をした雨のとばりがマンハッタンを包んでいた。

彼方、フォール街の摩天楼が墨絵みたいに黒く浮かび上がっていた。

垂れ込めた雲の下腹に、稲光が爆ぜていた。不吉な唸りをあげながら、時折、窓の外へ紫の閃光が迸る。

「フォール街の王は存在する」

彼方のフォール街が、雷光に浮かび上がった。

「いまきみの目の前に」

二度、三度、立てつづけの稲妻がマンハッタンに交差する。青紫に染まったフォール街の摩

天楼が、中世城塞さながら「王」の背後に佇立する。

「指先ひとつで大統領の首をすげ替え、大国を戦争に巻き込み自分だけが肥え太るフオール街の王、カイル・マクヴィルがいまここに存在している」

鉤状に折れ曲がり、空中を思うまま裂いていく稲光を背景に、『王』はクロトへ凄艶な笑みをたたえた。

「きみがわたしを生み落とした」

眼鏡の奥、翡翠色の瞳はクロトの知らない嘲侮の色をたたえていた。

「きみの方程式とクロノスが、存在しないはずの『王』をこの世界へ出現させた」

「王」の口の両端が、耳にむかって切れ上がる。

「おかげで地上最大の権力を獲得できたよ。わたしはいま事実上、この世界を統治している。

ガメリア大統領さえわたしの意向に逆らえない。邪魔な他国を煮るも焼くも、わたしの思惑ひとし」

「……………」

「日之雄を救いたい、と言っていたね？」

「……………」

「なにができるかわからないが、ともかく自分の力を日之雄のために役立てたいと、きみは確かにわたしに言った。その気持ちに偽りはないな？」

「王」は廷臣に対するように、典雅な笑みを咲かせてみせる。

「きみにできることがある。わたしの足下に跪くのだ」

どこからか、はじめてカイルに会った日に聞こえた、破調のメロディが響いてきた。

「慈悲を乞いながら、わたしの靴を舐めたまえ。そうしたなら日之雄をガメリア五十一番目の州に加えてあげよう」

調律のくるったオルゴールじみた、悲しくひしゃげた不格好なメロディ。

「舐めなければ、日之雄を滅ぼす。八千万の猿を皆殺しにしてやる。わたしは以前からきみの生意気な態度が気に入らなくてね。薄汚いヤップの分際で上から目線の物言いが、いつも気に障って仕方なかった」

和音を紡ぎたいのに紡げない。悲しい音しか鳴らせない、壊れた楽器。

「跪け。靴を舐めながら命乞いをしろ。家畜（ヤップ）は家畜らしく、人間（白人）へ奉仕する姿勢を示すのだ。それならば八千万もの汚い猿に、生きることを許可してやろう」

クロトは黙ってカイルの言葉を聞きながら、かつての相棒のなれの果てを遠く見やった。

いや——もしかすると、はじめて会ったときから、カイルは壊れていたのかも。

『ひとのかたちの溶け落ちたバケモノの群れだよ』

かつてカイルの言った言葉が、いままたクロトの耳の奥に鳴った。

『膨張に取り憑かれたバケモノが、終わらないダンスを踊っている』

踊るほど肥え太っていく醜いダンスを、目の前の哀れな男は終えることができない。

『相場師も、ガメリアという国も、ただ握ったものを失わないために戦いをつづけている。幸せになるためじゃない、惨めに踏まれなかったために膨張をつづけているんだ』

目的を持たず、幸福すら求めず、ただおのれを肥大させ、周囲を屈伏させることにのみ異常な執念を抱くバケモノ。

膨張をつづけたその先に地獄しかないことがわかっているとしても、後続するバケモノに引きずり下ろされないために、自らを膨張させつづけるしか生きるすべを知らない。

眺めているだけでこつちが泣きたくなってくる、これほど哀れな生き物がこの世界には存在するののか。

クロトの口が、勝手にひらいた。

「札を言うぞ、カイル。生まれ持ったこの力をどう使えばいいのかこれまでずっとわからなかったが、お前のおかげで答えが見つかった」

カイルの笑みが、やや翳る。

「おれがお前を助けてやる」

毅然と胸を張り、クロトは目の前の迷える哀れな子羊を見下し、告げる。

「おれがお前を生んだなら、その責任を取らねばならん。お前を打ち倒し、腐った性根を叩き直そう」

こちらを見据える「王」の表情に、侮蔑の代わりに新しい色が浮かびはじめた。

こめかみが痙攣をはじめめる。眉根に皺が寄り、翡翠色の瞳が底光りして、口元がわななく。

「……身の程を弁える、黄色い猿が」

視線に憤怒を物質化するほど練り込んで、「王」はクロトを見据える。

「……わたしを倒す？ ガメリアもこの世界も従えたいまのわたしを、無一文の有色人種がどうやって倒す？」

問われたクロトの口の端が、斜め上方へ吊り上がる。

「ガメリアも、世界も、お前のものか？」

「……まだ理解していないのか。カネは力だ。力は正義だ。ガメリア大統領を従属させたわたしは、指先ひとつで国家を滅ぼすことも、救うこともできるのだ」

ふん、とクロトは鼻を鳴らし、

「日之雄を舐めるな、ガメリア人」

低く抑えた声でクロトは告げる。

「カネは力？ 力は正義？ そんなさもしい理屈がまかりとおる世界など、おれがこの手で破壊してやる」

辛いとき、苦しいとき、絶望の淵に立ったとき、いつもそうしてきたように。

クロトは不敵な笑みを口の端に刻み、立ち塞がる巨大な敵を睨みつける。

「軍事と経済がガメリアの強みか。ならばあらゆる手段を使って経済を破壊し、軍事力の源を断ち切れば良い。決めたぞカイル、お前が以前に勧めたように、おれは日之雄に戻って軍人になる」

啖呵を切りながら、クロトはいま、自分自身の本当に進むべき道を見出していた。相場師になって金儲けする時間は終わりだ。

これからおれはガメリアを倒すために、持って生まれた全ての能力を費やそう。

「日之雄でのし上がってやる。軍人としてガメリア艦隊を打ち破り、同時に相場師としてフォール街を叩き潰す。おれにしかできない仕事だ。楽しくなってきた。ここで過す時間は終わりだ。明日から帰国の準備に入る」

相場師としての自分にずっと違和感を抱いていたが、この経験に大きな意味があったことがいまのクロトには理解できていた。

凄絶な笑みが消え失せて、代わりに朗らかな感情がクロトの表情に立ちこめる。

進むべき道がようやく見えた。

自分自身に満足しながら堂々と歩める、おれだけの王道が。

「数年かかるだろうが、楽しみに待っている。そのうちお前の耳にも、軍人になったおれの活躍が届くだろう。おれに引きずり下ろされるまで、しっかりその椅子にしがみついているよ、相棒。ではな、世話になった」

言うだけ言って、クロトはきびすを返し、歩み去る。

カイルは呆然とその背中を見やり、我に返って、言葉を投げる。

「……本気でガメリアに勝てると思っているのか？」

クロトは歩みを止めて、横顔で返事する。

「……お前がおれに勝てるのか？」

質問に質問を返すと、「王」の表情が憎悪に染まった。

挑発に答えようと「王」は言葉を探すが、適切なものが見当たらない。

「王」の答えを待たず、クロトは不敵な笑みのまま告げた。

「本気で来い。でなければおれには勝てんぞ。ではな」

そう告げて、クロトは櫛の扉をひらき、カイルのオフィスを出ていった。

取り残されたカイルは呆然と、閉ざされた扉を見つめていた。

ゆっくりと、胸の奥から様々な感情が湧きだしてくる。

あまりにも多彩すぎてひとつひとつの成分がなんなのかわからなかったが、最も大きいものは屈辱だった。無一文の有色人種の間際で、現在のカイルの権力に屈する気配を微塵も見せないクロトの立ち振る舞いが、憎くて、眩くて、うらやましかった。

「猿が………!!」

吐き捨てても、微細な感情の渦巻きが消えてくれない。スタッフが誰もいなければ窓ガラスに頭を叩きつけていたかもしれない。それほど行き場がなく、もどかしく、消えてくれない感情だった。

——なにをうらやむことがある。

——なにも持たない一文無しがうらやましいはずがない……！

カイルは執務机に戻り、眼鏡を外し、片手を顔に当てて瞳をぎらりと燃え立たす。

「わたしは全て持っている。ガメリアも、世界も、全てわたしの持ち物だ……」

わざわざ言葉にして自分に告げるが、告げるほど虚しさと寂しさが広がるばかり、クロトへの憧れと羨望が増すばかり。

『頂点にしがみつき、陥落することを恐れ、追いつけてくる後続と死ぬまで闘争を繰り返す……。そのどこに幸福を見出す？』

かつてクロトに問われた言葉が、カイルの脳裏に舞い戻る。ぎい、と音を立てて奥歯を噛みしめ、カイルは片手で顔を抑えたまま、

「猿の分際で。人間にむかって説教か。身の程を弁えろ」

指の隙間から瞳を煮え立たせ、ここにいないクロトへ呪詛を吐く。

「思い知らせてやるよ、クロト。わたしの怒りを。ガメリアの恐ろしさを。日之雄を焼き尽くし、八千万人を根絶やしにして、白人の偉大さを教えてやる……」

その誓いを「王」はおのれの魂の中枢に刻み込む。這いずるヤモリに似たあの醜い島国を叡智の業火で焼き尽くし、クロトに吠え面をかかせてやる……。

その夜——

おんぼろ事務所に戻ったクロトを出迎えたのは、サツキだけだった。

金融恐慌により資金繰りが悪化し、チョークマンも警備員も受付嬢も、もういない。「王」との戦いのために買った株は全てただのゴミと化し、わずかに残った現金もJJの借金返済に充てたため、クロトは立派な一文無しだった。

サツキは恐慌前に持ち株を売っており、いまだかなりの蓄えがあった。夕食のホットドッグをコーラで流し込みながら、クロトは今日のカイルとの顛末を手短かに語り、サツキへ宣言する。

「そういうわけで、おれは日之雄に戻って軍人になることにした」

もう十四才になったサツキは、呆れたように兄の顔を眺めて、

「お兄様はいつも大事なことをいきなりひとりでお決めになるのね」

嫌みなのか諦めなのか、曖昧な返事を入れてから、口元だけでにこりと笑う。

「けれど、ついていきます。お兄様と一緒に」

クロトは視線を翳らせて、対面のソファーに背筋を伸ばして座る妹を見やる。

つややかな黒髪と桜色の唇、元内親王にふさわしい気品と清潔な雰囲気。性格もずいぶんしっかりしてきて、このところクロトに意見することも多くなってきた。

サツキは立派に成長している。これからもきつと、自分がそばにいないとしても、サツキは自分の力で生きていけるはずだ。

そう思い、クロトは告げた。

「サツキに頼みたいことがある。おれの為すべきことのために、お前にしか出来ない仕事を頼みたい」

「……わたししか出来ない仕事、ですか？ どのような？」

小首を傾げるサツキに、クロトは持って回った言い方をする。

「断らない、と誓ってくれ。誓わないなら頼まない」

え？ ともう一回首を傾げ、サツキはむくれる。

「そんな頼み方、卑怯です。内容もわからない頼みを受け入れるわけにいきません」

「おれのためだ。このままカイルをのさばらせるわけにはいかない。あの男の野望を阻止するために、サツキにしかできない仕事をやって欲しいのだ」

「だから、内容を先に」

「断らないと誓ってからだ」

「なんなのです、それは」

クロトは、下げたことのない頭を思い切り下げ、頼む。

「このとおりだ。兄の生涯の頼みだ。後生だから聞いてくれ」

サツキは息を呑む。クロトが他人に頭を下げるなんて、これまで一度も見たことがない。しかもその相手が自分だとは。

「どうしたのですかお兄様。普通ではありません」

「頼む。受け入れると約束してくれ」

頭を下げたまま、クロトは頼む。

しばらく兄の頭頂部を見つめてから、サツキは仕方なさそうに鼻息を抜いた。

「……お兄様がそこまで仰るなら。……わかりました。サツキは頼み事を断りません」

兄の顔がようやく持ち上がる。

「……本当だな」

「本当です。二言はありません」

「……いまの言葉、覚えておけよ。あとで持ち出すからな」

「なんなのです、しつこすぎます。なんでも仰ってください。お兄様の言うことに、サツキが逆らうことはありません」

「……よし。……では言うぞ。頼み事は……」

クロトはこれからサツキに依頼したい仕事について、話して聞かせた。

一時間後――

「絶対に、絶対に、絶つっつ対に」イヤです」泣き濡れてかすれたサツキの言葉が、抱きしめたクッションに飲まれていく。疲れ切った表情のクロトは頭を片手で掻きむしりながら、もう何十回も繰り返した言葉をもう一回繰り返す。

「二言はないと言ったはずだ！ 絶対に断らないとお前は確かに誓った！ お前は兄を騙したのか」

「騙したのはお兄様です」こんなの、ひどすぎます」絶対にイヤです」

「おれの言うことに逆らわないと誓っただろうが！」

「ずっと一緒にいると誓ったではありませんか！ どうしてわたしだけ、ヴィースへ行かねばならないのです」

「ガメリアにいれば収容所へ送られる！ 日之雄へ戻れば罪人だ！ お前が安全に暮らせるのはヴィースだけだ！」

ヴィース共和国は欧州の山深い地にある永世中立国だ。辺鄙な地にあるため戦禍を逃れるには最適であり、西洋列強が戦争状態に陥ったとしても、首都ジュネーブからは国際金融市場へアクセスできる。

「ひとりではない。健太も一緒に付けてやる。お前がヴィースにいてくれることで、おれは東京にいながらフォール街に戦いを挑むことができる」

永世中立国であるため、日之雄が欧州列強と戦争状態に陥っても、ヴィース大使館は閉鎖されず東京で業務をつづけられる。クロトはヴィース大使館を通じてジュネーブにいるサツキと連絡を取り、NY証券取引所での取引に挑みたいのだが。

「お兄様と一緒にいます！」

サツキは頑として聞いてくれない。クロトは根気よく言って聞かせる。

「一緒に日之雄に戻っても、おれは軍隊勤務になる。休暇は一年に一度あるかないかだ。日之雄人は一度犯した罪を許しはしない、お前はひとりで、ひどい仕打ちに耐えねばならん」

恐れ多くも皇王陛下を追い落とそうとした黒之家の罪は、未来永劫消えないだろう。クロトも罪人扱いを承知でひとり、祖国へ戻る覚悟だ。だがサツキが同じ仕打ちを受けるのは我慢できない。ヴィースへ渡って、信頼できる仲間と一緒に仕事に励んでくれるほうが、クロトはよほど安心できる。

「ずっと、ずっと、一緒にいると誓ったではありませんか！」

そう言ってサツキは泣き崩れる。クロトだってサツキと別れて暮らすのは辛くて仕方ない。

だが、サツキと離れ離れになってでも、果たすべき仕事がある。

「戦争になれば、東京とニューヨークでは取引が出来なくなる。サツキを中継しなければ、カ

イルと戦うことが出来ぬのだ。おれはガメリアの軍事力を殲滅し、サツキはガメリアの金融システムを破壊する。おれたち兄妹にしか出来ない役割を果たすためだ……っ」

思いを絞り出すようにして、クロトは説得をつづける。

「うっ、うっ、ううう……。イヤです、一緒にいますうう……」

頑として首を縦に振らないサツキに、それでもクロトは根気よく説得をつづけた。ふたりとも疲れ果て、どちらからともなく眠りに落ちて、朝が来てもまた同じ話を蒸し返し、健太とトムスポンとメリッサも同じ議題に巻き込んで話し合いをつづけ、一ヶ月後――。

十月の青空の下、サンフランシスコ港の棧橋には貨客船『万丈丸』が横付けされ、貨物の運び入れと乗客の乗り入れがはじまっていた。

出発まであと二十分。

棧橋のたもとで、手荷物を片手に提げたスーツ姿のクロトは、見送りの四人を振り返った。

「世話になった」

いつもの仏頂面でぎこちなく礼を言うと、はじめにトムスポンが進み出て、

「クロノスは滅びません。わたしがいる限り、フォール街で戦いをつづけます」

大真面目な態度でそんなことを言うトムスポンへ、クロトは苦そうな笑みをたたえ、

「無理はしないでいい。あんたの望むビジネスをすれば良い」

するとトムスポンは表情に怒りを映し、

「わたしは恥じ入っているのです……！ カイルのしたことは、同じガメリア人として最低な、恥ずべき裏切り行為だ。……わたしは、あのような卑劣な男がフォール街に君臨することを看過しない！」

クロトが思わずひるむくらいな勢いで、ぴっちりした七・三分けを乱しながら、下ぶくれの顔を真っ赤にたぎらせる。

「どうかガメリア人を軽蔑しないで欲しい。あんな男もいるが、それ以上に良心的なガメリア人も大勢いるのです。わたしはガメリアの良心にかけてカイルと戦う。あの男をJJと同じ目に遭わせ、腐った信念を改悛させてみせます！」

右手の拳を握り込み、ぐぬぬと低く唸りながら、トムスポンは宣言する。

クロトは少しだけ笑みをたたえ、

「軽蔑はしない。この国に来て、あんたのような良い友人を持てたことはおれの宝だ。ガメリア人を嫌いにはならない。また会おう」

ふたりはしっかりと握手をし、互いの健闘を祈った。少しばかり暑苦しすぎるところもあるが、トムスポンが規範と道徳を大事にする善良な青年であることは知っている。クロトがいなくなっても、クロノスはトムスポンが支えていくのだろう。

「寂しくなります。一日も早く、また会える日が来ることを祈ります」  
つづいてメリッサがクロトに告げて、右手で軽く握手した。

「例のオプション取引方程式、あれはまだ完成ではない。きみならさらなる収益率の方程式を完成させると信じている」

クロトの言葉にメリッサは頷き、

「はい。カイルだけにあれを利用させません。あなたの残した研究を基礎に、究極の資産運用アルゴリズムを目指します」

相変わず化粧もせず、髪の毛もぼさぼさだが、視線だけは冴えて鋭い。

「ああ、頼む。きみのやり方でクロノスを支援してくれ」

無表情のまま頷くメリッサの次に、サツキが前へ進み出た。

長い黒髪が港の風にそよいでいた。白いブラウスに紺のスカート、十四才になり大人びた表情は、まだ少し悲しみを残している。

「納得はしていませんが」

まっすぐクロトへ蒼氷色の瞳を送り、サツキは澄んだ声でそう言う。

「お兄様の足手まといになりたくありません」

クロトは首を左右に振って、

「お前が足手まといになったことなど一度もない。これからも、ない。お前はヴィースで重要な役目を担うのだ。頼むぞ」

「……はい」

サツキは頷いて、それからクロトの背中に両手を回した。

「……わたしの仕事を果たします」

クロトも妹の背に両手を回し、なじんだ体温を受け止める。

ずっとふたりで生きてきた。これから距離は離れるが、それでも一緒にいる。

「いつか、また会える」

「……はい」

「この仕事が終わったら、また会おう」

「はい」

クロトは軍人としてガメリア艦隊を殲滅し、サツキは相場師としてフォール街を破滅へ導く。その仕事は大きすぎて、本人たちでさえそんなことが出来ると信じ切れていない。だがどんな結末を迎えることになろうと、巨大すぎる目標へむかって走ると兄妹は決めた。だから約束を果たすまで、離ればなれでも耐えるのと誓った。

抱擁を終え、クロトは健太へ目を移す。

十五才の健太は緊張した表情で背筋を伸ばし、

「師匠、どうかお元気で！ ジュネーブで連絡をお待ちしています！」

健太はクロトの依頼に従い、サツキと一緒にヴィース共和国へ移住し、相場師として活動することに同意した。東京にいるクロトからの指示があれば、フォール街に残ったトムスポン、メリッサと協力して「王」との再戦に挑む覚悟だ。

「うむ。頼むぞ」

クロトが差し出した右手を健太は両手で握りしめ、

「お嬢様はぼくがお守りします！ 命にかけてお守りします！ 師匠はどうか安心して、ガメリア艦隊との決戦に備えてください！」

誠実さを全身に映し出して宣言する。うむ、とクロトは頷き、片手を健太の肩に回して、くると回転して見送りのひとびとに背をむけさせ、顔を健太の耳に近づけ小声で、

(サツキに手を出したらココロす)

(……………)

(三回ココロす)

健太はこわごわ、間近に寄せられたクロトの表情を見やった。

口の両端が耳にむかって切れ上がっていた。片側だけが切れ上がるのは何度か見たが、両側ははじめてだ。悪魔そのもののクロトの表情に心底震え上がり、健太は誓う。

「絶対に、手を出しませんっ！」

(うむ。声がでかい)

クロトは健太の肩から手を外し、もう一度、四人を振り返った。

この国に来て、五年九ヶ月。いろいろな経験を積むことができた。同じ目的を目指す仲間たちもできた。

「ガメリアに来て良かった。ここからそう思う」

告げて、口元だけで笑む。

「カイルは必ず、おれがこの手で玉座から引きずり下ろす。協力したいものはしてくれろと助かる。だがくれぐれも無理はしないでくれ。ではまた」

短く告げて、みなに背をむけ、タラップに片足をかけた。

「お兄様。どうかお元気で」

背中越しに掛けられたサツキの声に、クロトは片手を振って応えた。

汽笛が高く鳴り、万丈丸はゆっくりと栈橋を離れ、舳先を西方へむけた。

ここからホノルルを経由して横浜港まで、十五日間の旅路である。

クロトは上甲板の手すりに両肘を置いて、ゆっくり遠ざかっていく見送りの人々とサンフランシスコの街並みを眺めていた。

吹き抜けていく潮風に、わずかな感傷が薫った。群れ飛ぶ海鳥の高い声が、十月の青空に遠く響いた。

棧橋で手を振るひとびとのすがたが見えなくなり、建物も輪郭を失い、やがて彼方の摩天楼だけが海と空の境目に屹立していた。

薄れてゆくガメリアの街並みを見やりながら、クロトはガメリアという国に魅せられている自分に気づいていた。

傲慢で強欲で差別意識にあふれ、有色人種を踏みつけにして自らが肥え太ることを恥じ入りもしない。水平線の果てまで征服しようとする無邪気さと、失敗を恐れず新しい技術や学問を生み出していく創造力、欲望をカネへ変換する魔術的な金融システムを併せ持つ、この厄介な超大国は現在、日之雄を征服しようと虎視眈々、緻密な策略を講じている。

日之雄人からすれば嫌悪すべきこの国を、いまのクロトはどうしても嫌いになれない。差別意識はもつてのほかだし、そのあくなき領土拡張欲も辟易するが、しかしガメリアの国家精神の基調である「自由」と「平等」から日之雄人が学ぶべきものは多くある。

——日之雄ははまだ未熟な国家だ。自我が芽生えたばかりの若者なのだ。

そのことが、いまのクロトにはしみじみ理解できていた。この目で見て経験したガメリアは先進的な規範と道徳と論理を身にまとい、世界の先頭を顔を上げて走っていた。世界一の超大国にふさわしい、威厳と偉大さにあふれた力強い疾走だった。

だが、偉大さを認めるからこそ、負けたくない。

日之雄人として誇るものがあるから、ただひれ伏して許しを乞うことをしたくない。

『日之雄を舐めるな、ガメリア人』

カイルに叩きつけた自分の言葉が、潮風のなかに聞こえた気がした。

そうだ、これからおれは、日之雄人として誇り高く戦うために生まれた国に帰るのだ。

五年九ヶ月前、この国に來たときの自分は、ただ普通に暮らせれば文句ないと思っていた。

だがいま、クロトには明確な目標が芽生え、大きすぎる夢を果たすために全力を尽くそうという決意があった。

なにもかもガメリアのおかげだ。

サンフランシスコの摩天楼は視界の彼方に埋もれて、青空を背景にしていつの間にか、カイルの嘲笑が映じていた。

——ここから出して。

傲慢で寂しそうなその笑みから、カイルの声が聞こえた気がした。

——怖いよ、母さん。

クロトは薄く笑った。

「待ってる、相棒」

いまも遙かなニューヨークで後続を蹴落としつつづけているであろう相棒へ、クロトは語りかける。

「そこから出してやる」

もたれていた手すりから両肘を外し、クロトは海原へ背をむけた。  
「アメリカごと、お前を倒す」  
決意の言葉を自分へ投げて、クロトは不敵な笑みを口の端にたたえた。

《参考資料》

- 『ウォール街の物理学者』 ジェイムズ・オーウェン・ウエザーオール 早川書房  
『ディーラーをやっつけろ』 エドワード・O・ソープ パンローリング株式会社  
『世紀の相場師 ジェシー・リバモア』 リチャード・スミッテン 角川書店  
『相場師一代』 是川銀蔵 小学館文庫  
『世界恐慌 経済を破綻させた四人の中央銀行総裁』 ライアカット・アハメド 筑摩書房